
GLORIA

結城 カイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G L O R I A

【Nコード】

N 8 1 0 0 H

【作者名】

結城 カイン

【あらすじ】

すくねけいいち宿禰慧一と、9つ下の血の繋がった弟、すくねりんいち宿禰凜一の愛と葛藤のシリアストーリー。近親相姦は、本当に禁忌だろうか。兄弟での恋愛は成立するのだろうか。を、兄、慧一視点で描きます。弟、凜一視点「only one」と、連動。

「イリュミナション」 1（前書き）

基本、BL小説ですが、激しいHシーンは皆無でございます。

以下の物語と連動しております。

「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

「イリュミナション」 1

> i 3 2 9 1 — 2 7 3 <

世をいつわりの 黒染めの
僧衣の袖に 狂おしの
恋慕のほむら おしかくし…

寒の戻りが長引いて、桜の花は四月半ばになっても満開の姿を留めていた。

病院の待合室の開け放たれた窓から、ゆるい風に舞い落ちる桜の花びらに目を奪われながら、遠くから聞こえる赤ん坊の泣く合唱を快く耳にしていた俺は、ひときわ高く泣く声に思わず立ち上がった。弟、凜一の誕生の声を聞いた瞬間だ。

小学三年の春だった。

硝子越しに並べられた小さなベッドのひとつに寝かされた赤ん坊を、ひとつ年下の妹、梓と並んで見つめていた。

2800グラムと小さめではあったが、元気なベビーだった。

宿禰葵と書かれたカードのベッドに眠る小さな凜一は、この世に産まれたばかりの無垢な燐光を放っていた。

「赤ん坊とはよく言ったもんだわね。まさにコザルだわ。あ、泣くと益々おさるさん」

梓が屈託なく言う。

産まれたばかりだから仕方ないだろうと言う前に、又、口を開く。

「でも、自分と血の繋がった弟だと思つと、どんなサルでもこの上なくかわいくてたまらないわ。これが肉親の愛情っていうわけね、

慧兄さん」と、満面の笑みを湛えて梓が俺を見る。

俺も同じように感じていると応え、「彼は僕達に与えられた天の賜だよ、きつと」

「あら、慧兄さまにしては夢見がちなことを言うのね」

「だって、あれは…まさに光の象徴だよ。そこに居るだけで、僕達の心までも清浄にする力に溢れている」

「そうね、きつとあの子は私達を約束の地に導いてくれるわ」

「約束の地？」

「そう、人々が求めてやまない幸福の地よ」

「一緒に行けるといいね」

俺は梓に微笑んだ。

「きつと、行けるわ」

梓も俺に笑いかけた。

真つ赤な顔で泣いている凜一は、俺達の思惑など知ったことではないだろう。

母は元来身体の弱い性質で、今回のお産も危険だからと医者にも強く止められたが、父や周囲の反対を押し切って凜一を産むことを決めたらしいのだ。

俺と梓は母が亡くなってから、その話を聞いたのだが、命を賭してまで産んでくれた凜一であるなら、殊更に大事に育てようと心に誓ったものだった。

あまり家事をすることが出来ない母の代わりにハウスキーパーが家事全般を請け負い、母はもっぱら凜一の世話にかかりつきりになっていた。

しかし、母には十分な休養が必要だということで、夜の凜一の世話は俺と梓の係りになった。

どこの小学生に両親が揃っているのに赤ん坊の世話をやらせる親が

いる、と思っただが、父は出来るだけ家族の手で凜一を育てようと、些か勝手なことを言い張るので、俺達も渋々承知したというわけだ。

凜一はあまり病気もしない丈夫な子だったが、夜泣きだけは何故か毎晩のように続くので、昼間、真面目な小学生をやっている俺と梓は、慣れるまでが大変だった。

泣きだすと止まらない凜一を抱っこしては、手の空いた方がミルクを作って飲ませたり、オムツを替えたり。

ぐずる凜一を抱っこしたまま二時間以上も部屋の中をうろついたり、ひどい時は目が冴えて眠ろうとしない凜一を一晚中あやしたこともある。

ベビーシッターを頼んでくれと両親に言えば良かったのだが、いつしか梓も俺も、夜に仰せつかる凜一の世話が面白くなってしまっていたんだ。

すべては凜一の可愛さの所為なんだが、あの頃は学校が終わると一目散に帰宅し、母の傍にいる凜一の姿を飽きもせずに、始終見つめていた。

サルみたいだと言った梓の言葉は一体何だったのだろう。

人間とはこんなに美しい生き物としてこの世に存在しえるのだろうか…

俺は純粋な「美」を凜一の中に見いだしていた。

凜一は見事に美しかったのだ。

その容姿も魂も…

すべてが俺を魅了してやまなかった。

母は身体の弱い人だったが、豊かな感性の持ち主で、梓はその性質を母から受け継いでいた。思った事を躊躇いもなく、言葉にする。夢見がちでありながら、現実主義でもある。

母と梓は言葉なくても理解し合える師弟のように、仲が良かった。俺は傍でみて、随分羨ましがったものだ。

俺は、母が凜一を胸に抱き、傍らに跪く梓を見ながら、ルネサンスの聖母子像を思い浮かべた。完璧な三角形の図がそこにはあった。平和と家族愛：それは紛れもなく正しい秩序となる。俺はそれを眺めてはこの上もなく、満ち足りた気持ちになった。

女同士というものはああいう風に分かち合えるのか。じゃあ、俺と父親はどうだ？

… なにもない。憎みあうものも無ければ、なにひとつ分かち合えるものもない。

父親とはこういう縁であると諦め、せめてもうひとりの同性である凜一には、相当の信頼を分かち合おう。

俺は強く願った。

俺は両親への想いと梓との関係、そして凜一に対する愛情の質が全く違っていることを、凜一の誕生で知った。

多分それは兄弟という縁でむすばれた感情であろうと信じていた。だがそれも凜一が成長していくにつれ、少しずつ変わっていることに気づき始めていた。

きっかけは母の死だった。

母の存在は偉大だったといえよう。

それからの俺のマトモとは言えない感情を、母は少なくとも俺自身に判らせぬように鍵を掛けていたのだから。

母は知っていた。少なくとも俺が凜一に対してどんな想いで見つめているのかを。

その上で言うのだ。

「母さまはもうすぐ居なくなってしまうけれど、慧一は悲しまずにいてね。そして、凜一を守ってちょうだい。あの子を光に導くのはあなたにしか出来ないから」

その意味をすぐには理解できなかった。

母は俺に何を見たのだろう。俺には暗い闇しか見えていないというのに…

俺にこの無垢な弟を押し付けて…どうしろと言うんだ。

「片方の魂が居なくなってしまったわ。もう母さま以上に同じ色合いの魂には出会えないわね」

棺に眠る母を見つめ、梓が泣きじゃくる。

5才になったばかりの凜一は泣くでもなく、ただ黙って俺の喪服の裾を握り締めたまま身体ごと凭れかかる。

母が気に入っていた艶のある長い黒髪の所為で、凜一は喪服を着た日本人形のような。

「凜、お母さまとお別れするといいよ。ほら、抱っこしてあげるから」

「…お母さまは…こんな狭いベッドで眠っているの？」

「凜…お母さまは眠り姫になっちゃたのよ。もう千年しないと目覚めないわよ」梓が泣き笑いながら言う。

「じゃあ、僕の方が早く死んじゃうね。キスで起こせないよ」

俺も梓も驚いた。「死」の概念は理解できていても目の前の母の姿にそれを当てはめられないのか…それともそれもわかって言っているんだろうか…

すぐに後者だと悟った。

「お母さまは天国で僕を見守ってくれるのでしょうか？じゃあ、今までと同じじゃない。寂しくないよ、僕。慧も梓もいるからね」

俺と梓は顔を見合わせた。

屈託のない笑みで笑う凜一に何の罪があるのか。

回りの者は、その意味もわからないままに、あどけない凜一を哀れんで泣いていた。

母が亡くなってから、傍目には何も変わらないと思っていたが、今まで病氣知らずの凜一は体調を壊すことが多くなった。

熱を出したり、食事を取らなくなったりするので、病院に連れて行くが、医師は精神的なものだろうとしか判断しなかった。

父と俺たちは、昼間は家政婦さんとふたりでいる凜一に幼稚園に行くように勧めたが、凜一本人がそれを嫌がった。

「僕、おうちで慧と梓を待つてるから、早く帰ってきてね」と、泣きそうな顔で言われたら、俺も梓も無理強いは出来なかった。

学校から帰ると、凜一は広い庭でひとりブランコに乗ったり、砂場で遊んではいたが、その姿は寂しげで、帰宅した俺の姿を見ると、走り寄って抱きついてくる。そのくせ「寂しかった？」と、言うとかぶりを振るのだ。

素直じゃない様子もいじらしく、抱きついた凜一の黒髪を撫でてやっている、「源氏の君が紫の姫君を愛でられた心地がわかるんじゃない？慧一には」と、横で梓が素っ気無く言う。

或る夜、凜一の隣で添い寝をしていると、急に凜一が起きて、「怖い」と泣く。

怖い夢でも見たのかと問うと、「ちがう、あそこに怖いのがいるの」と、部屋の隅を指差す。

暗闇に目を凝らして見るが、何も見えない。

「何もいないよ、凜」

「ううん、いるの。僕を連れて行くってゆづの」と、しくしくと泣く。

俺は思った。

ああ、アレだ。シューベルトの魔王じゃないか。

「大丈夫だよ、凜、俺がいるだろ？」

「だって…怖いもん」

身体毎すべてを預けて俺にしがみつく凜一の身体は震えていた。

あの親父はどうやって最愛の吾が子を喪った？

…間違ってはいけない。

あの親父のように何も気づかないバカに成り下がる気はない。

魔王だろうと、死神だろうと渡さない。

これは俺のものだ。誰にも指一本触れさせるものかつ。

俺は凜一の指差す一点を見つめ、全身全霊を向け言い放った。

「去れっ！」と。

俺の声に、身の内で脅えていた凜一の体が一瞬だけわなないた。

凜一がゆっくりと顔を上げ、そこを見る。

「どう？まだ見える？」

「…ううん、もう、いないみたい」凜一はほっとした顔をして俺を見つめた。

「慧はすごいね」

心服した面持ちで俺に笑いかける凜一をこれ以上愛おしいと思ったことはない。

俺は勝ったと思った。

凜一を襲う悪夢にも、凜一自身にも…

俺は凜一を支配できる。王にさえなれると思った。

しかし、その企みは凜一の次の言葉にあっさり覆される。

「慧は僕の騎士^{ナイト}だね」

「…そう、なの？」

「そうなの」

呆れるほど簡単に王から臣下へと急降下だ。思わず苦笑いに口が歪んだ。

「じゃあ、梓は？女王様かな？」

「梓は乳母役だよ、僕のお世話係だもん」

「それじゃあ、凜は王様が王子様なのかい？」

「ううん、僕はね、お城なの。みんなを守ってあげて、お家に入れてあげて、それで攻めてきてもてつべきの壁で、みんなを守るの。すぐくがんじょうできれいなお城なんだ。すぐく高くてね〜てつぺんからは世界中がみわたせるんだよ」

「…それ、梓から教えてもらったの？」

「ううん、自分で考えたの。大きくなったら今度は僕がこわいのから慧を守ってあげるからね」

「うん…そうだね、凜はお城だから…俺を…救ってくれるね」

その晩、俺は小さな凜一をしっかりと抱きしめたまま一寸も離さなかった。

俺は時折凜一の背中に虹色のツバサを見る。

六枚の玉虫色に輝く羽は、光に溶けるようだ。

そして影に入る瞬間、発光するように輝きを増す。

「慧っ！」

喜色満面に湛えた凜一が、俺の名を呼びながら、胸に飛び込んでくる。

俺はその虹色のツバサが眩しくて目を閉じる。

身体に受けた凜一の重みを感じ、ゆっくりと目を開けると、そのツバサは夢幻のように消え去るのだ。

母の一周忌が過ぎた頃、父のロンドンへの転勤が決まった。

家族全員で一緒に行くか意見を求められた。

俺と梓は話し合った上、この家に残ることを選んだ。

父は俺たちふたりで凜一を育てるのは無理だと、母の姉である伯母に凜一の養育を頼んだが、俺たちは猛反対した。

今更凜一を他の誰かに預けるなんて、出来るはずも無い。

まさにあれは俺たちにとって、珠玉の宝であり、あれなしでは生きていく価値を見失ってしまう…そう思い始めていた。

それは肉親への深い愛情であり、真の慈しみであり、利己や打算など一片も無い。

少なくとも梓の方には曇らすものなどないだろう。

だが俺はどうだ。

凜一を独占したいという想い、支配しようとする圧力…

そしてわだかまる抑圧された感情。

光の影に潜む猥雑な欲情が覗き見する。

凜一は俺たちに良くキスをした。

それは母親の残した愛のある性癖でもあった。

キスは信頼と安心の印であり、凜一にとっては自然の行為だった。

凜一の上唇は富士の形を描き、その下にはそれを移す湖が艶めいている。媚びているわけでもないのに、どうしたらそんな魅惑的な顔ができるのだろう。

意識下で俺を誘っているのか？そんな妄想に囚われてしまうほどに、凜一はかわいいのだ。

その口唇が俺に触れる。

暫くの陶酔の後、やわらかい口唇から忍び込む凜一の舌が俺のソレと絡むと、凜一は掬い取るように離す。

そして保護欲をそそる満面の笑みで「慧、大好き」と言うのだ。
誰がこの子の無垢なる媚態に勝てようか。

同じように梓も凜一の誘惑には参ってしまったようだ。

凜一にお小言ばかりを言うくせに、キスのおねだりには勝てない。
同じようにキスの挨拶を受けるたび、梓の顔も陶酔と困惑の入り混
じった顔で、瞳を宙に浮かせていた。

俺たちは凜一に良く言い聞かせた。

キスするのは俺たちだけにしなさい、と。

こんな甘い蜜のような感覚は、ふたりだけの特権にしなければなら
ない。

凜一は人見知りもあまりしない為、家を出ると誰彼に対しても、気
前よく愛想を振りまく。当然その愛らしさから、大方の人は幸いの
笑みを返し、何かと良くしてくれる。

田舎から送ってきたからと珍しい果物やお菓子は当たり前で、上等
の服や靴、宝石までもこの幼子にやろうとするのだから、こっちも
たまったもんじゃない。

またもや凜一に言い聞かせなきゃならない。

知らない人に笑いかけちゃ駄目。話してもついて行ってもいけな
い。変なことをされそうになったら大声で叫ぶこと。

バカみたいに何度も繰り返し、俺と梓は世の親バカどもの気持ち
が嫌になるくらい判る気がした。

もしも凜一が世の中の悪の部分に犯されたら…と、思うと、居ても
立ってもいられない。

とうとう凜一を自分も習っていた空手と古武術に連れて行き、自分
の身は自分で守るよう、鍛錬させることにした。

かわいい凜一は育つにつれ、かわいさよりも整ったあでやかな美し
さという容貌になり、俺はまたそれに頭を抱えた。

凜一の塵ひとつない真っ向から迫る信頼と愛情の行為に、俺は年を追うごとに恐れを為していた。

ただの肉親の愛情表現ならば、それを受け止める俺自身が慌てる必要もない。母親だったら凜一の行為になにを恐れ戦く必要があるものか。

しかし俺は…凜一に肉親以上の感情を常に抱いていて、それが消え去ることもなく、また消すことも逃げることも出来ないままで、凜一の傍にいたのだ。

どれだけの忍耐力を必要としたと思う。考えただけでマゾヒストになれる。

弟じゃなかったらどれだけ救われたか…俺は一時期この妄想に囚われ、自分が貰い子であればいいとか、両親のどちらかが凜一とは違っていたらとか、少しでも肉親の縁から離れられる手立てを考えていた。

実際区役所の戸籍まで確かめに行ったのだから、藁にも縋る心持ちとはこういう事なのだろう。

なぜ凜一なのか。

なぜこの想いが凜一にしか向けられないのか。

これはもう妄執ではないのか。

なにかの呪いじゃないのか…

俺は何かが間違っただけで産まれてしまったのか…

これは本当に欲情なのか？

情欲とは愛情の本質ではないのか？

凜一を欲しいと願うのは裏を返せば、真実の愛と言えないだろうか…

それともこの猥雑な欲望は、時が来れば、ああ、あれはただの悪い

夢だったと笑えるものになるのだろうか…

俺は決して自虐的体質ではないが、凜一への邪まとも思える妄執にとりつかれると、その恐ろしさに身体の底から震える時があった。いつか、俺の箍が外れこの純真な弟を汚してしまうかもしれない。俺はその妄執が頭を横切る度、真正面から俺を見つめる凜一の視線から目を逸らし、見まいとした。しかし、目蓋を閉じても凜一の輝きは網膜を焦がすほどに眩しくて怯まない。俺はとうとう自分のこの嗜好を認めざる負えなくなった。

俺は13で性を体験した。中2になる春だった。まだ母は生きていた。

その頃の凜一はまだ幼く、さすがに性の対象にはしかねる存在だったが、さりとて彼以上に興味そるものは少なかった。

俺は自分をもてあましていたこともあり、また思春期特有の反抗心も高じて、日頃の優等生の自分を壊すものになりたがった。

塾に行く必要はなかったが、春の特別受講を友人から誘われ、俺は家から少し離れた塾に二週間ほど通った。

俺のクラスの数学教師は色白で眼鏡をかけた優男風の男で、有名大学のアルバイト講師だった。

教え方も上手く、俺はわからない事があつたら授業が終わっても納得するまでしつこく粘った。

勿論、裏はある。

彼はゲイだと思ったからだ。何故そう感じたのかは判らないが、後から考えれば同じ穴のムジナという事になるう。

彼もまんざらでもなく、夜遅くなると家まで送ってくれたりした。

特別受講も終わる日に、俺は授業が終わるとお世話になったお礼を言いに、事務室に向かった。

彼はこのまま塾を続けないかと引き止め、俺は残念だがと、はつきり断る。

彼は暫く考えた後、「ちょっといいかな」と俺の手を掴み、外へ連れ出した。

外は暗く丑三つ時とは言えないまでも、人通りは少なくなっていた。

「考えたんだけど……」

「何を？」

「宿禰君の事、このまま離すのは辛い」

「…どういう意味かわかりかねますよ、先生。はっきり言って下さい」

「君が好きだから…寝たいってことだよ」

「…いいですよ」

「…本当？」

「でも僕は、下にはなりませんよ。ご覧のとおりプライドが高いんですよ、俺は」

「…わかつてるつもりだよ。でもいいのかい？」

「二言は無しですよ、先生。あなたがそういう目で俺を見ていたのは知ってたからね。正直俺も初めてだから判らないことが多いんだ。それもご教授していただけたら、嬉しいね」

「…君って子は怖いね。その美貌に惑わされたのは間違いないけど…つかまっただのは僕の方ってわけだね」

「それではあなたの立場はないでしょう。僕はかawaii中学生ですよ、先生」

揶揄するように笑うと、それを見た彼は自分の白い顔を手で撫でた。俺はその夜、この男を抱いた。

俺はこの男と半年程付き合った。

それ以上付き合うと向こうが本気になりそうだったので、頃合を見計らって後腐れなく別れた。と、言っても彼と付き合い合っている間は、彼の友人の大学生の女や男どもを紹介していただき、いい経験をさせてもらったので、それなりに感謝している。

自分の性癖もはっきりとわかった。

結論としては女とやるより男とやる方が、断然に快感を得られる体質であり、俺はゲイなのだと自分で悟った。

少なからずシヨックはあったとしても、そう悲観することでもない。元々結婚にも恋愛にも夢を見てはいない。

俺にはもつと目の前にあるものを守りたいという生き甲斐がある

生き甲斐…もはやそれしかいいようがない。

学校では人当たりもいい誰にでも親切な優等生を演じていた。何の苦勞も無くイイヒトを演じられる自分自身を嘲りながら、見事に人を欺くことを嬉々としてほくそ笑む自分が居た。

部活や生徒活動を勧められても、家庭の事情という事で免除された。事情を話せば納得どころか同情さえ買うことができる。

俺は凜一以外の奴等にはなんの興味も沸かなかった。

校内の修了のチャイムと共に学校の門から飛び出すのが俺の日課となっていた。

俺は母とその傍らで無邪気に遊ぶ凜一と観ているだけでうつとりとし、俺を見て駆け寄る凜一にこの上もなく高揚するのだ。

或る日、母の傍らで眠る凜一を眺めていると、凜一の頭を撫でていた母が俺に言う。

「慧一はいい子になりたいわけじゃないのに見せたがるのね。長男だから周りの期待に応えようとしちゃうの。でもね、私はわかっているの。あなたが導く者ってことを。だから自分の思い通りに生きていいのよ」

俺は驚いた。今まで母がこんな核心めいた言葉を俺に言ったことはない。

俺は思わず許しの言葉を口にした。

「俺は…間違ってない？」

「全き正しく生きる者よ。手の中の炎を決して消さないでね」
母はそう言つと、眠る凜一を抱き上げ、俺に渡した。

「少し眠るから、凜一をお願い」と、ベッドに横たわり目を閉じた。

それから少し経った後、母は眠るように亡くなった。

あれは俺への慰めだったのか、指針だったのか…腕に眠る凜一の寝顔を見つめながら俺は何度も思い返していた。

俺はこの腕に眠る凜一を愛している。

この子の幸せの為なら、自分の身を犠牲にしても構わない。

何もいらない。この目も耳も足も…この子を抱きとめる腕が残ればそれでいい。

そう願うのは間違った愛なのだろうか…

いや、母は正しく生きるものと言った。ならば…

「大丈夫？ 慧」

まだあどけなさを残した7つの凜一が、俺の顔を覗いて首を傾げる。

「大丈夫だよ、凜」

「じゃあ、ここの計算問題教えてよ」

当たり前に繰り返される平穏な日常にさえ、俺は抑えきれない感覚に陥ることがある。

こんな幼子に抱く感情じゃない。

どんなエロ本や映画を見たって興奮しないのに、凜一が近づくとただならぬものを感じてしまう。

この信頼を裏切るくらいなら、俺は凜一の前から消えた方がまだ救いがあるんじゃないのか？

なにより梓に知られるのが怖かった。

あの聡い妹は俺が凜一に肉欲を感じていると知ったら、決して許さないだろう。

いや…それは梓も同じなのかも知れない。

あれは兄弟というより同志と言った方が近い。

「兄さんは凜一をどうしたいの？」

「どうしたいって…？」

「…抱きたいの？」

「馬鹿なこと言わないでくれよ」

「別に良いけど…兄さんの想いがどうであろつと構わない。でも凜一を傷つけたら私は許さない」

「…」

「私を失望させないでよね」

「わかつている！」

全うな正論に腹が立った。知っているのなら口に出すなっ！

梓の存在が俺を苛立たせた。

俺と梓は、凜一を取り合うライバル同士と言っても良かった。最終的にどちらが勝つのか…そんなひどい考えまで頭を掠める時がある。

俺は梓を妹としては愛しつつ、どこかで憎んでいた。

そう感じる自分が嫌でたまらない。

俺は凜一と梓から少しでも距離を取ろつと、家を出ることにした。

大学は都内に決めていたし、自宅からの通学は充分可能だったが、
敢えて独り暮らしをすることにした。

勿論ふたりから距離を置くことで、自分自身への客観視と抑制を補
う為だった。

勝手に決めたことで梓とも揉めるが、俺は決意を曲げなかった。

今に思うとひどい話だ。まだ高校生の梓ひとりに凜一を押し付けて、
俺は逃げ出したんだから。

凜一の学校行事は今までも出来るだけ参加していたし、それは引き
続き俺が引き受けることにしていた。

親がいないことで凜一に引け目を味あわせたくなかった。それに学
校での凜一の様子も見ておきたかったのもある。

彼は学校でも一風変わった存在で、誰にへつらうでもなく、また誰
を無視するわけでもなく、友人達とはしゃぎ、笑いあっていたが、
明らかに他とは存在感が違う。

ただそこにいるだけで目を引く者だった。

王の如く振舞っているので、心配もしていたが、凜一自身はその違
和感すら楽しんでいる風で、全く厭わなかった。

あれだけ回りに気を使わないで闊達に自由に生きていられる性格が、
俺みたいな奴から見れば羨ましい。

長い黒髪を靡かせて走る様は、昔観た冒険映画の英雄にも似ていて、
人目もはばからず見惚れてしまう。

凜一は俺の憧れでもある。

その凜一と離れることは自分で決めておいて情けない話だが、寂し
くてならなかった。

俺は大学に入るとすぐにセックスフレンドを探した。

相手を探す時、俺は凜一に少しも似ていない感じの男を選ぶ。

即ち平凡で、印象の薄い従順な扱いやすい男をだ。
何故ならそういう奴に、俺は絶対本気にはならないとわかっているから。

本当の本気は凜一にだけでいいんだ。

それでも凜一と暫く離れると、恋しくてたまらない。

ちゃんと食べているだろうか。俺を想って泣いていないだろうか。

…俺を忘れたりしていないだろうか。

或る日、梓から連絡をもらった。

凜一が熱を出して、俺を呼んでいると言う。

俺はすぐさま凜一の元へ帰った。

熱を出して息を切らしている凜一は弱り果てて、それを見ていると可哀想でならない。

「慧…慧がいないと寂しいよ…」

涙を一杯に溜めて苦しそうに言う凜一に心が打たれた。

「ごめんね、凜。傍にいるから」

差し出された腕に、身体を差し出し、俺も凜一の身体を抱きしめた。

凜一のすべてを身体の間々まで行き渡らせた。

キスを求める凜一の応えながら、俺はどんなセックスよりも叶わないほどに満ち足りたものを心を感じていた。

俺を求める、俺を必要とする凜一を、俺はいつか自分だけのものにできるかも知れない。

そんな夢を見ていた。

俺はその秋、父親に自分がゲイであることを告げ、宿禰の長男として、その責任を全うできないことを謝罪した。

父は黙っていた。

俺を責める権利はこの人にはないと、俺は思っている。だからどんなに非難されようとも知ったことじゃない。

だが彼は、暫くの沈黙の後、一言こう言っただけだった。

「慧一の人生だから自分の好きにきなさい…葵なら…母さんなら多分こう言うんだろっね。私にはそこまでの境地には辿り着けないが…結局は、おまえが決めることだしな…」

父親の嘘ではない残念そうなしかめた顔は、彼の自分への愛情だと知った。

程なく俺がゲイだということは凜一にも知れた。この好奇心のかたまりの弟は俺に一切のごまかしも無くズバリと聞いてくる。

「慧はどうして男の人としかセックスしないの？慧が入れる方なの？どうして女の人じゃ駄目なの？」

すべておまえの所為だとは言えるわけなからう。

俺は苦い顔で「そういう性質だったとしか言えないんだろうけど…」と、言葉を濁す。

こういう会話はやばいんじゃないかと逃げ腰になるが、凜一は追求の手を弱めない。

あれこれと避けようと目論むが、とうとう核心に触れてくる。

「じゃあ、僕は男だから、慧一の恋愛対象にはなるの？」

マジでびびる。心臓の鼓動が早くなる。

俺は胡坐をかいた俺の膝にすわる凜一に気取られないが、心配で仕方なくなった。

「…ならないよ。凜は弟だろう。そういうのは対象外」

「えゝそうなの？僕、慧だったら対象者になっても良かったのに。キスしてもダメ？」

「キスはいつでもしてるだろ？そういうの考えて凜とキスしたことないよ。凜もそうだろう？」

「だってキスは愛してるっていう意思確認だよ。梓が言ってた。じゃあ僕とするキスと慧が恋愛対象者にするキスは違うの？やることは一緒でしょ？」

これはかなりヤバい状況じゃないのか？俺は本当に困ってしまっ

「…むずかしくて…答えられないよ、凜」

「じゃあ、やってみる」

冗談じゃない！やめてくれ、と、思う前に凜一の口唇が俺の口唇と重なった。

この状況で無理にやめさせたら、それこそ凜一は俺を不信がるに決まっている。

俺は精一杯自制しながらも、凜一を安心させる為にできるだけ優しく応えてやった。

…それにしてもまだ10歳なのになんて甘くていやらしいキスをするんだろう。

全くこの天使に俺は翻弄されっぱなしだよ、凜。

角度を変えながら、何回も舌を絡めては吸いつく凜一の顔をぼおつと見ていた。

しばらくして俺から離れた凜一はその艶めいた口唇で俺にあどけない顔を見せた。

「どう？感じない？」

「…そういうキスは好きな人とやりなさい。俺は対象外」

精一杯の演技で持って、平常心のふりでそう言つと、「ざんねん」と大げさにのけぞりそしてまた俺の肩に顔を埋めた。

俺はその髪を撫でながら「…凜一は普通に女の子を選ぶといいよ。俺の真似はするなよ」と、言った。

凜一は僅かに頷きながら、俺を強く抱きしめた。

> i 5 2 2 1 — 2 7 3 <

大学は建築学科を選んだ。

選んだ理由は、昔、死んだ母の聖堂を作ろうと、梓と凜一で話し合ったことがあったからだ。

母は宗教人では無かったが、多くの慣習のように母の遺骨は父方の墓に入れられた。それは家族の本意ではなかった。父は遺骨を手放すことを嫌がっていた。

そういう姿を見ているからだろうか、俺は俺たちの為の聖堂を小さくてもいいからどこか海の見える丘にでも作りたいと願っていた。俺たち家族の「死」を、聖堂という「家」で見守り、そして共に眠りたい、と思うのかもしれない。

大学では俺は勉強に打ち込み、そして自由を謳歌した。

凜一と梓に縛られない平日の気ままさは、かつて無いほどに自分自身を舞い上がらせた。

俺は「天体観測の会」というサークルまでもに属し、星空を見上げながら、自分の小ささを笑うのが好きだった。

鬱積した自分の感情や家族へのしがらみ、とりわけ凜一への欲情、そういう自分の見たくないものも宇宙の元では些細なことですらなく、もう、どうだっていいものと思える。

それは気休めでしかなく、現実に戻れば、ありとあらゆる規制に雁字搦めになっているのはわかっていたが、星空の下ではこんな卑しい俺でも許される気がした。

大学二年の時、俺は藤宮紫乃という同い年だがひとつ下の学年の男と付き合った。

それまで一度たりとも本気で付き合ったことが無かったこの俺が、曲りなりにも本当に「恋」をした男だった。

見てくれは高慢で美しく、匂いでお仲間だとわかった。

彼は傷ついた羽を隠そうともしない。

反対に傷つくことさえ厭わない佇まいで、世の中にも自分にも突っ張り、アウトローを気取っていた。

一見俺に似ているのかと思った。だが、違っていた。

紫乃は不器用ながらも純粋な男だった。

俺は自分の汚さを隠すのにあまりに慣れすぎて、品行方正の服を着、誰が見ても一種の高みにいる者を演じていたが、彼は自分の汚さを余すところ無く見せ、そしてすべての矢を自分で受けることを覚悟している。

自分に正直で純粋。まるで俺とは正反対。少しも似てはいない。

こんな俺を愛してくれた男だった。

だが俺は、紫乃のこの尊い好意さえもどこかで嘲笑っていた。

俺は凜一以外の人間を認めるわけにはいかない。

紫乃の優しさや俺への愛情を快く感じ、甘え、其の反面、凜一以上の存在など俺には必要ないと見下し、紫乃を傷つけることさえ厭わなかった。

梓が死んだ時も同じだ。

俺は妹が死んだ事を悲しみ、ただひとりの妹の為に涙したが、それ以上に凜一を独り占めできるという優越感をどこかで感じていた。

俺を監視するものはいない。これで凜一は俺だけのものだ。

だが凜一はそうじゃない。

凜一は梓の死をひとりで相対し、悲しみ、そのショックで極度の拒食症に陥った。

俺は凜一を失うことを恐れた。

凜一を失っては俺の生きる意味など無い。

凜一を慰め、生きる気力を与え、精神的な支えとなる。模範的な兄の役目。

時間が経つと、俺は凜一を手にした喜びは消え去った。

拒食症の凜一は俺の手からじゃないと物を食べない。離れると泣く。学校に行けるわけもなく、遅れないように勉強させなきゃならない。凜一は異常なほど俺に甘えたし、俺を束縛した。

抱きたいと思っっている兄に、一パーセントも疑わずすべてを委ねてしまう弟。

俺は全く身動きが取れない。

梓を亡くし、凜一を手にした俺はその存在の脆さ、大きさ、思い通りにならないジレンマで狂いそうになった。

凜一が少しずつ落ち着き始めると、俺はまた凜一と距離を取った。

気兼ねの無いひとり暮らしを知った俺は、凜一を好きにできないもどかしさから解放されたがった。

一人暮らしには自由がある、静かな空間がある。俺を甘やかしてくれる紫乃がいる。

俺は凜一を自宅にひとり残し、マンションへ戻った。

凜一は俺を恨んだらう。それもいい。

自分のものにできないならいつそ憎まれたほうがいい…そう考えることすら俺には快感になっていた。

凜一が中学生になると俺はますます帰らなくなった。

ひとつは俺の勉強が多忙を極めたからだ。

建築士や技師の資格を取る為の国家試験、建築デザインのコンペティション、研究レポートに明け暮れた。

いくつかの国内外の大学院からの誘いも受けていた。それはどれも魅力的なもので、とりわけシカゴ大学の総合建築学科には興味があった。

自分の才能を試してみたい。本気で追求し、頭に描いたデザインを三次元に表現してみたい。そして、そこに住む人々の暮らしを想像する。

もしかしたら、今まで味わったことの無い充実感を味わうことが出来るかも知れない。

本当の自由を得られるかも知れない。

だが、凜一を置いてアメリカに行くわけにもいくまい。

何か合ったらすぐにでも帰れる距離だからこそその一人暮らしだろう。今だって凜一と過ごすため、毎週末自宅に帰る。

不貞腐れた凜一は、俺を責めた目で見える。

俺は自分の後ろめたさに怯えながら凜一に笑いかける。

俺は…こんな関係を望んでいるわけではない。

俺は凜一を想い、畏れ、今にも凜一を壊してしまいそうなほど愛していた。

だが、凜一にとっては、俺はたった一人の兄だった。それだけしかなかった。

こんなに苦しく切なく、適うことのない「愛」ならばいつそのこと…と、思う。

俺は凜一と話し合うために、前期の試験が終わるとすぐさま自宅へ帰った。

自宅に帰っても凜一は居なかった。もう夜も遅いというのにどこに出かけているのだろう。

俺は凜一をまだ子供だと見くびってやしなかったか？

あいつは幾つになった？13だ。

俺が初めて男を抱いた歳と同じだ。

まさか凜一がそんなことをしようとは思えない。

凜一は綺麗な天使なんだ…

そうじゃなきゃ俺も梓もこれまで大事に育ててきた意味はない…

…違う、俺はなんもしていない。

事実、俺はまだ中一の弟をほったらかしにして、自分の為に生きているじゃないか。

凜一が何をしようと俺になにか言える権限などあるものか…

明け方近く外から帰ってきた凜一を見た。

二週間、いや三週間ぶりだろうか、凜一は見る度に大人になっていく。それも普通じゃない。凜一は他と違う。特別に選ばれた者のように気高く美しい。

俺は凜一を見る度、なぜこうも心が揺さぶられるのか自分でも理解できない怖れを感じてしまう。

「凜一。今頃までどこで何していたんだ。何か事故にあったんじゃないかって心配するだろう」

「…ごめん」

「答えになってないよ」

「ちよっと、友達の家で、遊んでいただけだよ」

嘘を付く様もどことなく蠱惑的に見えて俺の胸がざわつく。

思わず目を逸らすと凜一の両手首に赤く腫れ上がった跡を見つけた。ひと目で何をされたのかわかってしまう自分が嫌になる。でも、まさか…凜一に？

凜一の腕を掴んで確かめた。間違えようが無い。

Tシャツの襟を肌蹴るとそこにはキスマークと思える跡が残っている。

こうなった以上、その原因を追求しなければならなくなった。

まさに尋問だった。俺がこういう風に凜一を責めるのは初めてかもしれない。

その内容がこれでは笑い事にもならない。

凜一はどういう素行をしているんだ。

「どういうことだ。凜。なんで何も言わないんだ。遊ぶのはいい。でも何してるんだよ。俺に言えないことか？どうなんだ」

自分の言葉がどこか遠い誰かが言っているように聞こえる。俺が凜一を責める権利などありはしないだろう。それでも…

「男と寝てたんだよ。なにか悪い？」

「…」

一番聞きたくなかった言葉だった。

俺は目の前が暗くなり、倒れそうになった。

凜一への尋問ではなくこれでは俺への拷問に等しい。

同時にくだらない事を抜かしている凜一に我慢がならなかった。

考える間も無く俺は拳で凜一の顎を殴っていた。手加減をしたつもりだったが、凜一の身体は床に叩きつけられ、驚くほどの音を響かせた。

凜一は倒れたまま動かない。

俺は自分のしたことが、半分信じられなかった。が、もう半分は殴

られて当然だと思った。

どれだけおまえのことを思って、考えてここまで育ててきたと思っているんだ。

おまえは穢れない天使だったんだぞ。

それを…大切に育ててきたその身体を、どこかわけのわからない男に抱かせただと？

おまえはなんて罪なことをしてくれた！

俺をバカにするものいい加減にしろ！

自分の後ろめたさなど忘れていた。凜一が簡単に男と寝るのが俺には許せない！

これは俺の汚い嫉妬だ。おまえを誰にも渡したくないという独占的で傲慢な嫉妬でしかないんだ。だが俺の口は最もらしい言葉を吐く。

「俺と梓がおまえをどんなに大事に育てたか…知ってるはずだろう。それなのに…おまえは、そんな誰とでも寝るような奴になったのか、

凜一」

「それが…兄貴の本心かよ」

「何？」

下から俺を見上げる凜一は先ほどまでの怯えは無く、射落とすようなギラリとした黒曜石の瞳で俺を睨み付けた。

「大事に可愛がって育てた身体を、他人とほいほいセックスさせて…それで汚れたから怒っているわけでしょ？兄貴は。だったら…そんなに気に入らないなら、あんたが、捕まえて離さなきゃいいんじゃないか！…俺をひとりにして、ほつといて…俺ひとりでどうやって生きろって言うんだよっ！誰か他の奴を求めたっていいだろ！…捨てたくせに…偉そうに言うなよっ！」

凜一の心からの叫びに俺は言葉もでない。怒りに狂う凜一の叫びは最もだと思ふ。責められるべきは自分なのだ。

「大体…梓が死んだのも兄貴がこの家から出て行ったからだ。慧が

出て行かなかったら、梓だって…」

そうだ。梓が死んだ時、俺はおまえをほったらかしにして、紫乃と寝ていた。俺の所為で梓は死んだのかもしれない。

俺自身の罪悪感に苛まれていると、凜一は思ってもみない事を口にする。

「…違う…俺だ。俺が居なかったら慧も梓も自由でいられた。俺の世話なんかしないで、もっと自由に楽しむことができたはずだ。俺はあんたたちにとって邪魔な存在なだけだった」

「違う、凜」

「そんなことわかってんだって。ずっと前から、俺なんか居なきゃ良かったって…」

「そんな事一度も思っていないっ！」

「失望した？慧。誰とでも寝る俺にこんな風に育てた覚えはないって言ったよね。責任は誰が取るのさ。俺をこんな風にしたのは誰だよっ！」

「凜、おまえひとりを責めているんじゃない！だけど…おまえがこんな風になるのは…見てられない」

言葉が見つからない。どんな言葉も凜一の叫びの前では繕えない。俺はおまえを救う言葉を見つけることが出来ない。

「じゃあ見るなよ。わかったよ。もういい…慧一を自由にしてやるから…今後一切、兄貴には俺の面倒は見てもらわない。俺の心配はしなくていい。俺はひとりで大人になるから、もう俺に関わりなideくれっ！」

俺への失望感と怒りに任せた凜一は、泣きながら俺の前から走り去った。

自室に鍵を掛け、泣き続ける凜一に俺は耐えられなくなった。

俺は説明しなければならぬ。なぜお前を殴ったのか。おまえを一

度だって邪魔になんか思わなかった。おまえをずっと愛していることを言わなければならぬ。

凜一の泣きじゃくる声がいつまでも耳について離れなかった。

彼は俺を許さない。

そう悟った瞬間、俺は凜一の目の前から消えようと思った。

俺は凜一を置いてアメリカに行った。

紫乃と付き合いも勝手に断った。

自虐の果ては投げ遣りになるしかないとはよく言ったものだ。まさに俺がそうだった。

もう何も考えなくなかった。

凜一のいる日本に、一秒でも長く居なくなかった。

父親からは勝手に留学した事に対してひどく叱責された。何とも言えなかった。俺の苦しみなんか誰もわからない。

大学では、俺は完全な異邦人であり、もう自分を取り繕うのもやめてしまった。

誰も俺を知らないし、誰も俺にかかわらない。

ただ勉強に没頭した。

凜一の事だけは今更だとしても、兄としての役目だと思い、メールだけは毎週送ったが、返事がくることはなかった。

無理もない。

俺はおまえを捨てたんだからな。

凜一は俺を憎んでいる。自分を救ってくれなかった兄に怒っている。当たり前だ。

あいつをああい風にしてしまったのは俺と梓の罪だ。

梓がいない今、傍にいて償わなきゃいけないのに、追っかけてこら

れない場所で俺はひとり好きなことをやっているんだからな。
恨まれて当然。

俺は凜一のことを思う時、自分の罪深さを呪い、幸せになる権利など一欠けらもないのだと思った。

誰にも知られず、ひとり郊外の小さな聖堂でミサを聞くと、胸が締め付けられ涙が溢れた。

俺は一体どうすればいいのだろう。

この重すぎる罪悪感を抱いたまま、凜一となにひとつ理解しあえずに生きていかなきゃならないのか…

俺のすべてだと請うあいつと、こんなにも隔ててしまった。

もう元へは戻れないのか…いや、そうじゃない。

こうなったのは俺の凜一への気持ちがあまりにも俗物すぎたからだ。兄としての想いだけで凜一と対峙する。そういう気持ちへ自分を変えられないものなのか。

凜一の望む慧一になれないものなのか…

クリスマスカードを送った。

兄として、俺はお前を愛していると、綴った。

クリスマスの次の日、凜一から初めてのメールの返信が来た。短いぎこちない言葉だったが、俺を振り返ってくれている。

凜一の許しに俺は涙が溢れた。

おぼつかなくやり取りは始まった。

俺と凜一は、積み上げられた泥を少しずつ取り除くことにした。

しかしたまに帰っても、凜一は昔のように俺に気軽に近寄っては来ない。

警戒したかのように、遠目で俺を見て一言二言話すと、逃げるように俺の前から姿を消す。

その繰り返しで俺も息が詰まる。

なんとか修正しようと試みても、彼が逃げてしまふのでは、仕方がないと諦める他はない。

毎回帰国するたびの凜一との繋がりはこのやり取りだけと言っても大げさでもなく、一向に進歩しない。

俺は「愛している」と言い、凜一は「その資格は無い」と言う。

資格ってなんだ？おまえが弟であることこそ、愛される資格だろう？

それともおまえは…俺がおまえを愛することすらも許してはくれないのか？凜一…

結局、俺は意気消沈してアメリカに戻ることを繰り返す。

院を修了するまで、俺の研修もあと二年を残すのみとなった。

出来ることなら院を卒業したらこちらで就職し、アメリカの建築設計の資格であるAIAを取る為の実践的な仕事をやりたかった。

だが、本当にそれでいいのだろうか。

このまま凜一をひとりにさせてしまっているのだろうか…せめて凜一が大人になるまでは傍についてやって、家族として見守るべきじゃないのだろうか。

だけど、俺が自分のやりたいことを諦めたとして、俺自身がいつか凜一に対して僅かでも恨みを感じたりしないだろうか。

何よりそういう思いを凜一に覚られた時が怖い。

凜一はそういう気の使い方を嫌う奴だ。

俺は悩んだ。ひとりで決めるのに躊躇した。

父親はともかくとして、凜一だけには話しておいた方がいい。

俺は凜一と今度こそ話し合う機会を得ようと、夏季休暇が始まるとすぐさま帰りの飛行機に飛び乗った。

自宅に帰り、俺は凜一を久しぶりに見る。

毎回帰る度に変わっていく凜一に驚かされるが、今回は凜一は赤く染めていた髪を普通の艶やかな黒髪に戻し、表情も穏やかになっている。

何かが彼の中で変わってきている…そう感じた。

凜一は中三になっていた。受験の大事な時期だ。

俺は凜一の中学校に行き、三者面談を受けた。

凜一の素行に幾らかの問題があるとしても、成績は悪くなく、このままなら順調にこの学校の高等部に行けると先生からも太鼓判を押された。

高等部は俺の母校でもある。

出来るなら、このまま行つて欲しい。

帰り際、一緒に帰るかと誘うと、凜一は首を振った。

「俺、用事があるから兄貴は先に帰っててよ」

「…わかった」

凜一の態度は取りつく島がない。

心からの許しはまだ当分貰えそうも無かった。

夏休みの前の晩、凜一は一週間ほど友人と旅行に行くからと言う。

止める理由は無かった。

本当は俺の卒業後の身の振り方を相談したかったんだが、凜一の様子はなにか別の方に意識が向いていて、俺の事など眼中にない。連絡先を聞いて解放した。

凜一は俺といることを居心地悪いと感じているのだろう。

いつもどこかよそよそしい。一度入った亀裂はなかなか元には戻らない。

気長に待つしかない。

留守の間、掃除がてらに凜一の部屋を覗いてみる。

割とマメな凜一の部屋はきちんと整理整頓されていて、どこも荒んだ感じは受けない。

本棚に飾られている懐かしい思い出の写真を見た。

母親と最後に行った花見の時の家族写真、梓と三人でのクリスマス劇の衣装での写真。そしてカラージユのように貼られた俺たち三人だけの写真には、どれを見ても凜一の笑う姿で埋め尽くされ、切なくなる。

俺がこの笑顔を奪ったのだろうか。

凜一の心から笑う顔が見たい。

その為に俺が耐えられることは、耐えてみせよう。

約束の一週間を過ぎても凜一は帰らなかった。

もう一日、二日…待っても帰ってこない。携帯に掛けても応答は無い。

俺は凜一が残した連絡先の番号を見つめた。

凜一の行く予定の長野とはまるで違う、都内の番号だ。

それでもここしか凜一の居所を突き止める手段はない。

俺は受話器を取った。

「もしもし」

「…はい」

大人の、それも相当落ち着いた男の声だった。

「すみません。そちらに宿禰凛一はお邪魔していないでしょうか？」
俺の突然の問いに、相手は暫く沈黙し、そして思い出したようにゆつくりと話した。

「宿禰？…ああ、もしかしたら…凛一のお兄さんの慧一さん？」

俺は驚いた。まさか俺の名前まで知っているととは思わなかったのだ。それに凛一の事を呼び捨てにするほど親しいのか、この男は…

「そうです、慧一ですが、弟は…」

「凛一はここには来ていないけど…と、言うか、ここんところ来てはいないけど…何かあったんですか？」

「十日前から友人と長野へ旅行へ行くと言って…予定ではもうとつくに帰ってもいいはずなんです、音沙汰がないものだから、心配になりました…この番号の連絡先を凛一が残しておいたものだから、伺ったのですが…そちらもご存じない様でしたら、仕方ないです。他を当たります」

落胆して受話器を置こうとすると、向こうから呼び止める声が聞こえた。

「ちょっと、待ってくれ！凛一がどこに行ったが知らないけど、あいつが関わりそうな奴のことは知っているよ。良かったらこちらまで来てくれないか。俺も心配なんだ。凛一は…大事な友人だから」
声音で凛一の事を真剣に心配している様子が伺い取れる。

どんな男が凛一と関わっているのか、俺も確かめたくなくて、電話の向こうの男の言う場所へ向かった。

「Satyri」というジャズクラブが、男の指定した場所だった。電話で話した鳶谷誠一郎という男はこの店のマスターであり、凛一はこの店の常連らしい。

このジャズクラブの建物自体が非常に洗練されており、かつ音響に關して言えば、ニューヨークなどの本場のホールに引けを取らない作りをしていた。

これだけのものをこしらえるには相当の資金が必要なはずだ。それもこんな袋小路に作るなんて、損得抜きの商品としか思えない。バックには相当なパトロンか実業家が付いているわけか。

それにこの鳶谷つて男も気にかかる。

オールバックにした長い髪をひとつに纏め、歳相当の経験を感じる整った顔なのに瞳だけは無邪気に輝いている。顎には無精ヒゲ、それもこの人の品性を少しも貶めていない。

相当な貫禄としたたかさが伺えるし、さりとて、なぜか相手を安心させるオーラを持っている。

凛一がこの男に懷いたとしてもおかしくないだろう。

俺は複雑な気持ちになった。

「ここまで出向かせてしまつてすまなかつたね、慧一君」

「いえ…こちらこそ。お仕事中に勝手に言つてすみませんでした」

「いや、ホントのことを言えば、タイミングが良かったんだよ。普段はここに寝泊りはしないし、店は夜からだろ？ 昼間に店にいることは少ないんだが、今日はちょっと私用があつてね、

慧一君の電話に気づいて良かった」

「本当にすみません。弟がお世話になつておきながら、今まで伺わず仕舞いで」

「いいんだよ、そんなことは。早速だが、気になる男って言ったよね。そいつのアパートに向かおう。たぶん居ないと思うが、何かしら手がかりがあるかもしれない」

俺は鳶谷さんと一緒に道で拾ったタクシーに乗り込んだ。

初めて会った男なのに、距離を感じさせない鳶谷さんに、俺は少し気を許し始めていたが、それ以上に別な意味で緊張していた。

正直なところ、凜一とどういう関係なのか、聞かずにはいられなくなっていた。

「凜…弟は、いつもあなたの店にお世話になってるんですね」

「うん、そうだよ。遅くなるとうちに泊ませたり…」

「うち？」

「いや、俺のマンション。自宅に帰ってもひとりでつまらんと言っ
てなかなか帰ろうとしないからね、凜は」

「…すいません」

「…嫌味っぽくなったかな。彼はまだ中学生。そしてもう中学3年だから、お兄さんが目を光らせておく必要はないと思うんだが、たまに、寂しくなるんだよ。俺達大人だってそうだろう？だからそういう時は俺の家へ泊まらせる。変な虫に引かからなくてもいいしな」

「…そう…ですね」

益々様々な感情がこった返しになる。

どう返していいのかわからなくて、つい口ごもってしまった。

「ああ、変なことは一切してないから心配しないでくれ」

鳶谷さんは僅かに笑って答えた。それは真実だろうと思った。

この人は凜一が信じるに値する大人なのだろう。

「…していませんよ」

俺は静かに答えた。

「そうかな？慧一君は相当に弟さん贔屓だと感じているから、凜一の素行には厳しいんじゃないのかい？」

「…弟は自由なんですよ。俺が何か言った所で、素直に聞きやしな

い」

「反抗期なんだよ」

「凜一は…あいつは変な遊びなんかはやってませんでしたか？」

「変なつて？」

「…女や…男と…」

酷く下世話なことだと思ったが、確かめたかった。

「ああ、そういう遊びね…やってたよ、寂しがりやさんだからなあ
凜は。だが、あれは本当に遊びだったからね。一夜で終わる相手
が多かったよ。そういうところは熱くないんだよ」

「…」

判ってはいても、凜一が遊びで誰とも構わずセックスをしていると
聞かされるのは辛い現実だった。

今更あいつが天使とは思わないが、それでも俺にとっては凜一は汚
れ無き天使であって欲しいというバカみたいな望みがまだどこかに
あった。

「まあ、あいつを相手にする奴は相当に自分に自信のある奴だよ。

あいつは専制君主だから、変な奴には付いていかなかった。いくら
好かれても自分が気に入らなきゃ乗らないからね。変な意味じゃな
く。俺にも最初はやら寝ようって迫ってくるんだが、その割りに
心は許しじゃない風だね。俺にその気が無いとわかると、すつか
り甘えて懷いてしまう。凜一が俺に求めているのはそういう…親に
甘えたい感情なのだろうって思えてきてね。ああ、悪い。親父さん
はいらっしゃったのに、親代わりなんて勝手な言い草だった」

「いえ、親父はいるには違いないけれど、あまり実感がないんです
よ。一緒に居る時間が少ないから…」

「でも君はずっと親代わりとして凜一の世話に明け暮れていたんだ
ろっ？」

「…中途半端なんですよ。本当は…俺は凜一に何もしてあげられて
はいないのかもしれない」

「凛一が心の底から求めているのはあんだと思うけどね」

「…」

鳶谷さんの言葉の真の意味を図りかねた。この人は俺の凛一への思いを探りながら話しているように思えて仕方なかった。

タクシーを止めて車を出た場所は、細い路地裏の汚いアパートだった。

「確か二階だったと思うけど…」

鳶谷さんは鉄骨の階段をリズム良く上がって行く。俺はその後をついて行った。

「ここだ」

黄ばんだ紙の表札には、やっと読み取れるぐらいに薄くなった文字が書いてある。

「月村…孝道…」

「うん、ふた月ほど前までうちで働いていたピアニストなんだよ。」

凛一がひどくお気に入りだな。アパートにまで追っかけていきやがる。俺は反対だったけどね」

ノブを回して開かないと知るや、鳶谷さんは錆び付いた郵便受けやガスのメーター箱をガサガサと調べている。

「あつた〜大体こういう場所に置いてあるもんだ」と、嬉しそうに俺に鍵を見せ、鍵穴に差し込んだ。

狭い部屋の中には誰も居ない。と言うより、人の住んでいた気配が妙に少ない。

本当に凛一は、ここに住んでいた月村という男と知り合いだったのだろうか。

鳶谷さんは窓を開け、新鮮な空気を入れた。

こもっていた空気が少しだけ晴れた気がした。

彼は休みなく「あいつらが行きそうな場所ってどこだろうなあ…それにしても汚くて狭い部屋だなあ〜」と、ぶつぶつ言いながら、少ない室内品の箆笥や棚の引き出しを開けては覗いている。

俺も突っ立っているだけじゃ意味が無いと思い、適当に探し始めたが、ふと気になってと鳶谷さんに話しかける。

「鳶谷さんを疑うわけじゃないけれど、本当にその月村さんって人と凜一は一緒にいるんでしょうか。…凜一とその男がどういう関係だったのか、あなたはご存知なんですか？」

「関係ねえ…たぶん、下世話なことを言ってしまうえば、セックスはしていないと思う」

「…」

あまりに直接的な言葉で俺は思わず顔を伏せた。そういう風に言うて欲しかったわけではないにしても、心を読まれたかと思ったのだ。「月村はノーマルだから、凜一が誘ってもしなないと思うんだ。それに…凜一自身はわかっているかどうかは知れないけど、あいつは自分が相手を好きかどうかじゃなく、相手が自分をどう愛してくれるのかを重要視している気がしてならない。相手の愛情を試すというか…だから心配なんだよ。無鉄砲に挑発するところがあるからね」

「…」

それを聞くと益々不安になってしまう。その月村って男はノーマルだと言ったが、じゃあ何を凜一に求めて付き合っているんだ。

「あ、これがなんとなく臭いなあ」

小ぶりの引き出しから鳶谷さんが出して見せてくれたものは束になった手紙と写真だった。

畳に座り込み、ふたりでひとつひとつしらみつぶしに目を通した。

古びた写真は外国の風景が多かった。

俺は月村という男の顔を鳶谷さんから教えてもらった。

ピアニストというからもつと芸術家風なのかと思ったら、予想に反して普通の男だ。なにかしらの魅力やカリスマも写真からは感じられない。

「意外だつて顔しているよ、慧一君」

鳶谷さんは俺の顔を見て揶揄うように笑う。

「いや…ピアノストって言うから、もっとミュージシャンっぽい人なのかと…」

「見た目は冴えないんだが、ピアノストとしての腕は、本物だったよ。それこそ凜一が惚れ込むほどにね」

「…だったって…どういうことですか？さっき言いましたよね。鳶谷さんの店でこの間まで働いていたって…何故、彼は店を辞めてしまったんですか？」

「…それは…たぶん凜一が居なくなつたことと関係があると思う」
鳶谷さんは眉間を歪め、低く声を潜ませた。

「…月村さんは…末期ガンでもう長く生きられない身体だった」
「えっ？」

「月村自身もそれは知っていて…だから自ら進んで店を辞めたんだ

…」

「…それで凜一は？」

「うん、どうして辞めたのかを追求されて、とうとう口を割らされてしまった。俺も凜一には弱いんだよ。あいつの強引さには恐れ入る。だけどそれは酷く純粋なものだから、俺みたいな汚い大人でも、誤魔化せない」

「…」

鳶谷さんの言いたい事はわかる。凜一が本気で己の感情をぶつける時は、こちら側に一切の繕いや紛らすことを許さない。まさに天からの糾弾のごとくに。

「俺の憶測かもしれないが、凜一は月村に同情して、彼を追って行つたんだと思うんだよ。月村は黙って消えてしまったから、凜一はひどく気にしていたんだ。…俺が凜一をもっとちゃんと引き止めていれば良かったんだが…」

「あなたの所為じゃない。凜一がこうと決めたら俺でも止められない

いんだから。あんな風に育てた俺に責任の一端は感じてますけどね」
自嘲気味に笑うと、鳶谷さんは思いがけない事を言う。

「それが、宿禰凛一なんだろうね」

「…」

宿禰、凛一…そうだったのか…俺はそういう人間の兄であり、そういう人間を生まれた時からずっと見つめ愛してきたんだ。

凛一がどう思おうがそんなことは関係ない。

俺は凛一を愛したい。守りたい。彼の為に生きたい…

その想いだけで十分に生きられるんじゃないだろうか。

R R R…

腰のポケットの携帯が、凛一からの電話を示す着信音を響かせた。俺は急いで携帯の画面を確かめる。

間違いない。凛一からの電話だ。ボタンを押すのもわずらわしく、自分でも驚くほどに必死に呼びかけていた。

「凛一か？どこにいるんだ！」

俺の声に応答はなく、一瞬いたずら電話なのかと疑った。

だが、微かに感じる呼吸が凜一だと確信し、俺は凜一に訴えるようにゆっくりと言葉を続けた。

「凜…どうした。頼むからおまえがどこにいるか言ってくれ。おまえが旅行に行くと言ってももう十日も経つんだ。連絡しようにも…携帯の電源を切っているんだろう？ 凜」

「慧…は俺が死んだら泣く？」

望んでいた凜一の声。だが「死」という言葉が俺の頭の中に張り付いてしまった。

「…何言ってるんだ。いい加減にしろよ」

凜一の冗談だと受け流したい気持ちで応答する。

「俺、殺されるかも知れない…けど、恨まないでよね。その人が悪いんじゃないんだ。俺が救えなかった罰だと思ってくれよ、慧」

何をバカなことを言ってる…そう言いたいのに言葉に出ない。凜一は何を言っている。

凜一は本気で…本気で俺に遺書めいたことを口走っている。

バカなことを言っな！おまえが誰かに殺されるものか！殺させやしない。

俺が絶対に。

「おまえが死んだら、俺は許さないから。そいつもおまえも、世の中の奴全てを許さないからなっ！ 凜、帰ってくるんだ。おまえが居ないと俺の生きる意味はないって…そう言っただはずだ。覚えているだろ？」

俺の傍で聞き耳を立てている鳶谷さんの事など構わずに叫んでいた。

『ごめん、慧』

泣きそうな凜一の俺への謝罪。

そんな声を聞きたいんじゃない、凜一、俺は…

俺は…

「俺が守るから、戻ってきてくれ、凜…」

俺は祈るように言った。

何もいらなから。おまえが無事であれば、それだけでいい。姿を見せてくれ。

だが、凜一からの通信は俺の思いなど関係なくプツリと途絶えた。

「なんで勝手に切ってしまうんだ、凜一！」

俺は携帯を睨みながら口走った。

殺されるかも知れないって…どういことなんだ。

どこにいるのかも、誰と居るのかもわからないままで、おまえをどうやって探し出せばいい。

頼むから早まらないでくれ、凜。

「場所がわからないとしたら、この葉書の差出人を片っ端からあたるしかないな…」

独り言のような鳶谷さんの声で俺は我に帰った。

「凜は月村の名前を言っていないのに、何故そんなに自信があるんですか」

「じゃあ、慧一君は他に当てがあるのかい？凜一は誰かを救いたがつている。それは月村以外に考えられない。だったら、月村の知り合いからその場所を割り出すしかないだろう」

「…」

「大丈夫だよ。月村も凜一を巻き込んで無理心中するようなバカなことは考えないだろう」

鳶谷さんの言葉に俺はぞっとして鳶谷さんを見つめた。

「無理心中って…」

「悪い。脅すつもりはないんだ。月村もいい大人だし、そんなバカ

なことは絶対にないって話だよ」

「だって…凜はそいつに殺されるかもって言っていました。そんな奴を俺は信用できない！警察に連絡しましょう。凜が心配だ」

「落ち着いてくれ、慧一君。警察沙汰になって困るのは凜一だよ。それに月村にそんな度胸もなけりや、凜一を手に掛けるなんてできる男じゃない」

「どうして、あなたにそんな事が言い切れるんですか。死を覚悟した人間は、傍にいる誰かを巻き添えにしたがるって言いますよね。そいつもその限りじゃないんですか」

「月村は凜一に救いを求めてる。だけど、それは一緒に死にたいってことじゃない。月村は死ぬ。それは確かだし、その命を誰も救う事はできない。だけど、彼の心は凜一で救われるかも知れないんだ。月村は凜一を見ていると生きている喜びを知ると、俺に言っただ。だから…それを信じたい」

凜一を見ると生きている喜びを知る…そんな事を言う男がその好きな奴を手にかかけようとしたり、殺されるかも知れないと怯えさせるのか。それは殺したいほど凜一を自分のものにしたいという欲求に他ならないことだろう。

俺はその月村という男に憎悪を覚えた。

「無理だ…俺はそんな、月村っていう男は知らないし、凜一は確かに殺されるかもしれないって言っているんだ。一刻を争う事じゃないんですか？あなたのように悠長にしていられない。凜一はかけがえの無い俺の、たったひとりの弟なんだ」

「俺にとっても大事な…友人だよ」

鳶谷さんのためらいがちな言い方が気になった。この人も凜一を愛しているのだろう。だから尚更…

「だったら止めないで欲しい。俺は凜を失いたくない…」

「月村は慧一君が考えているような軽はずみな男じゃない。だけど、凜一はまだ15歳だ。慢心しているところもある。だから急ごう。」

俺もしらみつぶしにあたってみる。警察に連絡するにしても居所がはつきりしてからの方がいい」

「わかりました。でも俺は月村って男を信用もしないし、同情も一切しない。その男がどう死のうと俺は構わない。だけど、凜一に何かあったら、凜一が許しても、俺は決して許さない」

静まらない俺の怒りを鳶谷さんは黙って受け止めた。

凜一の最後の電話から、もうまる二日経つ。

あれから鳶谷^{とつや}さんは自分が責任を持って凜一と月村という男の居場所を突き止めると言って聞かなかった。

俺も一緒に探させてくれと頼み込んだが、よくよく考えれば、俺とその月村は何ひとつ係わり合いがないんだから、連絡しようにもこっちの身元が信用できないだろう。

だとしても俺も気が気ではいられるはずも無く、何時も気も休めずに携帯電話を睨み続けていた。

その夜遅く、電話が鳴った。鳶谷さんから月村の別荘の住所がわかったという知らせだった。

そこにいるとは限らないが、今から車を走らせるという。勿論俺も乗せてくれと頼み、深夜4時、自宅まで迎えに来た鳶谷さんの車に飛び乗り、俺たちは長野に向かった。

月村の別荘は蓼科のハケ岳付近で、車で約4時間弱を要する。

俺は運転の交代を願い出たが、鳶谷さんは車の運転は趣味だといい、断られた。

「今まで仕事だったんでしょう？居眠り運転でもされたら俺が困る。遠慮なく言ってください」

「…おまえら兄弟は本当に他人に甘えるのが下手だね。こういう時は大人にまかせときなって」

「俺は十分大人なんですけどね」

鳶谷さんの物言いはこの間と違ってかなりくだけた言い方になって、俺も自然とひきずられる。

「身体ばかり大人になっても心はどうだかね。天使系一族じゃないのかい？宿禰家の皆さんは」

「天使と悪魔は二律背反ですよ」

「…慧一君は自分を悪魔とでも言いたいのかい？」

「…そうかも知れない」

俺が天使になんてなれるわけが無い。対岸の果てにいる気がする。それでは天使の凜一とは永久に逢えない…そういうことなのか…エンジン音が僅かに高く響いた。高速に乗った車体がスピードを上げる。

最後の闇を楽しんでいるオリオンのペテルギウスと火星の赤色が僅かに見えた。

車のオーディオから静かなジャズが流れる。場所が場所ならジンでもかつくくらいいたい気分になる。

俺の気を読んだのか鳶谷さんが「慧一君はお酒はいける方？」と聞くので、「ざるですよ」と答える。

「凜一はあまり飲まないね。酒に酔うのが嫌らしい。凜らしいといえはそうだがね」

「…」

凜一が酒が強くないとは知らなかった。と、いうよりも俺はこの人よりも凜一を事を知らないんじゃないのか。本当の凜一を知るために、この人の話をもっと聞きたいと思った。

「鳶谷さん、凜一がどんな顔であなたの店で過ごしていたのか教えていただけますか？俺はそれを知らなくちゃいけない気がする。凜一が連絡先をあなたに指定したのは、俺に知って欲しいという思いもあつたんじゃないでしょうか」

鳶谷さんは暫く黙り、そして口を開いた。

「そうだね、話は長くなるけれど、着くまでには終わるだろうよ。眠気覚ましに俺の話でも聞ukai？」

「お願いします。無事故を祈りながらありがたく伺いますよ」

鳶谷さんは口端で笑いスピードを上げ、数台の車を追い越していく。

「俺がゲイなのは知っているよね」

「…はい、雰囲気わかりました。俺もそうだから」

「慧一君がゲイって話は凛一から聞いていたんだが、君はそんな風には見えないね。相当したたかなのか、気配を隠すのうまいのか…」

「別に隠しているわけじゃないんですが、そうですね。いつも偽りの世界で生きてるようなもんですから」

「偽りの世界ね…多かれ少なかれ誰だってそういうのは持っているもんだが、俺たちはまた特殊かもしれないね…煙草いいかな？」

「ええ、構いませんよ」

鳶谷さんはマルボ口を咥え、火をつけた。

「昔結婚したことがある。俺の実家は戦時中鋼鉄の特需産業で成り上がった、いわゆる戦争成金でね。親戚一同をその企業の配下に置きたがるんだよ。俺も理系の大学院まで行ったんだが、卒業したら有無を言わず子会社の常務の椅子に座らされた。ついでに嫁さんまでも宛がわれてしまった。俺は自分が同性愛者だと悟っていたし、今更女性と付き合おうなんて思いもよらなかったさ。だけど、その頃は世間にはれるのが怖かったんだね。」

今ならどうでもいいことなんだけど、あの頃は他人の偏見や差別が自分のプライドに傷を付けるのが許せなかったんだ。それに、何の取り得も力も持たない俺が、身内の保護も無く生きられるとは思えなかった。だから親の言うとおりに結婚した。すぐに失敗だったと気づいたんだ。だが不思議なものでね、愛が無くても男と女が交われば子供が出来る。

男の子だった。無邪気な赤ん坊だ。普通なら他人の子でもかわいいと感じる、ただ泣いて寝て笑うだけの小さな赤ちゃんだ。愛情が沸いてもおかしくない。

だが俺には愛情が込み上げてこない。逆に疎ましくなっただけ。ただ一回や二回のセックスでこの世に産み落とされる生。俺のDNAが埋め込まれた人間。そう思うと愛情より気持ち悪さが先に立ってしまった。このまま夫婦生活を続けるのは無理だと思った。理由を言っただけで離婚して頂いた。向こうも俺に対しての懸念はあったろうからね。…さすがに親も反省したんだろう。諦めてくれた。

慰謝料も養育費も十分補償する為に俺は働いたよ。けれど、2年後、子供が3才になるかならない頃、病気で死んだんだ」

「…」

「堪えたね…自分が殺した気分だった。恐ろしくて気が狂いそうになったよ。結婚なんてしなけりゃ、あの時セックスなんてしなけり」

や良かった…ずっとね、そんな想いに囚われて…子供への同情よりも自分の罪の大きさに砕けてしまった。

どうしてその子に…愛して出来た子ではなくても自分と血が繋がったその子に愛情が注げなかったのか…親としての責任。そんなんじゃない、もっと根本的なモラルを俺は果たせなかった。

俺はすべてを捨てた。家も会社も日本に居ることも嫌になつて、世界中を放浪したよ。もう死んでもいいと思つて日本を離れたんだ」
鳶谷さんは二本目の煙草を灰皿に捨て、暫く黙つたままジャズの音に身を任せている風だった。

俺はじつと息を殺して次の言葉を待っている。

「…7年前に俺が唯一信用する相手に日本に戻るよう勧められてね、あの店のオーナーなんだが、そいつのおかげでこうやって店の経営をやつてるんだ。

ああいう店つていうのは面白いもんでさ。自分と似たり寄つたりの客が付いてくる。傷の舐め合いじゃないけれど、お互いに癒される場所を求めるんだろうね。俺も随分、角が取れたよ。色んな客が来るけれど、凜一みたいな奴は初めてだった。

生きていたら丁度息子と同じ歳だ。天の差し金か、もう一回やり直させて言っているのか？…そんな気分で、自分の亡くした息子の代わりに凜一を愛そうと思つた。けどね、見事に裏切られた」

「…」

俺は思わず鳶谷さんを見つめた。

裏切られたとはどういうことだろう。鳶谷さんは俺に何を言おうとしているのだろうか。

「凜一と初めて会つたのは、薄暗くて寒いクリスマスの朝だった。俺の店の外の壁の間に身体を震わせていたんだ。ガキの浮浪者かと思つて追つ払おうと声をかけたんだが、顔を見て驚いたね。見事に精錬され過ぎた出来の顔なんだからなあ。あの底知れぬ真つ黒な眼

が俺をじつと見つめたんだ。…ああいうのを魔に魅せられるっていうのかな。一瞬で凜一の虜になっちまった。40のゲイのおっさんがさあ13のガキに、一目惚れしちまうんだから、俺も大概哀れなもんだと思っただよ」

「凜一は鳶谷さんの気持ちに気が付いていないんですか？」

「あいつは利口だが、そういう人の気持ちを置き換えることができない楽道家だよ。自分の魅力にもぞんざいだ。何もわかつちやいなんだからな、自分がどれだけ保護欲をそそる危険人物かって言う事も。他人がどれだけおまえを狙っているのかも…。そのクセ触れようとしたらこっちが大やけどだ。おっそろしい気位の高い女王様だが憎めない」

「…すみません。それは俺にも責任があります」

「いいんだよ、それが凜一だし、それを許されてしまうのも彼の魅力だからね」

「俺は凜一を愛していると思う、だけど、これは性的なものは抜きだ。勿論愛玩してやりたいとも思わない。人間として彼を愛しているし守ってやりたいと思う。だけど慧一君にはとても適わない。凜一から君のことを聞かされる度に、どれほど君と凜一が固く結びついているかを理解してしまうとね、それこそ嫉妬心さえ起こらないもんさ。到底太刀打ちできない」

鳶谷さんの告白に俺は嫉妬や怒りよりも、感情を分け合う者同士と理解した。

この人は俺の告解を聞く聖職者なんだろうか…

「俺は…」深く息を吸いゆっくりと吐き出した。
外の景色は少しずつ白み始めている。さっきまで遠くに見えていた山並みがすでに木々の一本一本がはっきりと見えるまで近づいている。

「俺は凜一を愛している。あなたと違って性欲もあるし。俺だけのものにしたいという独占力や執着心も今やもう妄執と成り果ててますよ。…当たり前だ。あの子が生まれてずっと…この15年間思い続けてきたんだから、今更捨てる場所さえ見当たらな。凜一が居なかったら俺の生きている意味などない…バカらしいと思う。自分の人生だ。自分の為に生きるべきだとも思う。だけど、自分の生は凜を愛するという意味になるんだ。ここまできたら一ミリだって揺るぎやしない。俺も大概アホですよ。適わぬ恋に身をやつしている。でもね、凜一が幸せなら…凜が笑ってくれるなら、俺はどうでもいいんですよ。他人がどうなるうと自分がどうなるうとあいつが幸せそうに笑っていてくれれば、俺は何も求めない」

何も求めない…そう言い切ってしまった自分の言葉を反芻した。

違う…求めていないわけがない。俺はずっと…

「…いや、なにも求めないって言うのは嘘です。俺はどこかで凜一への欲求を抑えきれないでいるのだから…それは見返りを求めていることですよね」

俺は笑った。自嘲ではない。俺は罪を告白した気分でした。それで救われるとは思わない。救われようとも思わない。

鳶谷さんがどんな敬虔な司祭であつたとしても、俺は救いを求めている。いない。

「凜一を抱きたいという想いを、慧一君は罪だと思っているの？」

鳶谷さんはまるで映画の感想でも聞くかのように俺の根源に語りかける。

俺はゆっくり顔を上げ、正面の真っ直ぐに伸びていく道路の中央線を見つめた。

俺は暫く考えた。

自分の凜一への想いを誰かに打ち明ける。そういう気持ちになった事は今までに一度も無い。

だがこの状況はどうだ。

大して面識の無いのな男に、俺は恐ろしい程真っ正直にぶちまけているじゃないか。

押し隠してきた俺の今までの凜一への恋慕は決して綺麗なものじゃない。

血の繋がった弟への肉欲というものは、同性愛よりも認められない。だが血の繋がった弟だからと言って、愛することは許されないのだろうか…

インセスト・タブーについて俺は色々と考えてきた。

結局のところ、近親者に性欲があることを禁忌とするのは宗教的な大儀であり、自然の摂理としては容認される説もある。その逆で、交配で劣性遺伝子を生み出さないように生物学上、遺伝子の中に組み込まれているという説もある。

どっちにしても喜ばしいことでもないだろう。

それに同性同士で劣性遺伝子もクソもあるか。

単に俺は凜一を俺のもんにしただけ。単純な理由だ。

だけど、もしそれを押してしまったら俺の意識の中で、その想いは全く別の感覚になりえてしまうものなのかもしれない。それが怖いんだ。

それをどう理解してもらえるのか…くそっ、うまく言葉に出来ない…

黙り込んだ俺に痺れを切らしたのか、鳶谷さんは口を開いた。

「君と凜一は酷いケンカをしたことがあるよね。凜一がまだ俺と知り合う前だから、中一の夏ごろの話か…凜一の火遊びを君は怒った。そのことで凜は長い事自分を責めていて、兄貴に面と向かって顔を上げられやしないと悔やんでいた。快樂の誘惑に自分が弱い所為だと嘆いていたよ。思春期真っ只中だし、あれほどの容姿で本人は好奇心旺盛。そして孤独だ。その時だけのセックスを欲しがったのを俺は責めはしない」

「…」

あの時の俺はそんな凜一の孤独を理解できなかった。ただ不良行為をしていたことと、それ以上に俺が慈しんできた肉体を他人に委ねたと言う俗物的な意味合いでの凜一の行為が許せなかったんだ。

「俺はね、凜一がかわいそうで仕方なかった。なぜこんな…心も外見も綺麗な子を家族はほっておくのか…特に慧一くん、君はわかっていたはずだ。凜一がお姉さんを亡くし、喪失した心に愛を欲しがっていたことを。お姉さんと君が赤ん坊のころから凜一を育ててきたと聞いた。凜一は君の愛情を疑ったことはない。俺に何度もそう言った。そんな君が何故凜一を支えられなかったのか…俺は不思議でならなかった」

「…」

鳶谷さん、あなたにはわからないんだ。俺があの時凜一の傍にいても、俺には凜一を救う事はできなかった。俺自身が凜一を食うかもしれない。そんな性欲塗れの俺が凜一の傍にいたっていい影響は与えない。俺は俺自身が恐ろしかったんだ。だから凜一から離れた。

俺はどういえばいいのか迷いながらも、言葉を選びながら話し始めた。

「鳶谷さん、凜一があなたを心から信頼し、頼っていたのはわかります。あなたがいたから今の凜一がいるのだと思います。だけど…俺の凜一への想いは、単純に口で言うことは出来ない気がするんで

す。

愛している、抱きたい、だけど、抱けない。罪だから？いや、もうそんな一般的な道徳の話じゃない。

俺が凜一を愛するのは弟だからではなく、ただ凜一という人間を愛してきたのだと思う。だけど凜一が俺の弟だからこそ、こうまでも愛してしまうものだともいえる。

俺と凜一は孤島に取り残されたたったふたりの人間のようなのだ。

愛する者はお互いでしかない。求めるのも慰めるのもお互いだけ。だけど、血の繋がった俺たちは兄弟という縁は切れない。切りたくないんだ。」

「セックスをしたら凜一とは兄弟ではいられなくなると思うのかい？」

「少なくともマトモな兄弟とはいえない。遊びで寝るなら別だ。だけど俺たちの間でそれは考えられない。そして、寝た時点で、凜一も俺もその後、未来の別れを予期しなければなくなる。絆は色を違えてしまう。そう思いませんか？」

「絆の色合いが…難しいね」

「俺は凜一にとって絶対的な存在でいなきゃならない。親父がいても家族は俺と凜一だけとっていい。家族なら凜一がこれから誰かを愛そうが、結婚しようが喜んでやれる。だけど、寝てしまったら…俺は凜一を手放せなくなる。誰にもやれなくなる。他人と寝る凜一を許せないだろう。俺は相手を憎むかも知れない。そういう俺を凜一は憎むかもしれない。

…俺たちの心は離れ離れになってしまう。
俺はそれが恐ろしいんだ。

今の凜一をほっておいて勝手な言い草だと思います。だけど、俺は大学院を出たら凜一と暮らしたいと思っています。凜一が許すかどうかはわからないけれど、できるなら一緒にいてやりたい。

俺は…自分を半分殺す事で、凜一の兄でいられる。凜一を孤独には

させたくない。だから…兄として、彼を見守っていたい」

そう…俺はただ凜一を見守る役目として存在しようと、自分に言い聞かせている。それが一番正しいことだからだ。だけど、それを本当にできるかどうかは…俺にだってわからないんだ。

「もし、凜一が慧一ちゃんと寝たいって言ったら？」

一番考えたくないことを、この人は抑揚も無く簡単に言ってくれる。俺は鳶谷さんが嫌いになりそうだ。

「…考えた事もない。凜はそんな気持ちを俺に対して一瞬でも考えたりはしていない。これは確信できる」

「今は無くてもしずれば…凜一は慧一くんにそういう思いを抱くかもしれない」

「あなたが言わなきゃ凜は気が付きはしない。そここの鈍感さは筋金入りだ」

「じゃあ…俺がゆったら？」

「…殺しますよ。俺の凜を不幸にしないで下さい。あの子は光り輝く子だ。俺は母親からあの子を、凜一の未来を預かったんだ。俺の手で光を翳らすわけにはいかない。勿論鳶谷さんにもです。あの子の信頼を裏切らないで欲しい」

「…わかった。どっちにしたって俺はオブザーバーでしかない人間だ。俺も凜一には幸せになってもらいたいと思う。だが、あいつが本当に君を欲しがったら、君にさえ止められないと思うよ」

「じゃあ、その時は兄弟の縁を切ってやりますよ。凜はそれを望まないだろう…だから俺たちが交わる事は永遠にない…」

そこまで言って俺は思わず苦笑した。なんという閉塞感だろう…

「…矛盾してますよね。凜が欲しくて堪らないのに、絶対に寝たくないなんて…」

「…」

「とても矛盾している。だけど、それが俺なりの真実の愛だと感じているんです」

「真実の愛」…

自分の口で言葉に出したら、おかしいくらい軽いものに聞こえる。けどそれ以外の言葉に表せ無いのも事実だった。

俺は凜一を俺の愛でくるんでやりたい。

そして出来るなら俺が憎まずに済むような形で凜一の幸せを願って生きてゆきたい。

…そんなことができるだろうか…

いつの間にか高速を降りた車は、山間のゆっくりしたカーブを何度も繰り返す。

洪水のような朝の光が車内を照らしたり影を落したり、まるで俺の心のように思えてしまった。

なぜ俺はこんなに凜一を愛してしまったのだろう。繰り返す疑問。

どれだけ考えても見つからない答えは、いつか俺を壊すんじゃないかと思っていた。だけど、違う見方をすれば、凜一をずっと愛していくことは、俺にとって救いなのかもしれない。

「月村のことだがね…」

「え？」

半時ほど沈黙していた鳶谷さんが口を開く。

程なく到着場所だとナビの画面が教えている。

「彼も色々あったんだよ。向こうで苦労してやっとプロのピアニストとして認められて、これからという時、好きになった歌姫に騙されて、多額な借金を背負わされた。それから人を信じるのが怖くなったと聞いたよ。なんとか借金を返して、自分の好きな道をまた究

めようとしていたんだ。…運命とは酷いものだね。どうしても神様は彼の命を奪わなきゃ気が済まないらしい。苦しんだと思うんだ。何かにすがりたかったんだと思う。人は暗闇の中では、僅かでもいい。光が欲しいと思うだろ？それが凜一だった…」

「凜一は…月村…さんを愛しているんでしょうか？」

「わからないよ。俺にはそう見えなかったから…凜一は月村に惚れている…恋をしている感じじゃなかったし、ただかまって欲しくて甘えたがっていた。月村は根っからの無骨者で人当たりも巧くなかったし、無口だった。凜一に対してもそっけないどころか、無下にしていたんだ。凜一はそういう月村を振り向かせようとしていた。正直興味本位だと思う。だけど…」

「だけど？」

「月村は本気であの子に惚れていた。だから、心配なんだ」

「どういうことです？」

「月村は、アメリカでは護身用にピストルは当たり前だと話していたことがある。今も持っていると言っていた。それがアパートには無かった…」

「ちよつと待つてください！鳶谷さん、あなた、今までそんなことを一言も俺に言わなかったじゃないかっ！」

「君に余計な心配をさせたくなかったんだよ」

「余計でもなんでも、そんな大事なことを黙っているなんて！」

ピストルを持っていることはどういう意味を持つか…考えなくてもわかる。

それで凜一を脅す事も…それ以上の事だって…何を仕出かすかわからないってことじゃないか。

俺は怒りが込み上げてどうしようもなくなった。

「車を止めてください！」

「え？」

「あなたみたいな人と一緒にいるのは我慢できない。俺はひとりで

凜を探す」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。もうすぐ着くから」

「…」

道路上に一台も走っていないことを確認し、俺は鳶谷さんの持つハンドルを右に回した。

鳶谷さんは慌てて急ブレーキを踏む。

俺はドアを開けて車から降りると、進行方向へ向かって歩き出した。

「慧一君！」

鳶谷さんの声には振り向かない。

腹が煮えくり返るとはこのことだ。

何であんな男に、今まで隠していた凜一への思いをぶちまけてしまったのだろう。

正面を向くと向こうから自転車に乗った警察官が見えた。

俺は急いで彼に近寄った。

別荘の住所を伝えるがその警察官は首を捻る。

「外壁は萌黄色。臙脂の屋根に、天使の風見鳥が、ついているんです…」

後ろから走った所為で息が切れ掛かっている鳶谷さんの声がした。

「ああ、その別荘ならその脇道をずつと行ったところです。何かあったんですか？」

「ちょっと、息子が友人の別荘に遊びに行つて帰らないもので、迎えにきたのです。たぶんこの辺りの別荘だろうと思うんですが…おまわりさん、すみませんが着いて来てもらえますか？」

彼は息子を案じる父親の顔を作り、見事に警察官を騙してみせた。

巡査官は快く頷いて、俺たちの後ろから自転車を押してついてくる。俺の憤りを知ってか知らずか、鳶谷さんは平然と俺と肩を並べて歩いている。

俺は鳶谷さんを恨めしく横目で見ながら聞いた。

「車は？」

「君が勝手に飛び出すから乗り捨ててきた」

「俺の所為にしないで下さい。あなたが黙っていたのが悪いんだ」

「…悪かった。でも慧一君は…突拍子もないことをやってのけるから驚いたよ。凜よりも手強いなあ」

「凜と比べるところじゃない。俺はあなたに無性に腹が立って仕方が無いんだ」

「だから謝っている」

「だいたいあなたは…」

パーン…

朝もやが残る林に響いた音は…。

俺と鳶谷さんは顔を見合わせた。

巡查官は、すぐに銃声だと気づいたようだ。あわてて自転車を倒して走り出す。

俺たちも急いだ。

「何があつたんですか？」

走りながら巡查官が聞く。

「こつちが聞きたいぐらいだ」

パーン…

もう一度、銃声が響いた。

二発の銃声、これがどんな意味を持つのか…

心臓の音が、耳から飛び出すぐらいに鳴り響く。

考えたくない…だけど、凜一が銃で撃たれ、倒れている様が脳裏に映る。

そんなことは絶対に、絶対にあってはならない。

足元の砂利に足を取られながら、懸命に走った。

夏の日差しが木漏れ日を作る。その光が目映る茂みも木々の肌も斑にしている。

俺は光と影が目に入り流れていくのを感じながら、凜一の姿を探した。

凜一に何かあったら俺は…俺は一体どうすればいい。

砂利道はけもの道になり、あたりの木々も次第にうつそうとしていく。

その突き当たりに…白い服が見えた。

俺は急いで近づく。

榆の木に寄りかかるように、その男は倒れていた。

写真で見た顔…月村孝道、だった。

白いシャツは飛び散った血痕と、流れる血の色で赤く染まりつつある。

右手にはピストル。

左腕の上部と右の側頭部を打ち抜いている。

さっきの二発はこの二箇所を貫いた音だ。

だが、凜一が打たれていないとは限らない。

俺は後ろから来た鳶谷さんと警察官が月村に近づくのを見て、それと反対に歩き、凜一を探した。

見る限りでは辺り一面には凜一の姿はない。

大体凜一がここに居るといふ確かな情報などは始めからないのだ。

だが、凜一はこの月村と一緒にいると思って間違いはない。

だったら、凜一はどこにいるんだ。

ふいに天上を見上げた。

斜め右上に天使の風見鳥が見えた。

鳶谷さんがさっき言っていた建物だろう。

俺はそれを目指した。

剥がれかかった萌黄色の外壁を見た時、嫌に胸がざわついて仕方なかった。

凜一はここにいる。たぶん予感当たる。

ただ無事で…いてくれ。

階段を昇るのも面倒で、乱暴に玄関のドアを開けた。

誰も居ない静まり返った簡素な室内。

俺は凜の気配を感じた。

「凜一っ！」

俺は叫んだ。

凜一はここにいる。

もう、確信しかない。

俺は部屋中のドアを立て続けに開け、凜一の名前を呼ぶ。

これだけ呼んでいるのに返事が無いなんて…

最後に残った部屋のドアを開け、中を見る。

部屋の大部分を占めるキングサイズのベッド。両側の壁に本棚があった。

大きく開いた窓からは、高原の涼しい風が吹き抜け、カーテンを揺らしている。

ベッドの上の水色のシーツに、横たわる凜一がいた。

上半身は裸、腰から下は薄い毛布が掛けてある。

凜一は仰向けに、胸に両手を重ねた姿で…眠っていた…

…いや、眠っているのか？

名前を呼びながら、ゆっくりと近づいてみる。

凜一は蒼白な顔でピクリともしない。

陶磁器の人形のような…動かない、人形のように。

俺は後ずさった。

早鐘のように響いていた心臓が、ピタリと音を止めた。

凜は死んでいる…そう思った。

息が出来ない。

俺はその場に両膝をついた。

凜一が死んだ…

俺の、たったひとりの…俺の凜一が死んでしまった。

俺の所為…全部俺の所為だ…

凜一をひとりにしたのも、凜一を悲しませたのも、全部、俺が傍に
いてやれなかったから…

だから凜一は、あの男についてここまで来たんだ。

俺は…

凜を…

「慧一くん！どうしたんだ？」

誰かが俺を呼んだ。

顔を見る。

…鳶谷…さんだ。

「凜が…死んでしまった…」

「ばかなっ！」

鳶谷さんは、俺の横を通り過ぎると、ベッドの凜一に近づいた。

凜一の手を取り、顔を近づける。

「…大丈夫だ。呼吸も脈もしっかりしている。慧一君、安心しろ。」

凜一は無事だ」

「…」

無事？

… 生きている？

… 本当に？

本当に凜一は…？

「凜一、起きろ！」

寫谷さんは凜一の身体を揺らし、声を掛けている。

「駄目だ。目覚めない。何か、睡眠薬でも飲まされているのかもしれない」

「…」

「凜一をここから運び出す。さっき警察と救急車を呼んだから、もう間も無く到着するだろう。慧一君っ！しっかりしてくれ。凜一は君が守るんだろう」

寫谷さんはそう言うつと、毛布に来るんだ凜一を抱き、部屋を出て行く。

ひとり残された俺は足腰に力を込め、なんとか立ち上がった。

天国と地獄の間を往復した気がした。

凜一の寝ていたベッドを見渡すと、凜が寝ていた枕元に、橙色の山百合が一房置いてあった。

俺はそれを手に取った。

その山百合の陰に隠したように、A4サイズの画集が置いてあった。表紙には「Angel moment」の表題。

その画集に挿まれた白い紙のページを見た。

書物を持った天使「Rasriel」の絵が記されてあった。

七天使のひとりだ。

よく見るとその天使の顔は、どことなく凜一の顔に似ている。そして、白い紙には走り書きで、凜一宛の手紙があった。

たぶんあの男、月村孝道の遺書とも言える手紙だろう。

俺は一瞬、破り捨ててしまおうと思った。

だが、その天使の絵を見てみると、なんとかその気持ちを抑えられた。

これは凜一への思いが詰まっている形見だ。俺に捨てる権利はない。

俺は月村という男に対しては憎悪にも似た嫌悪感しかない。

だが、俺はわかっていた。

あの…自らをピストルで打ち抜き、死んでいる姿は…あれは紛れもなく俺の姿だ…と。

俺は、気が付いていたんだ。

いつか

俺は

凜一を殺す

もしくは

俺が死ななければ

ならない

いつか…

その時が

来る事を…

救急車で病院に運び込まれた凜一に、俺は付き添った。

凜一は睡眠薬を飲まされているだけで、身体のどこにも外傷はなく、いわゆる無傷の状態だった。

月村の方は自分が負うからと、鳶谷さんは警察に行つたきり連絡は途絶えたままだ。

俺は父親に連絡し、事の次第を簡単に説明した。すぐに帰国するという父親の慌てた声に、この人も人の親なんだと、思った。

病室でひとり眠り続ける凜一の傍で、俺はただじつとその顔を見つめていた。

あの時…凜一が死んでしまったと思った時、俺は…すべてを失ってしまったと絶望した。

だが同時に俺は…どこかで思っではいなかったか？

これで凜一は誰のものにもならない…と。

俺の積年の妄執も終わりを告げたのだ…と。

…俺は自分が恐ろしい。

もし、あのまま凜一が死んだとしたら、俺はその場で自殺しているだろう。

ベッドで眠る凜一を抱いたまま、俺は自分の胸にナイフを刺して…心中を図った報われぬ恋人のように…

そして、俺にとっての真実の安息が与えられる。

だが、それは完全に間違つた妄想だ。

凜一は生きている。そして俺も生きなければならない。

凜一の為に…

眠りについたまま、ビクリともしない凜一の手を取る。

「凜一……」

名前を呼んだ。

ずっとおまえだけ呼び続けてきた。

これだけじつくりと凜一の顔を間近で見たのはどれくらいぶりだろうか……

少しだけやつれて見える青白い顔。だが何一つ遜色ない容貌だ。

好みの顔は十人十色とはいうが、凜一を見る者は誰も彼を否定するものはいない。

その気高さ故に妬む奴らがいるとしても、凜一は齒牙にも掛けない。また、凜一を賛美、へつらう輩にも、同様に。

その癖、目に見るもの触れるものすべてを思いどおりにしなければ気が済まない傲慢さ、勝手し放題で回りを振り回すのには全く気取らない。

危険な森や沼地に怖いもの知らずで、入り込む。その馬鹿さ加減でさえ、人は愛すべき勇者として称えるだろう。

凜一はいつだって自由だった。

もし凜一の顔が瞑れたとして、肢体が不自由になっただとしても、俺の凜一への愛情が損なうとは思えない。

俺が愛してやまない凜一は、生きている宿禰凜一に他ならないからだ。

どれだけこの弟の寝顔を見続けてきたのだろう。

ずっと、生まれてきた時から、おまえだけを見てきた。

欲情があろうと、お前を愛しいと思う想いに偽りはないよ。

ただ、おまえを壊すのが怖かった。

俺への信頼を裏切るのが恐ろしかった。

おまえを失いたくない。
だから、

俺は、おまえの望む者になる…それだけのものになろう…

「凜一…愛してる」

凜一が目覚めた時、俺は凜一の本当の兄として生まれ変わる。

凜一を守るために、凜一が幸せに暮らせるために、俺は自分の感情など捨ててしまえる。

凜一を二度と泣かすようなことは絶対にしないと誓う。

スローモーションのように凜一の瞼が開いた。

まだどこか焦点の定まらない黒まなこが俺を見た。

「…け、い…」

「凜…」

「ここ、どこ？」

「病院だよ」

「…どうしたの？」

「おまえは、睡眠薬で眠っていたんだよ」

まどろみのような静かな会話。

それすら珠玉の時に思える。

「…慧、泣いてるの？」

俺は泣いていた。

凜一の姿があまりにも

あまりにも無垢すぎて、

あまりにもひとり、遠くにいる気がして…

悲しかった。

凜一、

おまえは誰も汚す事ができない誇り高く生きる者だ。

俺はおまえを守る。

そう誓った、あの日、母が言った言葉を思い出す。

「凜一を光に導く者」に、俺はなろう。

痩せた凜一の身体を抱きしめ、嗚咽しながら、俺は何度も「離れない」と誓った。

俺は、やっと凜一の元に帰ってきた。

二日後、凜一とふたり自宅に帰り着くと、緊張した面持ちの父親と叔母たちが待っていた。

この騒ぎが宿禰家にとってありがたいことはわかっている。

一端の外交官である親父にとっても醜聞極まるものだろう。

事件の全容はわかっている事だし、凜一に咎めるところはない。

だが、中三の子供を放任していた責任は俺も親父も取らなくてはいけない。

事実、この事件を面白おかしく書き立てるマスメディアもいくつかあった。

凜一の名前は出なくても、月村の自殺は新聞沙汰にもなっていた。

この件で憔悴している凜一に追い討ちを掛けないか、それが心配だった。

俺は凜一の傍を一時も離れなかった。

凜一は最初、それを鬱陶しそうにしていたが、一週間もすると、素直に胸の内を表すようになった。何より、心配していた拒食症の症状が今回は免れていた。

元より俺たち兄弟はそれほど食には関心がなかったから、飢えない程度に食うだけだったが。

凜一は月村の事は、何ひとつ俺には聞かなかった。

新聞やインターネットで詳細は知っているはずだ。自分が睡眠薬で眠らされていた時、何が起こったのかは…

ある夏の夕刻、まだ明るい空をふたり並んでリビングに通じるベランダから眺めていた。

一時間前に降った夕立の空に虹が掛かっていた。

「俺、救えると思ったのに……」

凜一がポツリと呟いた。

「思い上がりも過ぎる。ここまで来るとバカみたいだ」

月村の事を話す気になったのだと思った。

「慧一の言うとおりにあの人から離れれば……あの人はもっと生きていたのかも知れない」

凜一は自分を責めている。

誰も彼の命を救う事はできない。だけど……

俺はあの男の死に顔を見た。

あれは、死に行く自分に満足していた顔だった。

「凜一……人を救うなんて簡単にできない。でもあの人は凜一存在に救われていた……それは確かだよ」

「本当に？」

俺は自分の部屋に行き、月村が置いていった天使の画集と凜一への遺書を手に取った。

これを凜一に見せるべきなのか、迷いはあった。

だが、月村の本心を隠したままではいけない。

たぶん凜一のこれからの人生にこの事件は深く関わっていくのだろう。ならば、凜一への思いがなんであつたのか凜一も知るべきなのだろう。

俺は、月村の遺書だと言い、凜一に差し出した。

凜一はそれを見るとにわかに顔色を変えた。

黙ったまま、その画集の表紙を凝視する。

「あの人はおまえを本当の天使だと思うことで、救われていたのかも知れない……」

俺の言葉は聞こえているのだろうか。

凜一は瞬きもせず凝視し続けている。

そして、月村の最後の言葉を綴った紙切れを手にとって、黙読した。
俺は…その手紙は、凜一を悲しませるか、それとも楽にさせるのか、どっちかだろうと思っていた。だが、凜一はその予想を裏切る行動に出た。

凜一は手にした遺書を躊躇いもなく散り散りに破り、足元に捨てた。その瞳は激しい憤りを湛え、口唇は微かに震えていた。

「さよなら、月村さん」

彼は聞き取れないほどのくぐもった声で呟いた。その声すら怒りに満ちていた。

俺は怒りを全身に纏った鬼神のような凜一を見て、その鮮烈さに、新たに魅了されてしまう感覚に陥った。

なんという存在なのだろう。

俺はおまえを一生見続けても飽きることなどないだろう。

凜一は、庭に歩き出し、上を向いた。

彼はすでに怒りを解き、薄れる虹を惜しむような瞳で暮れかかる空を仰いでいる。

何ひとつ傷を残さない…月村のことなど何もなかったかのように。だが、忘れようとしているわけではない。

凜一は自分の中にすべてを吸収しようとしているんだ。

彼は跳ね返すのではなく、すべてを受け入れつつ、成長していく性質なのだ。

そういう凜一ならば、どこかで負の感情が出てもおかしくはない。俺はそれを見極め、取り除く配慮をしていかなければならないだろう。

夏休みが終わり、新学期が始まった。

俺は一年間、大学院を休学することにした。

凜一は驚き、自分の為に休学することを嫌がったが、俺はその意味を細々と説明すると、渋々納得した。だが、内心喜んでいるのが見て取れた。

凜一が寂しがりなのはわかっていた。さすがにこの状態でひとりであるには耐えられないのだろう。休学した事実は凜一の一抹の不安を消しさったようだ。

あの事件以来、凜一と俺の関係は完全に修復したと言って良く、凜一は昔のように屈託のない笑顔を俺に見せるようになった。

当たり前の幸福な日常が戻ってきた。

だが、学校ではとんでもないいじめが凜一を襲っていた。

凜一は全く背を向けなかった。

苛めについては、色々な目に合っているとは言うが、それで落ち込む気配は見受けられない。

しかし、相当の被害は受けているはずだ。

カバンや教科書の落書きなどはまだかわいい方だ。

学生服は汚れ、終いには無くなり、とうとうジャージで帰ってきた。次の日は凜一は平気な顔で、私服で登校した。

生傷のひとつやふたつは珍しくなく、俺は学校に怒鳴りに言ってやるつかと言うと、凜一は「いいんだよ。ケンカするの、楽しいぜ。

生きてるって気がするね。それにストレス解消にもなる。慧に武術関係を習っていて良かったよ。負ける気がしないもん。相手を病院に送り込む寸前で止めるのが賢い遊び方ってね」

凜一はウインクしながら、笑っていやがる。

恐れ入った。

細やかな神経だと思えば、とんでもない肝の据わったところがある。あの容貌で…と、凜一を知らない者は疑うだろう。

進学的事で、学校に呼び出される。

案の定、事件の所為で高等部への進学希望を拒否された。

凜一は俺の後輩になりたがっていたから、酷く残念そうだった。俺も望みを適えさせてやりたかったが、私立の評判はお家の大事だから仕方ないことだった。

それに大半の生徒が高等部に移るんじゃあ、いじめが無くなるとは思えない。

俺は凜一に合う高校を探すことにした。

それにはこの地域から出る必要がある。

俺は凜一の意向を聞き、帰国した父親に相談した。

父親は自宅を売り、凜一の環境にいい家を探すことを提案した。

鎌倉の一等地に条件のいい建築中のマンションを購入し、翌年の一月に引っ越すことにした。そこから歩いて10分程の場所に、凜一の受験する高校もある。

可否を問う偏差値はかなり高めのものだったが、凜一なら大丈夫だろう。

俺が徹底的に教え込めばいい話だ。

街は師走を向かえ、どことなく気忙しい空気が流れ始めていた。

俺達は生まれ育った家での最後のクリスマスを、ふたりで過ごした。家にある限りのクリスマスの飾りを並び立て、折角だからと買ってきたモミの木に派手にデコレーションした。手作りの料理とワインで、クリスマスを祝う。

「なんだか…思い出しちゃうね。梓のこと…」
「…そうだな」

「梓はいつも俺に天使の格好させていたよね。自分はマリアさまになりきってさあ…慧は、何の役だった？」

「キリストの誕生を祝う賢者だよ。その他大勢、羊飼いの役もへロデ王の役も俺がやった」

「そんなにやってたの？むちゃくちゃだなあ」

「梓の命令さ。とんでもない横暴なマリアさまだろ？」

「慧の女嫌いがわかる気がする」

「梓はいい女だったよ」

梓が生きていれば、俺はともかく、少なくとも凜一をこれほど寂しがらせたり苦しませる事はなかっただろう。凜一は梓を母親代わりにしていた。そして梓も俺とは違った愛情を、凜一に注ぎ込んでいた。

俺の梓への感情は凜一とは違う。

梓はいい妹だった。愛してもいた。だが、到底凜一への愛情とは比較できないものだった。

凜一には口が裂けても言えることではない。

そう考えると、俺も色んな秘密事を抱える哀れな贖罪者だと思う。

「この家無くなっちゃたら、梓は恨むかなあ…」

「梓は…母さんもだけど、凜一の幸せをいつも願っていたから、凜

が幸せなら、この家が無くなっても悲しまないと思う」

「俺は幸せだよ。母さんも梓も…父さんもいなくてもさ、慧一がいてくれるから…十分幸せ」

「…」

判ってはいるが、凜一がこうも素直に甘えてくれると、気恥ずかしくなってしまう。俺はポーカーフェイスだから、そういう気持ちを读まれる事はないんだが。

「ここ何年かは慧とこうして穏やかな気持ちで居られなかったじゃん。だから、なんかね…すごく嬉しいんだ。慣れてしまふとありがたみってわからなくなるって言うらしいけど、慧といるのってね、安心したりドキドキしたり、嬉しかったりするしねえ。俺、単純に慧と居るのが好きだし、傍に居てくれてありがたいな…って思うよ」

「…俺も凜の傍に居るのは…大変だけど、楽しいよ」

「本音が出た…不出来な弟が色々仕出かして、本当のところは参ってる？」

「いや…全く…そういう気持ちにはならない。凜は弟だけど…俺以上に大事なものだから…守りたいって、本能的にね、そう思うんだよ。俺はおまえが幸せになってくれるのを、この目で確かめられたら、生きている意味を感じると思う」

「宿禰慧一として生きるって言った意味だね。でも慧自身の幸せはそれでいいの？俺が誰かと幸せになったら、慧はひとりになるんじゃない？」

「存在の距離間としては離れることになっても、俺にとっては凜と離れたことにはならないと思う」

「…」

凜一は持っていたフォークをカチンと音をさせ、皿の上に置いた。

「…凜一はどこにいても俺の弟だし、俺が生きている限りは守ってやりたい存在なんだ」

「だったら、俺も他の誰かとくつついたり、結婚したりしないよ。慧の傍から離れたくないもの」

「ばか…俺の傍にいたって本当の幸せは手に入らないから…凜は愛する人を探すんだよ」

「兄貴がひとりなのに俺ばっか誰かと幸せになれるかよ」

手酌でワインのボトルからグラスに注ぐと、凜は舐めるように少しずつ飲み干していく。

不味く感じるなら飲まなければいいのにと、俺は笑う。

「それはそうとさあ。兄貴は今付き合ってる人はいないの？」

「…いないね」

「向こうにも？」

「正直、勉強が忙しくてそれどころじゃない」

シカゴで暮らしていて二年、なにもなかったわけじゃなかったが、どれも遊びの域を出ないものばかりだった。

一時的な遊びと言うものは終わればむなしさだけが付きまとうものだから、しなきゃいいはずだが、それでも独り寝をするよりもマシか、と思う夜もあるってことだ。

「俺もないよ。色んな奴と寝てみて思うけど…あ、慧はこんな話嫌い？」

「いや」

「怒ったりしない？」

「しないよ。実を言うとな、俺も凜に偉そうな口を叩ける柄じゃないんだ。おまえの歳頃には結構遊んでいたしね」

「…全然気づかなかった」

「凜はまだ5、6歳だろ？わかるわけないよ」

凜一の性体験を聞かされるのは少々胸の痛い話だが、凜一が胸の内を晒したいというのなら、俺はそれを受け止めなきゃならない。

俺はグラスたつぷりに注いだワインを一気に喉に流し込んだ。

「俺、色んな奴と寝てみたの。勿論好きなタイプじゃなきゃ寝ないよ。女も男とも結構した。でも男の方が…俺が下の場合ね、大方優しいんだよね。俺が子供だからって所為も大きいんだろうけど、みんな優しくしてくれるから甘えちゃうんだろうねえ。恋をしているわけじゃないんだけど、そういう錯覚に陥るのかね。なんか抜け出せないんだよね。そういうと俺の弱さだと思う」

「中学生なんだから弱くて当たり前だ。その歳で悟られたら逆に気持ち悪いぜ」

「そうかな…だったら少しは気が楽になるよ。俺、自堕落でどうしようもない奴って思っていたからさあ…」

「どうしようもないのは俺の方だ。こんなに尊い子をほったらかしにして、寂しがらせていたんだからな。」

「月村さんとは付き合うつて感じじゃなかったんだ。あの人はノーマルだったから、俺を抱こうとはしないしさ…でも俺、一回ぐらいあの人と寝たかったよ…慧は怒るだろうけど」

「怒らないよ」

「俺、随分セックスやってないよ」

「知ってる」

「普通の中学生より知りすぎちゃったから、しばらくはおとなしくしてる方がいいと思って自重してますけどね…たまに人肌恋しくなる時あるよ。困ったときの自家発電っていうけど、やっぱりね…他人の肌であつたかいって感じるじゃん」

「ワインに酔ったのか、凜一はあの前日の晩のことを喋りだした。」

「月村の事を凜一が口にしたのは、遺書を破いた時以来だった。」

「月村さんとはつくに覚悟していたんだね。あの夜は本当の意味で最後の晩餐だった。月村さんは俺のことをキリストって言ってた。」

俺、そんなのになりたくない。それで俺は月村さんをユダみたいだと言ったんだ。キリストを好きすぎて破滅した男。ねえ、慧。俺は月村さんをユダにしてしまったのかな……」

「そんな事は……」ないとは言えない。月村は進んでユダの役を引き受けた。それはあの人の優しさだったんじゃないだろうか……

俺は酔いつぶれ気味の凜一を見つめながら、月村が何故凜一を抱かなかったのかを思い巡らせていた。

酔いが回り、つぶれた凜一を部屋へ帰るように促しても起きないから、俺は凜一の身体を抱きかかえて連れて行くことにした。

「あ、お姫様だっこだあゝ」赤い顔をした凜が足をバタつかせる。

「じっとしてろ。床に落つことすぞ」

「はい」

「おまえがこんなにお酒に弱いとは知らなかったよ」

「未成年に飲ませておいて良く言うねえゝ今から少しずつ覚えればいい話だよ」

「そりゃそうだけど…と、言うか、おまえ、軽すぎないか？」

「ん？」

「体重だよ」

「ん…50無いよ」

身長は確実に伸びているのに50キロないなんて、痩せすぎだろう。もつと料理のレパートリーを増やして、こいつの食生活の管理をキチンとしなきゃならない。

「ねえ慧、聞いて？」

「聞いてるよ」

凜は俺の首に両腕を回してご満悦そうな顔で俺を見る。

「俺、随分セックスしてないよ」

「さつきも聞いた」

「慧も恋人居ないっていったよね。じゃあ、俺たち恋人にならない？」

「俺たちは兄弟だろ？」

「じゃあ、寝るだけでもいいじゃん。慧、俺とセックスしようよ」

「…やだよ」

「なんで？」

「酔っ払いのたわごとには付き合えない」

「慧は俺を好きだろう？愛してるって言ったじゃない。兄弟でも好きなら寝たいって思っても不思議じゃないよね。男同士なら子供は出来ないし、一回ぐらい寝てもいいんじゃない？」

「凜、そういう話、やめにしないか」

「なんで？」

「俺はおまえを愛しているけど…セックスの対象にはしたくないんだよ」

「どうして？」

「…弟だからだよ」

「…」

凜は黙り込み、少し拗ねた顔で俺を睨んだ。

凜一の部屋のベッドに、凜の身体をそつと置く。

艶やかな黒髪が薄いブルーのシーツに広がった。

赤く染まった目元や頬が、秀麗な凜一の横顔を不思議と清楚に魅せている。

俺は息を止めてそれを見つめた。

> i 5 2 8 6 — 2 7 3 <

「慧…」

「なに？」

「どうしても駄目？」

駄目という言葉が何を意味しているのかは理解している。

凜、俺は困ってしまうよ。

おまえにそんな目で懇願されると、折角決心した心が揺らいでしまう。

黙っていると、片腕を自分の目元に押し当てた凜一が、もう片方の手を俺に差し出した。

俺はその手を取った。

「時々…眠れないんだよね。寝たらあの時みたい…慧は月村さんじゃないのはわかってるけど…俺の傍から消えていってしまいそう
な気がする…俺、臆病だからさ…」

凜一が何を求めているのかはわかっていた。

俺は凜一の右手を絡ませ、口づけた。

「大丈夫、俺はここにいる。凜一の傍から離れない」

「…本当に？もう俺をひとりにしない？」

「誓うよ。絶対だ」

腕を離れた凜一の黒い瞳が俺を見つめた。

「じゃあ、誓いのキスして」

「…」

正直キスで良かったと胸を撫でおろした。

セックスでも強要されたら、この状況では俺もやりかねない。

やったところで、俺も凜一も後悔するのは目に見えている。

俺は凜一の前髪を払い、額にキスを落とした。

凜はつまらなさそうに口をへの字にすると「赤ん坊じゃないんだからさ。口と口でやんない？」と、言う。

困った弟だと諦め、今度は口づけると、凜は当たり前のように舌を差し入れ、逃げないように俺の後頭部を押さえ込んだ。

諦めた俺は凜の思い通りに任せることにした。

凜一の口内も吐く吐息も、飲んだワインよりも甘く純度の高いアル
コールの香りがして、うわばみの俺でも、酔いつぶれてしまいそう
だ。

濃厚なキスを味わって気が済んだのか、凜一は口唇を離し、満足そ
うに微笑むと目を閉じ、そのまま静かに寝息をたて始めた。
絡ませた指の力はまだ弛めていない。

俺はその寝息を確かめ、凜一のどこか切なげな寝顔を見つめ続けた。

そして…ついに感情が押し流されてしまう。

神様…キリストでも仏陀でもムハンマドでも…誰でもいい。

どうか、凜を…凜一を救ってくれ。

降りかかる災いのすべてを振り払って、この子を守ってくれ。

俺の幸せなどどうでもいい。

凜だけには…本当の幸福を与えてやりたい。

それだけだ…

それだけで俺は…救われるから。

俺は一心に祈った。

どこかの酔っ払いのメリークリスマスと言う歓声が、窓の外から微かに聞こえていた。

翌年、凜一の学校は一月からは受験に忙しい生徒は自由登校になる。それを頃合と見定め、俺たちは新築のマンションに引っ越した。

13階建ての最上階は見晴らしも良く、リゾート気分を味わえる。

「俺、こういうのが理想だったの。鳶谷さんのマンションがね、とにかく凄くかつこよくて、見晴らし最高だったからさあ……」

凜一も有頂天で、自分の部屋をあれこれとコーディネートしている。

「兄貴と俺の二人じゃもったいない広さだね」

「親父の部屋も空けときな。俺たちのパトロンさんなんだから」

「わかってる。父さんは父さんなりの愛情を示してくれてるってことは。これでも十分感謝してんの」

「うん」

親父はここを買う際に、条件として、マンションの名義は俺と凜一の名前にするように命じた。親父はやはり俺たちに対して、詫びる気持ちがあるのだろう。彼なりの精一杯の謝罪の形ならば、ありがたく受け取ろうと、凜一と話し合い同意した。

「鳶谷さんと言えばさあ、あれから一度も連絡をしてないんだ。『サテュロス』にも行つてないし……」

部屋の後片付けもなんとか一応の形になり、注文した引越し蕎麦を目の前にした凜一が、口を開いた。

「そうだね。鳶谷さんには色々世話になったのに、ちゃんとお礼もしていなかったし……一度一緒に店にでも出向いてみる？」

「……」

「凜？」

「俺はいいや。慧、悪いけど、代わりにお礼を言いに行ってくれない？」

凜一は少し顔を曇らせて、誘いを断った。
俺は「わかった」と返事をして、黙って蕎麦を食べ始める凜一の様子を伺った。

まだ無理なのか…

まだ「Satyri」に足を向けるほどには、凜一の心の整理はついていない…

月村の呪縛が凜一をあ的事件から解放していないと知れば、死んだ月村も本望だろう。

死んだ奴に対して腹を立てても仕方ないが、全くよくも俺の凜一を…と、思わない日はない。

どういう形にせよ、自分の所為で（と凜一は思っている）自殺した月村を凜一は一生背負っていく十字架だと感じているだろう。

俺はそれを一緒に担ぐ事はできない。

凜一が、いつかそれを思い出にする時を見届けるだけだ。

天気の良い小春日和の午後、凜一の受験する高校を二人で見学に行った。

聖ヨハネ学院高等学校は文字通りミッション系の高校で、立派な教会もある。

祭日の所為か、チャペルで結婚式が行われていた。

「男子校の教会で結婚式ってさあゝなんか変だと思わない？」

丁度教会から出てきた花嫁花婿の歓迎を、招待客と混じって拍手をしながら、凜一は俺の耳元で囁く。

「別に変じゃないだろう。神の御前では何人も平等である」

「…慧にそういう言葉は似合わねえし…」そう言いつつ、凜が俺の頬にキスをする。

「幸せのおこぼれでも頂こうよ」と、凜一はくっつくなく笑う。
なんだろう…

俺はここが凜一に相応しい場所だと感じた。

たぶん、凜一はここに通う事になる。

そして、素晴らしき青春の日々を過ごすことだろう。

教会の尖塔に輝く織天使ウリエルの右手に待つ炎の剣は、凜一を守り抜く為にあるのだから。

凜一の受験も終わり、難なく志望校へ合格した。

凜一には太鼓判を押した俺だったが、内心は心配だった。

受験は聖ヨハネ学院一本に絞っていた。

ペーパーテストの出来はそれほど心配していなかったが、内申書は当てに出来ないし、しかもあの事件を引き合いに出されたら、何も言えない。

面接では何も聞かれなかったと、凜一は平気な顔をしていたが、合格の知らせを聞くまではふたりともどこか張り詰めた心持ちだった。

合格して安心した凜一は珍しく静岡の伯母のうちに遊びに行くと2、3日家を空けた。

俺は凜一の留守中、合格の報告も兼ねて、鳶谷さんに会いに行くことにした。

営業中の「Satyri」に伺うのは、今回が初めてだった。

鳶谷さんと会うのも事件後一度、以前の自宅に来てもらった以来だ。本当はもっと早くにちゃんとした御礼をすべきだった。

凜一のこととはともかく、月村に関しては鳶谷さんが一任してくれたおかげで、月村の親類その他からの苦情や変な脅しなどは一切なかった。

あの人はただのマスターで終わる人ではないんじゃないだろうか。相当なしたたか者だ。

「Satyri」の二重扉を開いて店内に入る。

時間的にもかなり遅いからか、薄暗い店内に疎らなお客の影が見えた。

4箇所のフルレンジスピーカーから流れるジャズの音は生演奏ではなかったが、十分に腹底に響く音色を保っている。充実した音響設備だ。

凜一がこの環境で、月村のピアノを聴いていたのかと思うと、愉快的な気持ちにはなれそうもない。凜を連れてこなくて良かったと心から思った。

俺はカウンターの奥に立つ鳶谷さんの姿を見つけ、目の前に座った。鳶谷さんに挨拶する前に3席ほど離れた女性っぽい男性に声をかけられる。

「あら？凜くん？…じゃないわよね。でも似てるゝあ、わかった！凜くんのお兄さんじゃない？」そう言いつつ、彼（彼女）は俺の傍に寄ってきて、間近でじつくりと顔を凝視された。

「…そんなに、似てます？」

「似てるっ！凜くんが大人になったとしたらこの顔だわゝっていう理想の現実がここにある！って感じかな。あ、でもちよっと違うかも。凜くんはもう少し繊細な感じだもん。でもあなたいい男ねゝ。一度付き合わない？」

「ミコシさん。いきなりナンパはご法度でしょう。ここはそういう場所じゃないんだから」

「あら、そうだったかしらゝ結構いい男を捕まえているけどね。ここで」

俺はゲイ専門のクラブなどもあまり経験がなく、どっちかというとシロウト相手の方が好きなので、こういう方には免疫がない。

圧倒されて黙っていると、鳶谷さんは俺のテーブルにロックの水割り置いてくれた。

「慧一くん、久しぶりだね。元気だった？」

「え？ああ…元気です。すいません、連絡もなしに勝手に来てしまつて…」

「お客様はいつでも大歓迎だよ」

暗くなつたステージを眺めて、鳶谷さんを見る。

「今日は演奏は？」

「もう終わつたよ。もう間も無く閉店だからね。時間は大丈夫なんだろう？」

「ええ」

「じゃあ、店が終わつたら俺のマンションへ行こう。ここじゃ落ち着かないしね」

内緒話をするように手をかざして声を落として言う鳶谷さんに、隣のミコシさんが「ひどいゝマスターお持ち帰りするんだゝ自分だけゝ」と、ひとしきりぼやいていた。

閉店後、後片付けを待って、鳶谷さんのマンションに連れて行ってもらった。

道すがら、凜一の近況などを話したら、鳶谷さんは心から喜んでくれていた。

この人は本当に凜一を愛してくれているのだろう。

俺はふと凜一という存在を不思議に感じた。

人を惹きつけ、無条件に愛してもらえる人間がこの世にどれだけいるというのだろう。

親兄弟ならともかく、こんな大して関わりのない他人にも凜一は温かく愛されている。

そういう弟を俺は見守っていかなければならない。

親愛の情と肉欲の情のふたつを天秤につりあわせ、傾かないようにコントロールする。

それが俺の凜一への愛だろう。

リビングから夜景を見る。

「新しいマンションを買う条件として凜一は見晴らしのいい最上階がいいって言うんです。鳶谷さんの家は最高にステキだってね。確かにいい眺めだ。タワーの光が一晩中眺められるなんて」

「天気の良い日は富士山も良く見える」

「…鳶谷さんはひとりで見えるんですか？折角のいい景色を」

「え？一人で見ちゃいけないかい？」

「いや、だって鳶谷さんはどうみてもいい男でしょう。引く手数多ではないんですか？」

「そりゃ君の方だろう」

「…」

俺たちは顔を合わせて笑った。

「まあ、カテゴリーに区別されれば、俺たちは少数民族には違いな
い。それに何も生み出さないクセに偉そうにしているからまさに俗
物的生き物だね」

「ああ、わかります。幸せを絵に描いたようなファミリーを見ると
自分が惨めなのにそれを認めたくなくて、ああはなりたくねえなど
嘸くんでしょ？」

「俺なんかもう歳だし、厭世的になってもいいんだが、慧一くんは
まだ20代だろ？良き未来を展望してもいいんじゃないかい？」

「俺の未来は…凜なしでは考えられないから…」
少し困って苦笑すると、鳶谷さんは同じような顔をする。

テーブルには店の残り物と称した酒の肴が広げられた。
マグロのカルパッチョやスティルトンチーズを乗せたクラッカーに
カラスミまである。

折角だからと年代物のワインを抜いた鳶谷さんは、機嫌がいい。

「いつもひとりだからね、適当で済ますんだが、人がいるとおもて
なし精神がみなぎるっていうか…楽しいね」

「凜一じゃなくて残念でしょう」

「凜はまだ未成年だから、さすがにその点はちゃんと考慮してまし
たよ。でもあいつが大人になったら一緒に飲んでみたいね」

「次期大人になりますよ」

こういう本音をさらけ出せる相手がいてくれることを俺はありがた
く思っている。

出来るなら鳶谷さんとは一生付き合ってゆきたい友人だ。

「…凜一は幸せそうだな」

「え？」

「慧一君を見ていたらわかるよ。凜は本当に慧一君が好きなんだな。
君といるのが一番幸せだと感じている。一回ぐらい寝てみた？」

「馬鹿なこと言わないでください。…まあ、一度めちゃうくちや誘わ

れましたけど…」

「あはは、凜ならやるよな。あいつ本当に慧一君と寝たいんじゃないか」

「酔いつぶれていただけですよ。俺と寝たいって理由もひとりじゃ寂しいからってだけで、本当に愛しているとか…そういう意味でじゃないんだ」

「…そういう意味でないと、君は凜一を抱けない？」

「鳶谷さん、俺たちはいつだって抱き合って濃厚なキスだって挨拶代わりにやる兄弟なんです。それが当たり前になってしまった。凜一にとっては俺とやるセックスも兄弟のスキンシップぐらいにしか思っていない。だから問題なんだ」

「慧一君は凜一に恋人として自分を見て欲しいんだ」

「…見て欲しくない。俺のことはいいんですよ。凜がこれから先、どんな子を好きになろうが、俺はどっちにしろ嫉妬もするし、腹も立つ。そんなことはわかっています。でも大事なのはあの子が幸せな恋をすることだ。俺ではそれは与えられない。」

他人を好きになって、相手を思いやる。そんな人間になって欲しい」

「君は大変な十字架を背負っているね」

「十字架じゃない。俺は愛を背負っているだけです。それに…」

「ん？」

「入学する高校…鎌倉の聖ヨハネ学院高校なんですが、凜に合っている気がするんです」

「聖…ヨハネ…あちゃ。それクサレ縁があるよ」

「何が？」

「その高校の前の学長は父の親友だ。父とは関係ないがそいつはゲイだった」

「…凜一は別の学校に行かせた方がいいですかね…」

俺は冗句とも言えぬ声を上げた。

止め処もない会話は、眠気などもたらさない。

俺と鳶谷さんは何十年来の旧友のように、会話が途切れなかった。鳶谷さんは知識人らしく、文学や歴史、世情に詳しかった。とりわけ世界各地の遺跡を巡った話など興味が尽きない。

凜一の話になると親バカのように相好を崩す鳶谷さんに同調して、俺も従来の凜一バカを披露したりする。

ふと月村の事を聞いてみたくなり、鳶谷さんに尋ねてみた。

「月村：さんは何故凜一を抱かなかったんでしょうか？俺は、彼がノーマルだからという理由だけじゃない気がするんですが…」

「凜一は例の調子で口説いたんだろうね。でも月村は凜一を抱かなかった。俺は月村は凜一に対して性的な意識は十分あったと思うよ。だけど凜一を自分の欲で汚したくなかった…結局そこだろうね。セックスしたからと言って、それを穢れと言うこと自体間違った認識だと、俺は思うけどね」

「そういうあなただって、凜一を抱いたりしないじゃないですか」

「それはあの子がそれを望んでいないからだよ。本気で抱いて欲しいって強請られたら、喜んで頂くさ…お兄さんの目の前で言うことじゃないがね」

と、鳶谷さんは悪びれる様子もなく言う。

「凜を抱く事が穢れるとは俺を思っていない。けれどあなたと俺では立場が違う。月村さんともね。彼は死に行く場に何故凜一を伴ったんでしょう。好きなら…彼が心から凜一を思うなら、ああいう死に方を選ばなくてもいいでしょうに。残された凜一がどう傷つくのかぐらいわかるはずだ。俺は…それが許せないんだ」

「…彼はやはり愛が欲しかったんだと思うよ。実は…彼の遺骨を受け取る人間はひとりもいなかった。結局、俺の檀家の寺で預かってもらったよ。」

親類も誰も月村を省みる者はいなかった。彼は孤独の中、たったひとりで死のうとしたんだ。でも…凜一が追いかけて、自分を見つ

てくれた。どれほど嬉しかっただろうねえ。

多分、凜一があゝの別荘に行った時、月村は本当に救われたと思うんだよ。…だから凜一を最後まで抱かなかつた。だが、どうしても最後に…自分という存在を凜一の中に刻みたかつたんじゃないのかな」

「月村の遺書には…凜一に残した手紙があつたんです。それには忘れても構わないみたいなのを言っておきながら…『君の糧となリエる事を…』と言う。それが凜一にとってどういう意味になるのか知つてて書いたのなら、許せない」

「それを凜一に見せたのかい？」

「凜一宛の最後の手紙です。俺が処分するわけにはいかなかった。

それに…凜一は月村の本心を知らなきゃならない。俺は凜一を何の傷も負わない人間にはしたくない。凜一を天使にはしたくないんだ」

「…慧一君ほど凜一を慈しむ人間は、いないと断言しようか」

「所詮は血族の愛情だからかもしれせん。それに…心底惚れている者の成長や幸せを願うのは、当たり前でしょう」

「さあ、わからないよ。なにしろ究極の愛というものは憎しみや争い、終いには殺し合う…が持ち味だからね」

「縁起でもない」

冗談なのか本気なのか、鳶谷さんは片端だけで笑つと、そのままテーブルに突つ伏して寝てしまった。

俺はその寝顔を眺めながら、凜を想つた。

風邪など引いていないか、寂しさに泣いたりしていないだろうか、どうかあの子に安らかな眠りを与えたまえ。

ここまで来りや間違いなくきちがい沙汰だな、と自分を嗤いながら。

翌日、自宅に帰ると、凜一は静岡の叔母の家からすでに帰宅し、むくれた顔で俺を迎えた。

「どこへ行つてたのさ。折角、早起きして帰ってきたのに。慧は俺がいないからって、羽伸ばしすぎだよ」

「ごめん… 鳶谷さんのマンションに招待されて… 酔いつぶれていた」

「え？ 鳶谷さん宅に行つたの？ 鳶谷さん、元気だった？」

「うん、凜のことを沢山話したよ。とても嬉しそうだった。おまえにすぐ会いたがつていた」

「ああ、俺も会いたいな」 鳶谷さんは本当の親父みただからなあ
「」

「バカ、先輩ぐらいにしておけよ。親父の立場がない」

「嬉しいよ」

「何が？」

「慧が鳶谷さんと仲良くしてくれると、俺、味方が増えた気になるもん」

「… 凜は… 今から沢山の仲間に出会ふさ。おまえが強く生きれるように、出来るだけ友人を作る事だね。俺が行っても寂しくないようにね」

「… そうだな。半年したら慧は大学へ戻っちゃうしね…」

「二年なんてすぐ経っちゃうから、そしたら俺は凜の傍を離れない」

「うん、絶対だ」

センチメンタルになる凜一を胸に抱きながら、いつまでこうして愛弟を独り占めできるのだろう… と、相当に胸が痛くなった。

凜一の高校生活が始まった。

俺の留守中に、喧嘩をして怪我をした凜一が入学式も出られず、早

々に一週間ほど休学するというハプニングはあったものの、その後は順風満帆といえた。

凜一の様子を見れば判る。明らかに中学時代とは違う自由を謳歌する気概に溢れている。

あの学校の闊達な気風がそうさせるのか、凜一には居心地がいいらしい。

「好きな奴はできたか？」と、聞くと、いかにも歳相応に「まあね」と、微かに照れ隠しをしながら誤魔化す風もかわいらしい。

凜一がこうも落ち着くと、俺も自分の肉欲的な思いを煩わせなくて、平穏でいられる。

6月のうつとおしい梅雨の午後だった。

自宅の電話を取る。

電話の一声を聞いた俺は、相手が誰だかすぐわかった。

大学時代の恋人だった藤宮紫乃だ。

驚いた事に、紫乃は凜一の高校の副担任をやっていると言う。

何の縁^{えにし}なのか、俺は正直困惑した。

凜一の事で話があると言う。

俺が断れないカードを出してきやがった。

渋々承知すると、受話器の向こうから苦笑する声が聞こえた。

紫乃の事を思うと俺はやりきれない想いで一杯になる。

あれだけ尽くしてくれた相手を、俺は勝手に電話一本で三行半を突きつけ、さっさと逃亡したようなもんだからな。

俺への恨みも深いだろう。

凜一の副担任だったら尚更だ。

凜一の様子じゃ、俺たちの事は曝してはいないようだが、いつかはバレるに決まっている。

普通なら弟の凜一に害を加えることも加味しなきゃならないところだが、何故だかそうは感じない。

紫乃の性格を考えれば、あいつが俺への恨みを凜一に晴らすとは思えないんだ。

紫乃は悪ぶってはいるが、心底心根は優しい。

俺は九月までしか、凜一の傍にいられない。

うまくいけば、紫乃が凜一を守る立場を引き受けてくれるかも知れない。

…そこまで考えて俺は溜息をついた。

勝手な言い草だ。こっちの都合で紫乃の感情も考えないで重荷を引き受けてくれとは、さすがに酷すぎるだろう。

だれもが凜一を俺のように思っているわけでもないんだから…

家庭訪問と称して紫乃が自宅に来た。

俺は縊^よりを戻すのが怖くて、玄関の外で紫乃と話した。

どうせ最上階には俺たちの一宅しかないポーチだ。誰にも聞かれることもない。

三年ぶりにみる紫乃は、髪を伸ばし、眼鏡をかけていた。聞くと先生らしく見える為の伊達眼鏡だと笑う。どう見たって色眼鏡にしか見えないと、俺は首を捻った。

眼鏡の奥の控えめな優しさは変わらず、紫乃が紫乃であり続けている事に、俺は胸のつかえが消えた気がした。

紫乃の奴といえは、俺の頭からつま先までをしげしげと眺め、あげく口唇を尖らした。

「そんなに…俺、変わったか？」

そう言いながら俺は黙り込む紫乃に少し面食らって一歩引き下がった。

「いや…変わらんよ。相変わらず魅力的だね、慧一は」

少し躊躇いがちに言う紫乃が、なんだかわいらしく見え、思わず手を出そうかと思ったほどだった。

紫乃は家の中に入りたがったが、俺ははっきりと断った。それに気分を悪くしたのか、くるりと背を向けると、さっさと帰ってしまった。

凜一の事は何も話さずだ。

… 一体あいつは何をしに来たのだろう…

紫乃の怒った顔を思い出すと、俺は笑いが込み上げて仕方なかった。あいつも相当俺にイカれているらしい。

その後、紫乃とは何度か街中で会った。誘われれば食事もしたりもした。

凜一の事を切り出し、俺のいない間、目を配って欲しいと頼むと、昔通りに付き合えと迫られ、凜一の為だと承知した。とはいえ、元の鞘に納まる気は、どっちにもないことはわかつている。

紫乃は凜一に対する俺の気持ちを糾弾したがっていることは目に見えていた。

「凜一とはもう寝たかい？」どこかで聞いたことある質問だと、ウンザリとなる。

「寝ないよ」

「まだ凜一と寝ることが怖いのか？汚す事になるって思ってたの？」

「…紫乃、拘っているのはおまえの方だろう。俺は凜一とは寝ない。それだけだよ」

「ふ〜ん」

あからさまに疑う眼差しで俺を見つめると、目の前のコーヒーを啜った。

俺の凜一に対する気持ちを知っているのは、鳶谷さんと紫乃だけだ。用心の為に口止めしておいた方がいいのか、正直迷った。だがそれを紫乃に言ってもまた条件を出されるだけだ。

紫乃と今更、縊よりを戻したところで何になる。俺はとにかく紫乃にとって、俺はあまりにも見返りが無さ過ぎる男だ。

紫乃はバカじゃない。付き合いを承知した俺と本気でどうかなるとは思っていないだろう。

俺は紫乃には幸せになってもらいたかった。

だから本当なら、こんな風に会ったり、凜一のことを頼んだりするべきじゃないんだ。

「紫乃、おまえの方こそ、誰かいないのか?」「慧一が俺の心配してくれるなんて…随分変わったね」「おちよくるなよ。俺は本気で心配しているんだ」「本気で心配する奴が、元恋人に弟の世話を頼むかよ」「だからそれは…」

こうなると俺の負けだ。頭を下げるしかない。

「俺は俺で好きにやっているから慧一が気に病むことじゃないさ」
「…」

紫乃はいつだって結局最後には俺を甘やかしてしまうんだ。

夏休みも終わり、九月。俺が大学院に戻る日が近づいてくる。

凜一もどこことなく寂しげな様子で、それを見る度心が痛くなる。

何度もお互いの気持ちを話し合って決めた進路ではあるが、別れが近づくと折角の決意も挫かれそうになる。

「寂しくなるなあ」と、独り言のように言う凜一にたまらなく「一緒に来るか?」と、言うとう首を横に振る。

俺もおまえ以上に寂しいんだよ、凜…

戻る二日前、俺は紫乃を呼びつけて、凜一の事をしかと頼み込んだ。本当は鳶谷さんにもお願いしたいところだが、凜一が鳶谷さんを見て、また月村を思い出させても酷な気がした。

何度が来たことのある洋食屋で、紫乃を誘い昼飯を食っていた。

俺は相も変わらず、凜一の事を頼むと言うと、紫乃は不平不満な顔で俺を睨む。

「…いい加減、子ども扱いするのはやめにしたらどうだ。事件の事は俺もいささか情を汲むところではあるけど、おまえはあの子にうつつを抜かしすぎだ」

「…何とでも言う方がいいさ。もうこればかりは自分でもどうしようもないんだよ」

「呆れた男だよ。そういう奴に惹かれている俺も同じようなバカの端くれかもしれんが…」

「紫乃が俺に対して色々思うところがあるのはわかるし、憎く思ってくれてもいい。だが、頼むから凜一には、辛く当たらないでくれよ」

「…正直に言えばだ。俺は凜一をかわいいと思うよ。こましゃくれていてもな。おまえの弟じゃなけりや、とっくに食ってら」

「…」

俺は無言で紫乃の顔をジロリと睨んだ。

「今の学生はな、こつちが誘わなくても向こうからお願ひします、って頭下げてくる奴もいるんだぜ。凜一はどうやら簡単には乗っからせてはくれなさそうだがな」

「おい、それぐらいにしとけよ。ぶん殴るぞ」

「別に…おまえが俺を殴れるかい。それより凜一が狙ってる子を知ってるか？」

「ああ、頭のいい子だって聞いた」

「学年でトップの子だよ。容姿の整ったかわいい子だがね、あれは全くのノンケだ。それも相当に身持ちの固い純粹培養型。そういう奴を本気で落としたがるのが宿禰凜一だよ。兄貴よりよっぽど手強い」

「…悪かったな」

「俺はね、その子が哀れでならない。まるで狼に狙われたウサギだ。凜一が全力で襲いかかりやあ、あの子だって無傷じゃいられまいよ。おまえが必死に守ってやろうとしている弟、宿禰凜一ってのはそういう性質の子だ。要するに俺が手を差し出したって、引っ叩かれるのがオチって事だ」

「…」

紫乃の言うことはわかる気がする。

俺が対凜一とその他への態度が違うという事と似たり寄ったりだろう。

それより、凜一はこの間、その子に振られたと言ってたが…
その後はどうなったんだろう…

「おい、慧一。おまえ人の話聞いている？」

「…聞いている」

と、顔を上げ、前を見ると…何故か、凜一が笑いながらこちらに歩いてくる。

一瞬、白昼夢なのかと目を疑った。

「慧も来てたの？丁度良かった。俺、奢ってもら…」言葉を切らした原因は俺ではなく、向かいの席に座る奴の存在を知ったからだ。やぶ蛇もここまでくると笑うしかなかるうぜ。

最悪だ…きつと今の俺は紫乃に言わせればピエロにしか見えてなからう。

薄笑いを浮かべて凜一に笑いかけている紫乃に無性に腹が立ってきた。

「こんなところで家庭訪問かよ」

凜一は言葉に怒りを交えている。

「…三者面談でもって思ってたね」

揶揄うように言う紫乃も紫乃だ。

躍起になって紫乃に挑みかかろうとする凜一を押さえ、俺は隣に座らせた。凜一は運ばれたランチにも手を出さずに紫乃の方を睨みつけている。

この様子じゃあ、凜一と紫乃は学校内で何かと揉めているのかも知れない。

出来るだけ穏便に済ませようと、声を落として凜一に説明する。

「俺が向こうに帰ったらおまえが一人になるだろう？だから…藤宮先生に頼んでいたんだよ」

「…」

凜一は何も言わない。俺は言葉を続ける。

「担任は当てにならないって凜一が言ってたから…誰かおまえを守ってくれる人がいる方がいいと思ったんだよ…だから、凜…あんまり先生に迷惑かけるんじゃないよ…」

自分で言いつつ、あほらしさにシラけてくるが、とにかく取り繕わなければならぬと必死になる。

どっちにしろ…かなり拙い状態だとはわかりきっていた。

俺が紫乃と知り合いで、凜一の副担任であるとわかっていて、しか

もそのことを黙っていたのは、俺の方に非がある。

凜一はふと立ち上がると、向かいに座る紫乃の眼鏡を取り外し、何かを思い出すように言葉を綴った。

「…そうだ、あんたの顔、思い出した…姉貴の…梓の葬式の時来てたよな。それと…前の俺ン宅の前をウロウロしていたのもあんただ…梓の男？…違う…おまえ…」

「俺の大学の時の友人だよ」

これ以上隠すのは無理だと思い、俺は仕方なしに応えた。

「…友人…じゃないだろう、慧…はつきり言えよ」

勘のいい凜一は紫乃との関係に気づき始めている。

「流石は慧一の弟だけあるじゃないか。察しがいいな。そうだよ、俺と慧は付き合っていた。恋人…だった」

また、余計なことを言いやがると、舌を打った。

「…今は只の友人だよ」

慌てて言い訳をしても滑稽でしかない。もう俺は、さっさとこの場から立ち去りたい気分で一杯だ。

「昔…ずっと前に言ってた別れた彼って…こいつの事だったのか？

…慧」

…そんな事を俺はおまえに喋ったのか？…いつの話だ？全く覚えてない…と、言うか俺はおまえの事以外はあまりにも手落ちが多いんだよ。

「そうだよ。でもその話は今度の相談とは関係ない。おまえの事を誰かに頼みなかったのは本当だ。紫乃が…藤宮がおまえの副担任って知って…おまえに黙っていたのは悪いと思ったけど、変に詮索されるのも嫌だったんだ。それで…」

「それで、こっやって学校以外で仲良く一緒に昼飯食ってるってわけ」

「…仲良くじゃないよ」

「そんなに突っ張って言うことじゃないだろう。…宿禰君は学校で

もいい子にしているって言ってやってんだぜ？」

だから凜一を挑発するな、紫乃。こいつは顔に似合わず凶暴なところがあるんだから。

俺は内心凜が手を出さないかと、冷や汗もんだった。

「いつから…いつから知ってたんだよ」

凜一は今度は俺を責める。

こうなったら正直に言うしかない。どう取り繕ったって紫乃のことは事実だし、凜一と仲たがいをするのはもう御免だからな。

「6月ごろだ…言おうとは思ってたんだけど…おまえが元氣そうに高校に行ってるから、余計な事を言うのは止めておいたんだ。ゴメン」
「そうか…家では慧一が学校ではこの先生が俺を心配して、変な事をしないか監視してたってわけ…」

「凜、そうじゃない」

「もういい。…俺のことで色々心配かけて悪かったな。俺はもう独りでもいいから、ほっておいてくれていいよ。あんたらに…かまうて欲しくない」

「凜」

「悪いけど、俺先に帰るよ。慧、ここのランチは兄貴が奢ってよ…じゃあな」

俺は店を出て行く凜一の背中を見送り、その姿が消えると俺は深くため息をついた。

「追わなくていいのか？」

「無駄だよ…ああなったら凜は気が済むまでは俺を許さないからな…多分、大丈夫だろう…あいつはああは言っても、かなりの寂しがり屋なんだよ。昔から誰からも見られなくて、納戸に隠れてひとりでこっそり泣く子だった…」

自宅に帰って、許しを請うしか手立てはないなあと思いつつも、俺自身がどんどん落ち込むのを見かねたのだろうか。紫乃は哀れんだ

顔で俺に言う。

「そんな顔するなよ、慧一…わかったよ。おまえがいない間は俺が寂しがらないように、凜一をかわいがってやるから、安心してアメリカへ行っちゃえよ」

「…安心できない言い方をするな」

そう言いながら、俺は紫乃を心から信用している自分にも驚いている。

自宅に帰っても、凜一の姿はなかった。

あの後すぐに紫乃と別れ、帰宅した。もう二度と凜一と仲たがいを
するのは絶対に嫌だった。

凜一の部屋に行き、ベッドに腰掛けて弟を待つ。

どう説明すべきなのはわかってるつもりだが、なんだかそれも
億劫になってしまう。

本当のところはどうだっていいんだ。

凜が俺を見捨てなけりゃ、俺のものでいてくれりゃ…それだけで…

この独占的な支配欲は凜一にとって、 unnecessary だとわかっている。
俺は凜一を失うのが怖いだけなんだ。

凜が他の奴に懸想をしていると思うと、兄としての部分は喜び、愛
欲を持っている片方は嫉妬をしている。

そういうことだ。プラマイゼロになりゃいいんだが…上手いかな
いのも現状で、この有様…

結局、俺という人間の性とはこういうものでしかないのか…

部屋の窓から西日が差し込んでくる。ああ、もう夕刻になったのか
…そう思い始めた頃、部屋のドアが開き、凜一の姿がおぼろげに見
えた。

「慧…」

凜は驚いた様子で俺に近づいてくる。

「…お帰り、凜」

「どうしたのさ。こんなところで、昼寝でもしてたのか？」

「寝れないよ。おまえをあんな気持ちにさせたままにして…すまな
かったよ」

「もういいよ、気にしてないし…」

俺の隣に座り込み、肩に凭れる凜一が無性にいとおしくなり、その頭を引き寄せた。

愛している…愛している、凜一、おまえの存在だけが俺を生かしているんだ…

俺を許すと言う凜一の言葉を聞きながら、俺はまだ天秤が釣り合ったままでいられると感じていた。

キスが欲しいという凜一の誘惑にも、抑制が効く自分がいる。

大丈夫、まだ理性は保てるさ。

おまえを守るために、俺は存在するのだから。

俺の膝に乗り、幼い頃のままに俺を抱きしめるこの存在を、この距離を、俺は失いたくない。

凜、おまえは俺を守る城になると言ってくれたことがあるね。覚えているかい？

俺はね、おまえと言う城の中に身を潜めているだけの脆弱な生き物なんだよ。

おまえの城を出た時、俺は、きつと…

「暫く離れ離れになってしまうけど、いつもおまえのことを思っているからな。何かあったらすぐ連絡しろよ。一目散に凜の元に帰ってくるから」

「慧一こそ、他の男と遊び惚けて俺を忘れるなよ。俺を捨てたら承知しない」

おまえを忘れるなんてこと…一生できまいよ、凜…

なあ、凜…

俺のすべてはおまえの為にある。

遠くなく、おまえは大人になり、しっかりと自分の道を歩いていくのだろう。

そして、その傍らにいるのは俺じゃない誰かだ。

俺はひとり残される。

だから、その前に、その日が来たら、どうか俺を裁いてくれ。

兄貴なんかいらないと捨ててくれ。

そしたら、俺は…消え去ろう。

すべてをおまえに残して、跡形も無く…

どの男よりも、強く、おまえの中に残る存在になるために…

第一部、完。

27（後書き）

第一部「イリユミナシオン」は終わりです。

第二部は「オレミユス」の予定。

暫くお待ちください。

「オレミユス」 1（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

「オレミユス」 1

宿禰慧一編 「オレミユス」

> i 3 1 6 4 — 2 7 3 <

1 .

わが飢餓よ 心の飢餓よ

天の哀れを 請うがいい

さらば 祈らん

与えよ、と…

天候の所為で飛行機が遅れた。

携帯でメールは送ったが、あいつは気がつかないことが多い。

空港で待っていると言っていたから、遅れたらきつと心配するだろう。

十二時間の飛行時間が、たまらなく長い。

本を読んでも映画を見ても、凜一の顔がちらついて仕方がない。

九月に別れてまだ三ヶ月も経っていないというのに…と、自分で呆れ返った。

本を閉じライトを消して、目を閉じた。

何故だか近頃は、あの子の幼い頃の夢ばかり見る。

母や梓の所為なのかな…

あの子をひとりにしてしまったことを責めて、俺を恨んでいるのかな。

もしかしたら、俺が凜を愛さずにはいられなくなってしまったのは、あんたらの所為かも知れない。

呪い？

…呪いでもなんでもいいさ。

俺は凜一に縛られている。

赤く温い血の鎖は誰も切れない。だが、あいつが俺を必要としなくなったら…

その時は、その鎖を俺自身が断ち切ってやる。

その覚悟は出来ている。

だから今は…

あいつが手を離すまでは、騎士でも下僕でも何にでもなってる。

人気がない静かなターミナルで凜一は待っていた。

俺を見た途端に鮮やかな笑顔を見せ、走り寄る。

一年半前のよそよしさなど微塵もない。

真っ向に見つめてくる瞳は眩しい程に輝きを放っている。

だが少しだけ潤んでいるのを認め、問うと、昔の事を思い出していたと言う。

俺と同じだと密かに笑い、俺たちは抱擁した。

凜一の身体は思ったよりも冷たく、ひとりで待たせた時間を俺は恨めしく思った。

成り行きで高級ホテルのスイートに一泊する羽目になった。

全く持って、思いも寄らぬ話だ。

部屋も眺めも最高だが、クリスマスにこのシチュは…俺には酷な気がしてきた。

しかもベッドはゴージャスだろうがいかにかかるうが、ひとつしかない。

これに凜とふたりで寝るのか？

…俺は頭を抱えなくなる。

俺の憂鬱を全く気に病むはずもなく、凜一はガキのようにはしゃぎ回っている。

風呂に入れば、部屋が見渡せるガラス張りの窓に裸のまま這いつくばって動かない。

真正面の俺はマトモに凜の裸と真向かうことになる。

別に凜は俺を見つめているわけじゃない。俺の後ろの窓の向こうに見える夜景に見惚れているだけなのだ。

それなのに…俺は凜一の身体を眺めて欲情している。

俺の唯一の逃げ道は目を瞑るだけだ。

風呂を交代して上がった後も、凜一は俺に一切やすらぎなど与えてくれない。

俺の思惑など見事に無視してセックスしようと抱きついて離れない。

これは凜の悪巧みのひとつなのか？俺は疑念を抱きたくなる。

それなのに…

寝ついてしまえば、先程の小悪魔な姿態は微塵もなく、ただ無心に眠りに貪りついている。

俺は大きくひとつ溜息を吐いた。

どうしてこうも自分は情けないのだろう。

いつその事、凜一を抱き、俺のものにしてしまえば、こんなに苦しむ必要はないはずだ。

凜一だって俺とセックスしたところで、それを否定するとは思えない。

だが、こいつはセックス自体を「愛する」という行為とは認識していない。

もし俺が凜一と寝てしまったとして、凜は自分を抱いた俺を今まで寝てきた男と同列に並べてしまう気がする。

そんな事は我慢がならないし、凜にとって特別の男でいなければ俺の存在する価値など無いに等しい。

それに、

もうすでに凜一には恋人が居る。「愛してる」と、断言するクセ

にセックスはしていないと言う。

凜一が本気でそいつと恋愛してるなら、見守ってやるのが兄としてのが努めなのだろう。

そして凜一はそれを望んでいる。

パジャマに着替えた俺は、凜一の眠るベッドの隣に静かに横になり、凜一の様子を伺った。

凜は昔から寝つきがいい。幼い頃は良く夜泣きをして俺たちを困らせたが、育つにつれて、「おやすみなさい」と、言うが早く、すぐに俺の胸でスヤスヤと寝入ったものだった。

安らかな寝息を立てる凜一の頭を撫でてみた。ビクともしない。肩肘を立て、深く眠る凜の頬を撫でながら、俺は呟く。

「なあ、凜。恋人を愛してると言っておいて、その舌の根も乾かぬ先に俺とセックスしたいって言うのかい？俺の本当の心を知ったらおまえは俺に、同じ事を言えるのだろうか…」

頬を撫でた手の平を凜の首筋に移動させる。

前空きのパジャマのボタンもキッチンと留めないままにいるから、鎖骨から胸、乳首まではだけてしまっている。

俺は指先だけでゆっくりと凜の身体を撫でた。

首筋、喉仏、鎖骨、少し浮き出ている肋骨、ピンク色の突起、規則正しく響く心臓…

俺は凜一の耳元に秘密の囁きを繰り返す。

「凜…誰も好きになるな。誰のものにもなるな。自由に身を任せ、他人の縁など切り捨てろ。おまえは俺に繋がっていればいい。おまえは俺が守る。だから…俺のものでいろ…」

呪文は呪いであり、魔法であり、願いになる。
言い換えればまさに、希望だ。

俺はなんという場所に来ている。

肉体的見地と精神世界の狭間とはこんなに虚ろなものなのか。

白く浮かぶ凜の身体を、誰にも、神にも（もし、存在するならば、だ）晒せたくない。

俺は凜一を抱きしめた。

凜は眠ったまま、甘えるように頭を擡げた。

昔のままに…

「オレミユス」 1（後書き）

筆者のBLブログ「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowsetter.nal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

2 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

正月は父と新しい継母と4人で、温泉で過ごすことになった。

宿禰家で家族旅行なんて滅多にないことだ。

実を言うと、凜一が生まれる以前には毎年のように各地の避暑地へ遊びに出かけていたのだが、凜一が生まれると、元々身体の弱い母の容態は更に悪くなり、それっきり家族旅行はしなくなった。

凜一には家族水入らずでのバカンス経験はこれが初めてかもしれない。

俺は親父が再婚しようがするまいが、まるで他人事のように思っているが、果たして凜一はこの成り行きをどう感じているのだろうか。俺はそればかりが気になっていた。

だが、それは俺の杞憂だった。

凜一は新しい継母の「和佳子さん」を事その他気に入っただけで、始めは少し照れて遠巻きにしながらも、時間が経つに連れ親密になっていった。

実母が亡くなったのは俺が14の頃だ。

俺には母への慕情が多いに蓄積されている。だが凜一は母親を知らない。よく覚えていないと言う。

母が凜一に深い愛情を注いでいたのを知っている俺は、凜一の母親への薄情さには些か不満がある。

凜一が5歳になるまでは、母は凜一ひとりにかかりっきりになっていたといつて良いくらいなのに。

母の愛情など何ひとつ知らぬままに、新しい継母に嬉しそうに接近する凜一に、俺は驚きを隠せずにいた。

古い格式あるホテルだった。

調度品も時代を感じさせるレトロな趣きのあるものばかりだ。

ベッドの横になった凜一は、高い天井の格子を珍しそうに数えていた。

夜、二人きりの部屋の中で、実母の事を聞くと、

「仕方ないよ、いくら死んだ母親が俺を可愛がってたって兄貴がゆつてもさあ、俺、覚えていないし、…それに和佳子さんはいい人じゃないか。俺、好きだよ、新しいお母さん。慧は嫌いなのか？」

「嫌いだとか…そういう感情は俺にはないよ。親父の奥さんとか認識してない。母親に甘える歳でもないしね」

「そりゃそうだ」

「でも凜はまだお子様だから、母親のおっぱいが恋しいのかもな」

「そう、なのかなあ…和佳子さんが本当のおかあさんだったらいいなあとは思っけどさあ。実際は一緒に暮らすわけでもないから、あんまり関係ないのかも」

「…」

否定をしない凜一を見て、俺は少しショックだった。

凜一にはまだ母親のぬくもりが必要だということなのか。

別に俺が母親代わりになりたいとは思っていないが、なんだか継母に気を取られている凜一が気に入らない。

心が狭いのは十分承知しているが、なんとも言い難い気持ちで仕方がない。

「どっちみちすぐに大人になるんだし、本当のおかあさんなんて、俺も必要ないのかも」

暫くの沈黙の後の凜の言葉がまた胸を痛くした。

俺は心の奥底では、凜一に誰も近づくなと叫んでいる。

誰も凜一を見るなと…

そんなことが出来るはずも無い。

いくら凜一を隠そうとしても、凜の魂は暗闇に行くほどに輝きを

増す。

その姿を他の奴らが見逃すわけがない。

凜は俺の手の届かないところに行ってしまうのだろうか。

俺はただその背中を追うだけしかできないのだろうか…

「ねえ、慧。そのうちさ、慧に会いに行ってもいい？」

ベッドに寝たままの凜は、クッションの深いソファに座った俺の方を向いて尋ねた。

「え？シカゴに？」

「俺、慧のくれた絵葉書の教会を直に見てみたいの」

「そんなに教会に興味があるのか？」

「うん、あのフォルムにね。どうやって構築されているのか、なんであの形が宗教的に象徴となりえるのか…とかさ、そういうのに興味がある。どちみち兄貴は梓の聖堂を作るつもりなんでしょ？一応俺もアドバイスなんかしたいじゃない。だから色々とおきたいんだ。いいかな？」

「ああ、勿論…そうだな。春休みになったらおいで。俺は院の研究室で仕事をしているから、ずっとついててやれないが、大人しくしているとか約束するなら、色んなところに連れて行ってあげるよ」

「なんだよ、大人しくって…自分がちよつと大人だからってガキ扱いしやがってさあ」

「独り寝が寂しいって言う奴はガキだろ？」

「だって…人肌って気持ちいいじゃん。寒い時なんかなんでもいいからぬくぬくしたいって気持ちになるよ。マジでネコか犬でも飼おうかな。抱いて寝るの」

「やめとけよ。抱き枕の代わりにさせられちゃ、ペットが可哀相だ」

「じゃあ、やっぱり慧が抱いてくれよ。一緒に居るときぐらいはさあ」

俺を向かいいれるように微笑んで手を広げて待つ凜一の誘いを、
どうして断る事ができようか。

俺はソファから立ち上がり、凜一の眠るベッドに向かった。
半身を起こして腕を伸ばす凜を抱えるように、俺も抱きしめた。
凜のぬくもりが愛しい。俺は満ち足りた気分で一杯だ。

その上、凜はキスまで求めてくる。

俺はそれを返しながら、反応する身体を何とか持ちこたえさせようと必死になる。

精神愛と肉欲っていう同義的にも背反二律にもなりえる感情を巧く操縦する方法を、俺は昔から覚えてはいたが、近頃はそれも段々と覚束なくなっているようで怖い。

「…やっぱり、慧とするキスは他の奴とは違うなあ」

「比べるなよ。他人とするキスと同じに感じて困るだろう。それに…普通の兄弟はやらないもんだ」

「だって仕方がない。俺は寂しがりで、そして慧は俺にぞっこんだからな」

「…自分で言うな」

俺は最もだと苦笑した。

ぞっこんどころか…俺の魂はおまえと言う鎖で縛り付けられてるよ、凜。

旅行から帰ると俺はすぐにシカゴへ戻った。

帰る間際、残った継母としばらく過ごす事になった凜一はどこか浮かれている様子で、俺は嫉妬の矛先が「和佳子さん」に向かないように何度も視線を背けてしまった。

2（後書き）

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowseternal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

3 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

3、

大学院では、都市空間建築家で知られるリウス・ブライアン教授の研究室で指導を受けながら、教授の助手として学生達のレポート採点や指導の手伝いをしている。

「空間構成を考えた建築デザイン及び、構造技術の性能に関する研究」というテーマで取り組んでいる。まあ、簡単に言えば、想像した建築デザインが環境に適応するように構築できる構造物として快適に生活できる空間を作り上げられるかという話なんだが、環境デザインと建築というものをひと括りで考える建築士を目指している。

今年は卒院する予定だし、条件のいい企業に就職できればいいと思うが、正直日本で探すとなると難しい気がしてならない。

同じ研究生であるジャン・エクツールは親の建築事務所を継ぐ予定だが、それはそれで色々としがらみがあつて憂鬱で仕方がないと、愚痴をこぼす。

「ケイイチは自由でいいよ。将来は自分で事務所を持つ事も考えているんだろ？」

小春日和、大学のすぐ脇にある公園を散策しながら、俺はジャンとよく論議しあう事が多い。

「…そう簡単にはいかないよ。資金も後ろ盾もない若造に何ができる？どつかの大企業のいち設計士として埋もれている方が楽に暮らせるのかも知れない」

「コンペで名を売ればパトロンも付いてくるさ。ケイイチの才能は教授も認めているんじゃないか。教授に相談すればいい方向へ導いてくれるんじゃないか？」

「そう簡単にいくかね」

俺たちはサウスストリート沿いのカフェで昼食を取る。

いつものウェイターが注文を聞きに来た。

俺はスコーンとコーヒ―。ジャンはハンバーガーとフライドチキンとコーラだ。

このボストン生まれのフランス系アメリカ人はどうしてもハンバーカーとチキンはセットにしないと気が済まないらしい。よく飽きないかと呆れるどころか、関心する。

大雑把なアメリカの食事には閉口するが、ジャムは選べば美味しいものが多い。

土産に買っていくと、凜一も喜んで食っている。

ああ、このカシスのジャムもいけるな」と、食べていると、ジャンが面白そうに口を開く。

「あのウェイター、おまえに必死にアプローチし掛けていたけど、どういう仲だよ」

「…さあ」

「嘘つけ。あの子と何度か公園を歩いていたら？」

「おまえは探偵か？」

こんな広い街で、よつぽどヒマだなと呆れてしまった。

「おまえは目立つんだよ。自分ではわからないだろうけど」

「東洋人が珍しいもんでもあるまいに」

「おまえを紹介してくれていう男も女もいるんだ。ステディがいるそうだって断っているけれど」

「ありがとう。助かるよ」

「で、本当に決まったヒトはいるのかい？ケイイチには」

「…いるよ。たったひとり、ね」

誰にも言えない最愛の運命の奴がさ…

あの金髪、碧眼のウェイターはクリスと言った。確か年の頃は1

何度かあの店に足を運び、話をするようになり、誘われたっけ。遊びで4、5回ほど寝ただけなんだが、向こうはどうもこちらに執着がありそうで、何度も誘いかけてくる。

感情をストリートに表す外国人には珍しく、控えめで多くを求めてはいない子ではあるけれど、恋愛と言う感情には程遠い。

大体：している最中にだって、俺は相手を凜一と置き換えている場合が圧倒的に多いんだ。そういう奴がマトモな恋愛を望んでは相手に悪かろう。もとより俺には全くその気はない。

交際を求められたら、セックスだけでいいなら、と、断わりは入れた筈だ。後になって未練があるうがなかるうが俺の知ったことではない。

冬のシカゴは寒い。ヒーターに暖まった部屋にいる間はなんとも感じないが、一步外へ出ると、ミシガン湖からの風が水滴の塊の粒を上空から舞い上がらせ、灰色の雲の中に溶け込んでいく。独りで過ごす日々は平穏だが何もない。この曇天の空と同じ。

三月になったばかりの或る日、教授から娘さんの結婚式の招待を頂き、教授の本宅である郊外の家招かれた。

断る理由もなく、週末の休日を教授宅にお世話になった。

教授の家庭は奥さんと兄、弟と妹の5人家族。まるで肖像画のよくな完璧な家族図であり、飼われている犬さえも幸せそうに見えた。こんな家庭に育ったならば、俺も歪んだ気持ちなど生まれはしなかっただろう。

自分の身の上が切なくなつて仕方がない。

親父は：こんな家庭を夢見ていたんじゃないだろうか。

妻と娘と亡くし、長男である俺はゲイだ。しかも自分の弟にうつを抜かしているどうにもならん息子だ。

俺がゲイである限り、宿禰家に子供はできない。凜一もまたそうであるなら……。

父は俺たちなど切り捨てて、新しい奥さんと子供を持つ方がよっぽどマシなんじゃないだろうか。

俺は父の不幸を哀れんだ。

あの人が望んだ家庭を築けないどころが、失望させてしまう自分自身が情けない。

こうまで凜一に囚われている自分が恨めしい…

教授の娘さんの結婚式を祝福した夜、俺は父宛に短い手紙を書いた。

お父さん、いつも十分な仕送りを感謝しています。

思えば僕は息子として、あなたに喜びや希望など、なにひとつ残す事ができなかった気がします。

ここまで育ててくれた恩に対して、あなたを労わり、そして暖かい家庭を示すことこそが、死んだ母さんや梓への報いとなったはずでした。

ごめんなさい、お父さん。

俺はもう戻る事はできないよ。

自分で決めた道を歩いていきます。

宿禰家を継げなくてごめんなさい。

どうぞ、お母さんと幸せな人生を送ってください。

僕に言えることはそれだけです。

慧一

3 (後書き)

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowseternal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

4 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

4、

普段はあまり出歩いたりしないのだが、凧一が来るというので、暇を見つけては滅多に行かない街まで下見に行くようになった。

いわゆる観光客（それもアジア人が圧倒的に多い）が行く名所はあえて避けて、あまり知られていない凧一が好みそうな珍しい建築のある地域を探し出す。

凧一の為だけではなく、俺の勉強にもなる。

自家用車で北の方に2時間掛けて走った麓の街で、聳え立つ教会が見えた。

車から降りてそれを目当てに歩いていたら、小さな路地に入った。それはまるで迷路のように繋がり、古びた石畳が乾いた砂埃を上げた。

ふと両脇を見ると、小さな店が軒を連ねている。

各窓枠には色とりどりの花が飾られ、店のドアには小さな看板が掛けられてある。

パン屋や果物屋、仕立物やお菓子屋まで様々だ。

興味本位で一軒一軒覗いていく度に、ここまで来る観光客が珍しいのか、地元の方が興味深く眺め、声を掛けてくる。

小間物屋で日本人？と聞かれ、そうだと応ええると、この先に日本人がやっている店があるよと教えてくれた。

そう期待することもなく、言われた店に足を向けてみる。程なく教えてもらった古美術商を見つけた。

シヨウウィンドーを眺めると、舶来の年代物の時計や磁器、色鮮やかな切子細工、蒔絵の漆器まで飾ってある。その飾り方も無造作に置いた様で、かしこまった気がしない。

ふと、木製の宝石箱の中に置かれた寄り添うようなふたつのペンダントを見つけた。

丁度、西に傾いた太陽に反射して、ペンダントに嵌め込まれた琥珀や翡翠色の宝石が輝きだした。

じつと見ていると引き込まれるような感覚に襲われる。

俺は昔、妹の梓と会話した記憶を呼び起こしていた。

あれは梓の１７の誕生日だった。

俺は梓が欲しがっていたオルゴールをあげたんだ。

「凜が１７になったら、アクセサリを送るわ。そうね、ブレスレットかペンダントがいいわ」「え？どうして？」「私が欲しいからよ」「俺のあげたプレゼントに不服かい？それ、見つけるの結構苦労したんだぜ」「そうじゃないの。私が欲しいものを凜にあげたいの。できるなら私がデザインしたものがいいわね。いつだって私に繋ぎとめられている気がするじゃない」「それは…ちょっと怖い気がする」「慧だって同じじゃないの。隠したって私にはわかるもの」「…」「凜はいつか知ることになるわ。私や兄さんの本当の愛の意味に…それは美しいものばかりとは限らない。それでも…純粋にね…きつと、形を作っているものだと思いたい」

梓は凜一を愛していた。

生きていたら梓は凜一への愛情をどう繕っていたのだろう。

俺はその古美術商の店の扉を押した。

薄暗い、しかしガレ風のランプの不思議な色の所為で、まるでどこか違う空間に迷い込んだような気がした。

広くも狭くも感じない。ただ至る所に雑然と置かれている骨董品や美術品がひっそりと息を呑むように飾られている。

先刻の店の婦人が言ったとおり、店の奥に日本人らしい男性を見つけた。

その痩せた初老の店主は机に向かい、特製の電気スタンドの下で

懐中時計を調整していた。

「こんにちは」

俺は日本語で挨拶をした。

彼は顔を上げると、俺を見て少し驚いた顔をした。

「これはまた…珍しいお客さんですな」

「珍しいのですか？日本人の客は」

「日本人が珍しいわけではないんですがね…」

そう言うと、その店主は作業を止め、立ち上がったエプロンを叩いた。

「お仕事を中断させてすみません」

「いえいえ、何か気に入ったものがありましたか？」

「…学生の身なので、あまり高価な物は…買えないのですが…」

「もしかしたら、これが気に入られたんじゃないのですかな？」

店主は躊躇なくショーウィンドーに近づき、硝子戸を開け、宝石箱の中の二つのペンダントを取り出した。

「なぜ、それだと思われたのですか？」

「こういうものは持ち主を選ぶんですよ。あなたが覗いていた間、この二つのペンダントは輝きを増していた」

「…」

「仕事をしてても、見えるものは見えるんですよ、年を食うとね」

疑った顔をしたのだろうか、彼は俺を見て笑顔を見せた。顔の皺が彼の人徳を伺わせる。

とても嘘を言っている気がしない。

「こちらは星を形作り、そしてこちらは太陽の形をしている。光に翳すとその形もはつきりとわかる」

彼はふたつのペンダントを窓ガラスに翳した。

二つの銀細工に嵌め込まれた宝石が色を変え、光はそのペンダントを通して黄ばんだ壁にそれぞれに太陽といくつもの星の形の影を

映した。

「これにはちよいとした仕掛けがありましたな…ほら、ここに挟み込むですよ」彼は面白そうに、その片方ずつに持った二つのペンダントを重ねスライドさせた。

するとさっきまでの影絵は形を変え、はつきりと違う絵を映し出す。

「何に見えます？」

「薔薇、の花かな」

シンプルだが真っ赤に咲き誇る薔薇の花びらの影絵が映し出されていた。

「赤いバラの花言葉は何か知ってますかな？」

「…情熱、愛情、あなたに恋焦がれる…」

「深い愛情という意味ですね。それではこれは？」

店主はペンダントのひとつをゆっくり回転させた。

影絵は形を変え、そしていくつもの色を変えた。

さつきとは幾分形を変えた黒い薔薇の影絵が出来た。

「濃赤色の薔薇は…確か恨みや憎しみを意味しますよね」

「そうです。愛情も形を変えれば憎しみを生むという戒めなのではないか」

「…」

「このペンダントは永遠の愛を誓い合った恋人達が持っていたそうですよ。あなたとあなたの大事な方に巡り合う為に、ここで待ったのかもしれない」

「その恋人達は…幸せになれたのでしょうか？」

「さあ、それはなんと…言い伝えですから定かではありません」

彼は肩を竦めて微笑んだ。

穏やかなその容貌に嫌味のひとつも言う気にはならない。

「愛情とは普遍的なものでしょうが、心変わりをしないとは思えませ

ん。お互いの感情は絶えまなく形や色を変え続ける。このバラの影絵のようにね。それこそが、情愛の本質ではないのでしょうか」

彼は俺の手の平に、その二つのペンダントを置いた。

反射した淡い光が俺を包んだような気がした。

俺はそのふたつのペンダントを買った。決して安くは無い代物だ。あの店主に言いように騙されたとしても、それはそれで構わない。これは俺自身の心を映すもの。

もしかしたら、凜一を一生俺に繋ぎとめることができるものなのかもしれない…

いや、愚かな願いが叶うわけではない…

わかってる。ただ…

どうか、憎しみだけには染まらぬよう…

俺を導いてくれ…

4 (後書き)

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowseternal.blogspot57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

5 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

5、

凜一の春休みが近づき、俺は気持ち浮き足立って仕方が無い。

ジャンはそれを呆れた様子で見ている。

「そんなに落ち着きなのないケイイチを見るのは初めてだ。弟が遊びに来るだけの話だろう？」

「弟はまだ16で海外の旅行は初めてなんだ。世間知らずのクセに無鉄砲と来てる。何かしでかさないか心配で仕方が無い」

「ケイイチに似てハンサムなんだろうね」

「…それが一番の問題だ」

腕を組んで眉を顰めると、ジャンは弾けたように笑う。

「これは楽しみだな。ケイイチがそこまで案じる弟くんに会うのが」
皮肉たつぷりに言うジャンは異性愛者だが、もしかたということもある。

俺の心配は尽きない。

凜一が来た。

変わった格好をしているわけでもないのにどこにいても目立つ奴で、空港では探す手間が省けた。あいつは違和感がありすぎる。

車に乗って家に帰る間、「どうして慧の車は日本でも外国でも狭いのか」やら「エコノミーで来たけど、帰りは絶対ビジネスにする。一睡もできなかった」などと、どうでもいい平和的な話を延々と話して聞かせる。

なんだかそれも懐かしかったり可愛かったり可笑しかったり。日頃の退屈とは無縁になりそうだ。

凜一のおかげで普段では狭いと感じたことのない自宅が途端にせまつくろしい空間へと変貌する。だが、気分の悪いものじゃない。

目を上げればどこにでも凜一の姿を留める事ができる。自分以外の呼吸音が柔らかな音楽に感じてしまう。独りではないという安定感。信頼しあえる者と過ごすという極めて単純な、しかし、その大事さを改めて知る事になる。

だが、また別な意味で凜一が存在は俺を困らせる。

シングルベッドは当然独り用であり、俺は凜一用にソファベッドを用意していたつもりだったが、(もしくは俺がそれで寝るつもりだった)凜一は俺と一緒にこの狭いベッドに寝ることを強要し、別個に寝せてはくれなかった。

俺は恋焦がれる弟とひと月近くもひとつのベッドにくっ付きあいながら寝る羽目に陥った。

全く持つて…全理性を総動員させて俗物的な欲望を押さえ付けてはきたが、どうにも堪らなくなると夜中に抜け出して売専宿へと向かったこともある。

凜一に関しては…こいつは一旦寝てしまつと朝まで起きることは無く、たまに悪戯しても全く気がつかない。それがまた愛おしくてそれでも追い詰めるのも可哀相で仕方なくなり、肝心な事はできずに終わるのだが、翌朝凜一の項に薄く色づいているものを見て、恍惚的な余韻に浸る事もあった。

とにかく単色だった俺の生活が一変に鮮やかな色の付いた心躍るものになったことは確かだ。

凜一の昔からの物怖じしない誰にでも愛想を振りまくという気質は全く変わっておらず、こちらに着いて一週間も経たずして、アパートの大家さんと仲良くなった。

俺が大学に言っている間、大家さん宅にお世話になり、菓子や食材を貰ってくる事もしばしば。

英語もおぼつかない子が巧くコミュニケーションを取れるのかと聞くと、「ボディランゲージと以心伝心」などと判らぬ事を言う。

凜一はいつでも楽しそうだった。

一度街中で誘拐されそうになったと聞いて俺は真っ青になり、独りで出歩かないようにきつく寝めた。

「だって…慧が学校へ言ってる間、暇だもん」と、言うから大学構内で過ごさせれば、いつの間にか人だかりが出来ている。何の騒ぎかと駆け寄ると、凜一を取り囲んで学生達がカメラを持って、写している。

「凜っ！一体なんなんだ？」

「知らないよ。ここで慧を待つてたら、なんか撮らせてくれって…別にいいかな…って思っで。ああ、別の場所にもおいでって言っでた気がする…」

俺は我慢できずに凜一の腕を引っ張り、足早にその場所から立ち去った。

「何怒ってるのさ？」

「おとなしくしてろって言ったら」

「俺、なんもしてないし…」

「凜一、知らない人が声を掛けてきたら、どうするんだ？」

「…返事をしない。話をしちや駄目。付いて行っても駄目…だろ？」

「梓と俺が昔からおまえに言い聞かせてきたことだよな」

「俺、もう子供じゃないからさ、大丈夫だっで」

「この学生から見ればおまえは子供。しかも満足に喋れない。何をされるかわかったもんじゃない」

「慧の心配性」

「俺の言うことが聞けないなら日本へ強制送還だからな」

「…わかりました。おとなしくしてます。でも、俺本当に何もしてないんだけど…」

しょぼくれる凜一を見てみると可哀相な気もしてくるが、何しろ犯罪や事件には事欠かない街だ。こんなに目立つ子にどんな恐ろしい魔の手が迫ってくるかわからない。

「凜、とにかく俺の目の届くところにいる」

「わかりました…それより、俺、腹減った。あそこのカフェで何か食おうよ」

走り去って向かった先は例のカフェだった。

いつものウェイターが注文を取りに来る。

メニュー表を見てえ〜と呟いている凜一を無視して「ほうれん草とポテトのキッシュ、サーモンとアボガドのサラダ、スコーンとコーヒー二つ。以上」

「え？俺まだ決めてない」

「野菜不足になりがちなからな。これでいい」

「横暴だ。こっちに来た時ぐらい好きなもん食べさせてよ」

「どうせ独りでいる時は、好きなもん食ってるんだろ。おまえの体調管理を考えるのも俺の役目だ」

「この間、ジャンと食べたハンバーガーが食いたかった」

「ちょ、おまえ…いつの間にジャンと？」

確かに紹介はしたが…聞いてないぞ、俺は。

「この間ねえ、お昼ごはんおごって貰った」

「おいおい、敵は城の中にいるってパターンか？」

「いいひとだね、ジャンって」

「…」

こっちの気も知らずに暢気なことを言いやがって。

なんかもう本気でこいつを日本に返したくなってくる。

「…あの、注文はこれでよろしいでしょうか？」

俺たちの日本語を聞いて訳のわからなそうな顔で突っ立っているクリスに漸く気づいた。

「ああ、頼むよ」

クリスが去ると、凜一は意味ありげに俺の顔を覗き込む。

「慧はあの子と付き合ってるの？」

「はあ？」

「だって、ジャンが言ってたもん」

「……」

あいつとは今後一切付き合いをやめようと、真剣に考えた瞬間だった。

5 (後書き)

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowseternal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

6 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凛一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

6、

休日は凜一と観光地に行ったり、車で遠くの郊外に出かけたりした。

凜一は何を見ても感嘆の声をあげ、好奇心の体で目を輝かす。その様子を見ているだけでこちらにも楽しくて仕方がなくなる。

とりわけ、彼のお気に入り教会や古いゴシック建築物になると、時間など忘れて見惚れている。

「凜、おいで。そこばかりに囚われていちゃ次に進めない。一日の時間は決まっているんだからね」

「わかってる。でももう少し…ねえ、なんであのトレーサリーはあんな形なのかな？普通はもっと組み合わせをモダンにするのだけだね…それから見て、あの鳥籠、光の入り具合がすごく綺麗…ああ、あそこの模様も気になる。星型のヴォールトが見事だ。見てくる」

小走りで向かう凜一の背中を見送る。こうなると凜一が飽きるまで待つ他ない。

俺はひとり礼拝席で凜一の姿を見守る。

全神経を尖らせて見たものすべてを吸収しようと一心不乱になる凜一を俺は見つめる。

ステンドグラスに描かれている聖人は聖フランチェスコ。

主よ、私に求めさせてください

憎しみのあるところに愛を

罪のあるところに赦しを

絶望のあるところに希望を

闇のあるところに光を

慰められるよりも慰めることを

愛されるよりも愛することを…

ならば、彼の為に死ぬることを幸いと呼ぼうか
ステイグマなどいらぬ

彼の中で生き続けられるのだから。

「ねえ、慧。さっきの聖堂、すごく良かった感じがしない？」

「梓の聖堂に使えるそうかい？」

夕焼けの太陽に向かって走る車の中で、凜一は先程の余韻に浸っているらしく少々熱が高い。

「うーん、梓には完璧なゴシックよりロマネスク様式を取り入れたほうがいい。それとビザンティン風にね。その方が梓らしい。バシリカも短めにしてさ。兄貴そういうの作れるの？」

「俺の仕事は環境に合わせた近代建築だからなあ。専門じゃないけれど…凜一が色々と勉強して基礎構造から図面を書いてみるよ」

「そんなの…無理に決まってる。あんな、幾何学的な建築は無理だよ」

「だから勉強するんだろ？大学を建築方面に考えているのなら、協力するけれど…」

「大学かあ…まだ全然考えてないよ。俺、あんまり頭良くないし、慧みたいがいい大学に行けそうもないし…」

「凜一は俺よりずっとすぐれている」

「え？」

「って、梓がいつも俺に言ってた。あいつの凜一鼻肩は俺以上だったからな」

「そうは見えなかったけど…梓はそっけなかったからさ」

「俺がおまえを猫可愛がりすぎていたから、梓は距離を取ってバランスを図っていたんだよ。あいつの方が理性があるし頭が良かった」

「梓の話してくれる物語は今でも良く覚えているんだ。すべて面白

かったもの。元々梓はシェヘラザードの生まれ変わりって自分で言
ってたからな」

「あいつの作り話の緻密さには、俺もさすがに感心したけれど、と
ころどころ辻褄が合わなくてさ。おまえに聞かせてやっている隣で
笑いそうになったよ」

「俺は子供でそういうのは判らなかったからな。梓の作る物語には
不思議な力があつたよ。…生きていたら、売れ筋の物書きになって
いたかもね。何ひとつ残さないまま死んでしまうなんてさ…残念で
仕方がないよ…」

「凜…梓のことを話すのはいいけれど、いい思い出だけにしよう。
生きていたらなんていうのは…寂しすぎるから、ね」

「うん、わかってる」

その後、俺と凜一は家路に着くまでずっと黙り込んでいた。

お互いに昔の思い出に浸っていたからかもしれない。

俺たちの共有するものが、もっと増えていけばいい。

そして、俺たちだけのものなればいい。

凜一の帰郷が近づいてくる。傍に居ることがあまりにも当然すぎ
ると、去っていく喪失感を想像できないでしまっている事に気づく。

凜一がいなくなってしまうと相当に堪えるのだらうと、苦笑いで
顔が歪む。

目の前には凜が居るのに…

凜一がシカゴを去る前夜、凜一は俺に相談を持ちかけた。

付き合っている恋人への悩みを吐露する凜一に、胸中穏やかでは
いられなかったが、なにしろ凜一のしょんぼりした様子があまりに
も可哀相に思えて、俺も殊更元気づけた。

「正真正銘の恋」「本気で愛している」という、凜一の相手を俺は憎みたくはない。

凜一が幸せになれるなら、俺の思いなど報われなくてもいい…何度もそう誓ったはずだった。

共に眠るベッドの中で凜一は、「俺の慧への愛は変わらないよ。たとえ、俺がミナを愛したとしても、慧への愛情が微塵も減ったりはしない。慧と俺の絆は特別なもの」と、言う。

凜一はそれを俺への敬意のつもりで言ったのかもしれない。だが、その言葉は俺の胸を切り刻んだ。頼むから俺との絆と、その恋人との愛を同じ秤に載せないで欲しい。

おまえに愛されるその恋人と、報われぬともすべての愛を注ぐ俺では、何もかもが違いすぎる。

俺は残酷な言葉を吐く凜一の寝顔を見つめ、そして抱きしめる。
「一時の恋なんかすぐに飽きるに決まっている。お互いの心が離れ、別れ、傷つき、そしておまえが帰ってくる場所は俺の腕の中でしかないんだよ、凜…」

憎しみのあるところに愛を？

…無理だ。俺には憎しみは憎しみでしかない。

翌日、別れのターミナルで俺は凜一に、先日買った恋人たちのペンダントの片割れを、誕生日プレゼントとして渡した。

素直に感動し涙をみせる凜一に俺は狼狽した。

このペンダントを凜一に渡すことを俺はずっと躊躇い、何度も諦めていた。

こんなに欲望をしたための証を、凜一に渡して、そしてその心が手に入るのか？

そんなことを俺は望んでいるのか？

凜一を恋人に盗られたくない。その一心でしかないのだろうか？

そんな想いを込めた代物に涙する凜一があまりにも哀れに思えた。

俺は酷く後悔した。

涙を堪えて「行ってきます」と、握手をする凜一を、俺は瞬きさえ忘れて見つめていた。

「元気で。ちゃんと、食べるんだぞ…」

俺の別れの言葉に精一杯笑って応えた凜がいとおしくて… たまらない。

ゲートに消える姿を確認した後、俺はラウンジの奥でひとしきり泣いた。

「凜一、愛している…」

何度も、何度もそう呟いていた。

> i 5 1 8 4 — 2 7 3 <

6 (後書き)

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowsetter.nal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

7 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

7、

凜一が帰国してからのしばらくは、あまりの空虚さに食事も取れないほど落ち込んで仕方なかった。

大学院に行っても研究もレポートもやる気が起こらず、意気消沈した俺を見かねて傍らのジャンがハツパをかける。

「おい、ケイイチ、しっかりしてくれよ。そりや確かにリンイチはクールビューティだしかわいいからおまえが心配するのも愛玩するのもわかるが、案外おまえよりもしっかりしているぞ。いい加減弟離れしたらどうだ」

「…わかつてるよ」

親切心だとはわかつているが、聞き飽きたお説教だと、うんざりした。

俺が落ち込んでいるはそういうことじゃないんだ。

あの子が傍にいない。ただその事実が俺にとっては光を失ったと同じであり、盲目のまま彷徨っているようで何も見えないんだ。その暗闇に早く慣れてしまわなきゃいけないとはわかつているのだけれど…

長い夜を独りで居ると、益々思いは募る。

居ない事がわかつていても部屋の隅々に凜の姿を追う。

皿を洗いながら笑っていた姿や、ソファに座り俺の顔を見て夢中になって喋り続ける顔、俺の膝枕でうとうとと目を閉じようとする横顔やら…至る所に凜の残り香が俺に纏わり付いて仕方がない。

いつそ生霊でもいいから、傍にいてくれないか、凜…

あいつが居ないだけでこんなに辛いのなら、なにも望まないからただ傍にいてやれないものかな…そう思って凜一と寝ていたベッド

に身体を埋めると、あいつの匂いが染みこんでいる様で、途端に欲情に火がつく始末。…どうしようもない。

目を閉じて凜一を思い浮かべる。

凜一を抱く夢を見たい。

抱きしめ、愛撫し、中に入れ、到達する。

それから…

それから…なにが残る。

俺の思考はそこで止まる。

一体全体この愛はどこへ行き着ければ満足なのだろう。

4月14日、凜一の誕生日のお祝いを直に言いたくて滅多に掛けない電話をした。

突然の電話に凜は驚いた様子だった。だがいつもとはなんとなく様子が違う。

「慧、ありがとう…今、ミナがうちに来ているんだ。プレゼントを貰ってね。ケーキを食べてるところだったんだ」

「そう、か…うまくいったんだね」

「うん、兄貴のアドバイスのおかげだね」

「良かったな、凜」

「うん、俺、幸せだよ。精一杯尽くしてミナを幸せにしたい」

「おめでとっ…」

胸がキリキリと痛んだ。

わかっていた。

凜が本気で欲しいと思ったら確実に掴み取るし、あいつの思いはいつも一途だから…だから、あいつは恋人を幸せにするのだろう。

凜一の幸せはそこにあるのだろう…

わかっていた…

その夜は眠れなかった。

昔、梓と良く話した源氏物語の「葵上」を思い出していた。

高校の時、校外授業でその能を見たことがある。

恐ろしい般若の面おもてを付けたシテが打杖を持って小袖、つまり葵の上を打つ場面は、生霊と成り果てた六条御息所の愛するが故の嫉妬と執念の凄まじさを描いている。

いくら呪ったところで愛する者は戻ってこないとわかっているのに……と、当時俺は六条御息所を哀れだと思っていた。しかし、今なら彼女の思いの強さがわかる。

だが、俺は般若の面を付けたくはない。嫉妬に狂った鬼女にはなりたくない。

俺の想いを憎しみに変えないでくれ。

俺はペンダントを握り締めながら、必死で祈った。

どうか美しいままの薔薇を咲かせて欲しい。

サマータイムには凜一の元へ帰ることを約束していたが、凜一がそれを望んでいないのならここへ留まろうと院での予定を立てていた。

だが、凜一からは、「いつ帰ってくるのか?」「早く帰って来て」と、再三請い願われ、俺は仕事を早々に切り上げ帰省の支度をした。俺を待っていてくれるのは嬉しい事には違いないが、恋人のいる凜一をリアルに見るのも辛い気がする。

複雑な気持ちで成田に着くと、到着ロビーで待つ凜一を見つけた。相好を崩して俺の胸に飛び込んで来る凜一は何ひとつとして変わっていない。俺のこの何ヶ月かのわだかまりは一体なんだったのだと、ふさいだ気分が一遍に吹き飛んでしまった。

「慧、お帰りなさい。っていつか遅いよ。もっと早くに帰れるかと

思ったのに」

「ゴメン。コンペのプレゼンを頼まれてしまつて、色々とね…遅れたんだ」

「約束じゃ七月には帰れるつて言つてたじゃん。待ち焦がれたよ」

「じゃあ、罪ほろぼしに休暇中は食事の用意は俺が引き受けるよ」

「マジで！良かった！自分の手料理にも飽きていたところなんだ。

慧が食事を引き受けてくれるなら、俺は存分に勉強に専念できる…なゝんてね」

「…ちやつかりし過ぎだろ、凜」

調子がいいのは俺の方だ。

緩んだ顔が戻らないでいる自分自身に呆れたのは言うまでもない。

7 (後書き)

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowseternal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

8 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

8、

夏休みというのに凜一は忙しい。補習と部活。ついでに体育祭の練習もあるらしく、マトモな休みは土日だけ。夏休みの意義はどこに行ったのかと呆れたりもするが、何より学校生活を楽しんでいる凜一を見るのは嬉しい。

昼間はほとんどいない凜一の代わりに俺が留守を守る役目となる。家事一般は当たり前、ついでに夜は凜一の家庭教師も兼ねる。とにかく凜一の世話に徹底した。

ふたりでいると相変わらず俺に付かず離れずの凜一だったが、やはりシカゴにいた時とは違う。

恋人が出来た所為だろうか。時折言葉の端々に変な気遣いを感じる時がある。

恋人をこのマンションへ連れて過ごしているのは部屋を見ればなんとなくわかる。どこがどうというわけではなく、二人で暮らしていた時では感じなかった何かが澱のように残っている気がするのだ。

だが、凜一は俺が帰ってから恋人に関する事は自分からは一言も口にしなかった。

「今度恋人を連れて来いよ。美味いもんでも作るからさ」と、挑発しても「そのうちね」と、言っただけで後を続かせない。

俺に対する気遣いなのだろうか……

だが良く考えれば兄に気を使うというのはおかしいはずだ。照れ隠しならまだしも、あいつはそういう性質たちではない。じゃあ、一体何があいつの気を使わせる。

もしかしたら……と、思った。

あいつは、俺の気持ちに勘付いているんじゃないんだろうか…
だとするならば、凜一がそれを追求した時、俺は…それを否定できるのか？それとも心の内を話すべきなのか。

お盆の前後は両親達も帰省し、石川の実家へ里帰りとお墓参り。
ついでに山中温泉で家族旅行を楽しむ。

勿論極めて楽しんだのは両親達なのだが…日本中の温泉を楽しみたいのなら定年退職した後、ふたりでゆつくりと巡ればいいと思うのだが、どうも俺たちと仲のいい家族ごっこも楽しみたいらしく、もっと甘えていいのよと盛んに誘ってくる。

いや、俺はノーサンキュウ、いりませんと断るのだが、凜一は喜んでお継母さんにべったりだ。その上、今まで親父に甘えたところなどついぞ見たこともなかったのに、大浴場へ誘ったり、長い事ふたりで和やかに話込んでいたりやら…どうした事かと俺は目を疑った。

さすがに4人で顔を突き合わせてトランプの大富豪をするあたりになると、俺も呆れながらも仲間はずれにならないために一緒になつてはしゃいで見せたりしたが。

親父が仮想でも円満多幸な家族の肖像を描いているのなら、こんな家族ゲームぐらいは夢を見せてもいいだろう。どうせ長続きなんかしない。こんな上っ面だけの…

「楽しかったねー慧。またやろう、大富豪」

部屋に帰って敷かれた布団の上でバタ足をさせている凜一を見ると、なんだか切なくなってしまう。俺と梓は凜一を懸命に育てはしたが、まともな家族の風景などは与えてやれなかった。親子の愛情や関係は兄弟のそれとはそんなに違うものなのだろうか。

「凜は…親父たちと一緒に暮らしたいんじゃないのか？」

「え？何いきなり」

「その方がいいのなら…俺が親父に頼んでみようか」

「…別に…そんなの望んでないよ。たまに会ってこうやって楽しめたら、それでいいんだよ。一緒になんて…そんなの考えられないよ」

「やってみれば案外うまくいくかもしれないよ。凜は…今まで親に甘えてきたことがないのだから、そういうことを経験するのもおまえのためにはいいのかも知れないな」

「やめてくれよ…今更いい子のフリは出来ない。俺がどんな奴かって慧も知ってるじゃない。本性をばらしてあの人たちを幻滅させることはないだろう」

「凜…」

「俺には慧という家族が…兄貴がいてくれればいいんだよ。慧だけだ。本当の俺を見せても俺を愛してくれるのは。違う？」

「…」

両親が帰った後はまた二人だけの生活に戻る。

確かに両親がいる時と比べると、凜の顔つきは幾分違う。

親の前ではいい子を演じていたらしく、今の方が僅かだが凜一の影は強くなる。

その強さというのは外連味の一切ないあだっぼさというか、撫でれば気が付かぬうちに傷を負うようなそり立つ気高さがあった。そのくせ妙に人懐っこい。笑うと近づきにくい整った容貌が愛嬌のある表情に変わる。

長年を共に生きてきた一人の人間に対し、これほど眺め知りぬいていてもこうも飽きないものだろうか。

俺は凜一といるとなにか得体の知れない魔物が神から逃げる術を持たない哀れな囚われ人になった気がする。

腕の中で安らかに眠るこの子は、俺の意思でどうにでもできる生き物だ。この目の前に晒された裸の身を俺は自分のものにできる。

それなのに…恐ろしくて手が出せない。一体何なんだ。この恐怖という感情は。

繋がった血であるという禁忌だけの恐怖なのか？

違う。心の底の本能が恐ろしいと叫ぶのだ。

俺は凜一が怖い。怖いのになんかしょうもなく惹かれる。執着する。恋焦がれる。アガペーなどではない。顕示欲に拘る。俺のものだとかいつにわからせたい。

見事なる精神構造の深淵さだ。バカの見本としか言いようがない。

八月の終わり、三者面談の為学校に向かう。凜一の担任はかつての恋人である藤宮紫乃だ。

凜一の教室で凜一と一緒に紫乃に向き合う。

どう考えたって滑稽な図だ。しかも言い争っている内容も凜一の進路の話をすべきところが、段々と支離滅裂になってくる。昔から紫乃と言い合うことは俺たちの中では日常茶判事というか、コミュニケーションのひとつとなっていた。が、隣の凜一は相当呆れたらしく、苦い顔をして去ってしまった。

「おまえと居るといつもこうだな」

紫乃とふたりきりにされた俺は頭を抱えた。

「別に構わないだろう。俺たちにすりゃあ普通なんだから」

紫乃は臙脂のセルフフレームの伊達眼鏡を外し机に置いた。先生の役目はしばし休憩らしい。

「凜、怒ったかな」

「何が？」

「あいつを無視して俺たちが昔みたいに…」

「仲良くしている事に？」

「…仲良くはしてないがね」

ムツとして睨むと、紫乃は薄く笑いそして、哀れみを帯びた目で俺を見つめた。

先程まで晴れていた空が急激に曇り、一陣の風を巻き上げ、ぽつりぽつりと雨音が響き始める。

「降り込むかな」

紫乃はそう呟き、立ち上がって教室の外側の窓を閉め始めた。俺も手伝おうと窓に近づき外を眺めた。

左手の奥に教会が見える。手前に少し離れて体育館を兼ねた講堂、そして広いグラウンド。なんだか懐かしい気がした。

「この学校に足を運んだのは、確かおまえ今日が初めてじゃないか？」

「ああ、入学式も付いてやらなかったからな。学校自体が久しぶりでなんだか懐かしいよ」

「ほら、あそこを見るよ」紫乃の指指す先を見る。

「あの別館の建物の影に少しだけちらりと見えるだろ？…あれが温室。凜一の隠れ家さ。今は恋人との密会場所になっているらしいがね」

「…」

「残念ながらここからじゃ中の様子はまるでわからないが、かなり好きなことをやっているよ、おまえの弟は」

俺は黙ったままで紫乃を睨んだ。

「喫煙ぐらいなら可愛い方。だが、真面目な優等生をかどわかし色狂いにするのは校則違反だろう？」

「恋愛の自由ぐらいは保障してやれよ」

「これはまた暢気な兄さんだね。もう諦めたのか、凜一をものにするのは」

「ああ、もういいんだよ」

俺は降りこんで来る雨を避けるため、ぴしゃりと窓を閉めた。

「…慧一、おまえ」

「どうにもならんことをいつまでも言うなよ、紫乃。俺は『凜一のいい兄貴』を貫くつもりなんだから」

「…」

「頼むからそうさせてくれよ…」

「…わかったよ。わかったからそんな顔はしないでくれ」

どんな顔をしていたのかは自分ではわからなかったが、そういう紫乃の方がよっぽど切な気で俺は同情するよ。

「紫乃、おまえが…」

「え？」

「いや、なんでもない」

俺の運命がおまえに繋がれていたならどんなにか良かっただろう

…なんて、あまりにも勝手すぎる戯言だよな…紫乃。

8 (後書き)

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowseternal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

9 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

9、
凜一の休日にくたり、横浜に買い物に出かけた。

アメリカではそう感じなかったが、人ごみを歩いていると、他人の視線が気になって仕方がない。別に目立つ格好をしているわけでもないのに、やたらと俺たちを見るのだ。

確かに凜一は目を引く存在だが、どれもこれもが怪しい奴らな気がして、俺は少々神経過敏になってしまう。

凜一に聞くと、「そうかな、俺はあんまり気にならないけど。今は田舎だからそうないけど、調布にいた頃は結構スカウトされたりしたよ。俺、全然興味ないから無視してたけど。そういう兄貴だつて声かけられた方だろ？」

「うん……」

モデルの勧誘は多かったが、凜と同じでそういうものに全く関心がなかったから、気にもしなかった。自分の事は気にならないのに、弟の事になると干渉過多になってしまうのは親バカの典型なのだろうけれど。

買い物をした後、アウトレットモールの福引きで箱根一泊旅行券に当たってしまった、俺は少し悩んだ。凜一と一緒に行くのはいいが、凜一はそれを喜ぶだろうか。俺よりも恋人との旅行が楽しめるのではないだろうか……そう思って凜一に渡した。

凜一は少し不思議な顔をしてそれを受け取った。

翌日、恋人に渡したら喜んでくれたと嬉しそうに報告する凜一にほっとしたり、どことなく切なかったりと、もてあまし気味の自分の感情に情けなくなる。

一生凜一を見守っていく覚悟でいるのに、これくらいで操縦をもたついてもらつては俺としては困るわけだ。

お守り代わりにつけたネックレスを俺は強く握り締める。

どうか凜をお守りください。

俺の醜い欲望に穢されぬよう…

彼の真の幸せを見つけれよう…

お守りください。

九月になり俺の休暇も終わる頃、凜一は「Satyri」へ行こうと俺を誘った。

俺は凜一が鳶谷さんと会っていたことは知らなかったから驚いた。

「凜、サティロスに行けるようになったのか？」

「うん、七月頃だったかなあ…思い切って行ってみたんだ。大丈夫だったよ。月村さんの事も俺、いい思い出としてずっと忘れないでいようって思えたんだよね」

「そう、か…」

「慧にも心配させてしまったけれど安心していいよ。俺、やっぱり月村さんのことが好きだったんだ。あの人の純粋な魂に触れるのが心地よかったんだ。だから慧も月村さんを許してやってよ」

「…」

「一緒にサティロスに行ってくれる？」

「ああ、そうだね。俺も久しぶりに鳶谷さんに会いたいしね」

夕方、家を出て途中で夕食を取って、8時過ぎに「Satyri」に着いた。

重い二重ドアを開けると生演奏の重低音が身中に響く。どんなに揃えたオーディオコンポでも敵わないあと感心しつつ、先に行く凜の後を付いて行く。

凜一は躊躇わずにカウンターに向かうと、そこに座っていた客は

一斉に立ち上がり、かわるがわる凜一を抱きしめキスをしたり頭を撫でたりしながら歓待する。

その場面に少々衝撃を受けながらも愛されている凜一の姿を見るのはやはり嬉しい気分だ。

壁際のカウンターの端に凜一が座るのを見て、俺は逆の隅に座った。

凜一を眺めるのにも丁度いい。

天井の淡いライトが丁度凜一を照らし出して、その姿がなんだか本当に幻の天女ようにさえ見える。

目の前にいつもの水割りを差し出した鳶谷さんに挨拶をする。

「久しぶりだね」慧一くんが店に来るのは去年の春だったから……」

「一年半ぶりですよ」

「元気そうでなによりだ。凜の奴、夏の初め頃に来てくれてね。すっかり大人になって驚いたよ。凜一が来ると常連の奴らが喜ぶんだよ。凜はうちのアイドルっ子だからなあ。あ、心配いらないよ。

常連客は凜のことを家族みたいに思っているし、他の客に誘われても凜はきっちり断っているからね。すっかり身持ちが硬くなったようだね。慧一くんの指導の所為かな」

「俺じゃなくて……恋人が出来たからでしょう。凜はその子に本気らしいから」

「ああ、凜一から聞いたよ。ぞっこんらしいね。いつまで続くかわからんが」

「そんな事を言ったら、凜一が怒りますよ」

「慧一くんだってそうなって欲しいと思っているんじゃないのかな？」

「俺は……凜が幸せなら、いいんですよ」

「益々悟りを開かんとする苦行者の域になってきたね。即身仏にでもなる気かい？」

「俺には一生悟りなんて開けませんし、理解する気もない。まして

や永遠の命なんてこれっぽっちも欲しいとも思わない。ただ凜が…」

「凜一はまだ何も知らないのかい？」

「わからない…俺が…愛しているのは凜一だけ、だとは気づいているでしょう。これだけ執着しているのだから。だけど…」

「…」

常連の友人達とリラックスした面持ちで会話を楽しみ、楽しそうに笑う凜一を眺めていると、やはりこのまま兄として見守っていたほうが正しい事のような気がしてならない。

「店が終わったら、家に来るかい？俺としては3人でゆっくり過ごしたいんだけどね」

「ありがとうございます。でも凜一だけお願いしてもいいですか？俺は終電で帰りますよ。明後日シカゴに帰ります。そしたら凜はまたひとりになる。面倒だと思っけれど凜一は鳶谷さんを頼りにしているから、よろしくお願いします」

俺の頼みを聞く鳶谷さんの顔には憐憫さが漂い、俺は少しだけ笑って見せた。

誰にも救いようがない魂つてもんもあるんですよ、鳶谷さん。

東京の夜空を見上げる。

ぱっくり割れた上限の月の影は何かに怯えているようにも見える。

俺が恐れているのはあの子を傷つけること。

あの子の魂を半分に切り捨てるマネだけはしたくない。

こっそりと「Satyri」を出た俺は、生温い夜風に当たりながら駅に向かった。人通りも少なくない。俺は帰宅を急ぐ人を掻き分けながら歩いていく。

「慧っ！待って！」

ざわめく街中に響き渡る声がした。

思いもかけなかった凜一の声に俺は足を止め振り向いた。

「凜…」

「なんで…ひとりで、勝手に…帰っちゃうの、さ…」

余程の速さで走ったのだろう。息を切らしながら凜一は俺を睨んだ。

「ゴメン。凜一は鳶谷さんをお願いしたから、終電に間に合うようにって思ってたね」

「鳶谷さん宅に泊まるのなら慧も一緒じゃなきゃ嫌だよ」

「ふたりもお邪魔するわけにもいかないよ。凜は鳶谷さんとゆっくりしてもいいんだよ」

「やだよ」

凜一は怒ったように前を向き、俺の腕を取ると引つ張りながら駅の方へ歩き出した。

「慧一は明後日にはなくなっちゃうのに、なんで鳶谷さん宅に俺ひとりで行かなきゃならないんだよ。俺は少しでも慧と一緒に過ごしたいって思っているのにさ」

「…ゴメン」

「慧は俺の気持ちをわかってないんだよ。昔から」

「そんな、事はないと思うけど…」

「じゃあ、俺から逃げるな！」

絡めた腕の力は少しも緩まない。

「ごめん、どこにも逃げないから、凜。」

「おまえが俺を求めてくれるのなら。」

「俺はずっと傍にいるよ。」

平日からなのか、終電に割には席は空いていて、余裕で凜一と座れた。

暫くすると凜は俺の肩に凭れ、呼吸もゆっくりとなる。

眠っているのかと様子を伺えば、薄く開いた瞳は窓の外の暗い景色を見つめている。

こうして静かにしている横顔をみると17になってもどこか少女めいた顔つきをしている凜は魅惑的でもあったが、いくらか愁いを含ませた眉間からは純潔な聖職者にも見える。

すぐに眠るのだろうと思い、俺も仮眠しようと思肩の力を抜いた。すると程なく俺の右手に凜の左手が絡んできた。俺は一瞬びっくりしたが凜のするがままにしておいた。

凜の指と俺の指が絡み合いしつかりと握り合わされた。

俺は右斜め上から凜の顔を伺ったが、先程となにひとつ変わらない。

ただしつかりと握り合わされた手の力は少しも弱めてはくれなかった。

凜一は、俺になにを求めているのだろう。

保護者として甘えさせ、抱きとめる愛情…。

それとも、おまえを欲望で埋め尽くし縛り付ける愛が欲しいのだろうか。

合わされた手の平の中には一体何が隠されているのだろうか…

俺たちはいつかそれを解読し、お互いの目の前に晒さなきゃならない気がする。

俺はそれが暖かい光であって欲しいと、思っているよ。

そうでなきゃ、俺たちは…

電車の音だけが鳴り響く車内。

このまま銀河鉄道にでもなればいい…と、思いながらまどろんでいく。

9（後書き）

時間軸を整える為、次回は水川青弥編「焦点」へ続きます。

10 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

10、

「け、い…けい…」

彼が初めて呼んだのは、俺の名前だった。

凜一はハイハイもあまりせず、七か月もするとひとりで立ち上がり、さつさと伝え歩きを始めた。

俺と梓は子育ての本を頼りに凜一を育てていたから、ハイハイをせずに歩き始めると腕の筋力が劣りがちになると本に書かれているのを見つけ、すわと凜一が立ち上がる前にうつ伏せにさせ、ハイハイを強要する。と、凜一は泣きながら座り込み、そのまま尻を上げ立ち上がってしまう有様。仕方がないので多少本と順番が違っていたでもいいかと、梓と顔を見合わせ、凜一の思うままにさせていた。俺たちの心配をよそに、ハイハイを覚えないうちに、10ヶ月も経たぬうちに凜一はひとりで歩き始めた。

俺と梓は右と左に別れ、離れて座らせた凜一をそれぞれに呼ぶ。

「凜、こっちおいで。兄さまはここだよ」

「凜、こっちこっちよ。梓の方がお得よ」

「何がお得なんだよ」

俺は梓に向かって詰問する。

「そのうちおっぱいがでるわ」

「…」

いつの話だよ。まだ9つのガキのクセに。

「凜、おいで。梓姉さまのミルクなんて当てにならないよ。僕の方が凜の為になる」

「なんの？」

今度は梓が納得できないという顔で俺を睨む。

「何回も凜を高い高いできるし、夜中だって梓みたいにすぐ疲れたなんて言わずに、朝まで抱っこしてやれる。お風呂にも大きくなっても一緒に入れる」

「ひどいわ。私だつてずっと凜と一緒に風呂に入るもん！」

「大人になったら男は女とは入りません。凜、男同士仲良くしようね」

ヨチヨチ歩きの凜一は、身体全体を懸命に揺らせ、きゃっきゃつとはしゃぎながら、俺の方に向かって歩いてくる。

「ほら、ごらん。やっぱり僕の方が好きなんだよ」

前方に紅葉のようなかわいい両手を突き出して歩いてくる凜一を抱きとめようと、俺は両手一杯広げる。

「おいで、凜。大好きだよ」

俺の指先が届く瞬間、リンリンと鈴の音が鳴った。

凜一は即座にその音のする方を向く。

梓が凜一のお気に入りの鈴のおもちゃを手にして手招きしている。

「凜、おいで。こっちの水が甘いわよ」

あと僅かで手に届く凜一の身体はくるりと方向転換。そのまま梓に向かって行った。

一目散におもちゃへ向かった凜一の身体は、梓の広げた両手にすりと納まった。

「ずるいぞ、おもちゃで気を引くなんて」

俺は多少本気で憤慨しながら、凜一を抱く梓を睨んだ。

「凜にはお兄様よりこのおもちゃの方が大事ってことだね。ねえ、凜」

凜一を抱き締めた梓は凜の頬に嬉しそうにキスをする。

「……」

おもちゃを手にして喜んでいる凜一を見たら、反論する気が失せ

た。

ちえっ、おもちゃがなかったら、凜一は僕の方を選んだのに…

一歳のお祝いを過ぎると、マンマ、ブーブーなど色々な言葉が増えてくる。

凜一は訳のわからない言葉で俺たちを楽しませてくれた。

「ねえ、かあさま。凜はいつになったら私達の名前を呼んでくれるの？」

さつきから眠そうな凜一は母に抱かれると、さほどむずがらずにスヤスヤと寝息を立て始めた。

「そうねえ…もうすぐかしら。あなた達も最初は凜一と同じように片言が長かったから、凜もそうかしらね」

「最初にかあさまを呼ぶのは仕方がないとしても、早く私を呼ぶ凜の声を聞きたいわ。そうだわ、にいさま、賭けをしない。にいさまと私、どっちを先に凜が呼ぶか」

「あら、でも梓の名前は言いにくいから、慧一のほうが早いんじゃない？」

「じゃあ、あーちゃんって呼ばせようかしら。それなら簡単でしょう？」

「あーちゃんって…柄じゃない」

先に呼んで欲しいからって、そこまで拘るのか？

妹の負けず嫌いに呆れながらも、最初に俺の名を呼んでくれればいいと、俺は言葉に出さずに祈った。

家族全員が揃った日曜の午後だった。

あの頃は、母の身体を気遣って、休暇でも外出などはせず、家中でのんびりと過ごすのが我が家の休日の過ごし方だった。

両親と俺たち家族の団欒の中心にはいつも凜一がいた。

ひとりで歩くのも随分上手くなり、広いリビングをここやあちらと歩き回る凜一を目で追っていると、ふいに凜一は俺の方を向き、「けい、い…けい」と、片言の声を発しながら俺の方に向かって歩いてくる。

俺は驚いて心臓が止まるかと思った。

…言葉も出ない。

凜はニコニコ笑いながら「けい、けい」と何度も俺の名前を呼ぶ。

夢じゃないかと辺りを見渡す。両親も梓も驚いた様子で凜一の行方を見つめている。

「けい」と、呼ぶあいらしい声音。

「凜…凜一」

俺はこの小さい身体を、俺に向かって歩く俺の光を受け止め、そして抱きしめた。

「けい、慧…」

「うん、そうだよ、凜。凜一の慧だ。慧だ。大好きだよ、凜…」

俺の光、愛、希望、喜び…俺のすべて。

おまえを離さない。

「あら、にいさま、泣いてるの？名前を呼ばただけなのに」

「そうだよ。だってとても嬉しいから」

俺はこぼれる涙も隠さずに言う。凜が小さい手を広げ、俺の頬に流れる涙をものめずらしそうに触っている。

「…そうね。きっと…私も凜から名前を呼ばれたら、きっと泣いてしまうわ」

「梓…」

「にいさまが羨ましい」

「梓だつてすぐ呼んでくれるわよ」

母が梓の頭を撫で、優しく宥めている。

「うん」

母の膝に顔を埋めた梓の頬に光るものは、悔しさの涙だろうか、それとも俺の気持ちと同じように感じていたのだろうか。

「慧、けい」

俺の腕の中で凜一は何かの呪文のように俺の名前を繰り返し、繰り返し呼んだ。

「…い、ケイイチ」

背中を叩かれて、俺は夢から覚めた。

見慣れた風景、書き散らした紙の散らばった机と目の前には真っ黒のスクリーンサーバー。ああ、いつもの研究室だ。

…いつの間にかうたた寝していたのか。

「連日の徹夜で疲れているようだな、ケイイチ」

同級生でもあり同じ研究グループのジャンが、目覚まし代わりのコーヒーを差し出した。

「ああ、でも目処はついたよ。あとはたわみの計算を纏めれば来週には提出できる。それはそうと何か用かい？」

「教授が呼びだよ」

「この時間に？何事だろう」

俺たちの間で名前を言わずに教授といえば、ブライアン教授を指す。

「悪い話じゃなさそうだったぜ。ご機嫌はよさそうだ」

「じゃあ、この間のコンペに出した近代都市デザインの結果が良かったのかな」。あれはリバイライセンスも兼ねているから、いい点数を貰えたらありがたい」

「就職の話は色々来ているのだろう？」

「ああ、一応心積もりはあるんだが…最終的に決断するのは、もう少しかかりそうだ」

「日本に帰るんだろう？」

「…なるだけね」

俺は散らかした机の上をあらかた片付け席を立った。机の端に、この間の家族旅行の時に撮った4人揃った写真が飾ってある。俺の隣で穏やかに微笑んでいる凜一がいる。

つい口元が緩む。

ドアに向かう俺は、なんだか笑いを堪えているジャンを不思議に思った。

「なに？」

「いや、さっきのおまえの寝顔。嬉しそうな顔していた。なにかいい夢でも見てたのか？」

「別に…忘れたよ」

「そうかい。俺はまた可愛い弟の夢でも見ていたのかと思ってたよ」

「…」

幸福な午後のまどろみを壊した張本人が言うなよ。

ドアを閉める間際、机の写真の凜一が俺を呼んだ気がした。

何も知らぬ赤ん坊の時の声ではなく、少年とも大人とも言えぬ不確かな、そして鮮やかに明瞭な声音で俺を呼ぶ。

「慧、俺の慧、愛してるよ」

俺は微笑んで応える。

ああ、俺も…ずっと…おまえが誰を愛そうが、ずっとおまえだけ

を愛しているよ、凜。

彼が最初に呼んだ名前は、俺の名前だったんだ…

11（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

> i 5 1 3 9 — 2 7 3 <

1 1、

十月十日はどうしても日本に帰国したかった。

凜一の体育祭がある。

シカゴ大学の研究生であり、教授の助手としてそれなりの仕事もこなしている俺には、忙しい時期ではあったが、どうしてもこれだけは自分の目で見ておきたかった。

凜一の学校行事には出来るだけ参観に行っていた。

親のいない寂しさを凜一には味あわせたくなかったからだ。

中学時代は俺が勝手に留学したから、凜一には可哀相なことをしたと後悔している。

中3の時は例の事件で不参加、去年の高一の時は俺の都合で観に行つてやれていない。

凜一が応援団に参加することは、夏休みに毎日のように練習に出かけていたのを知っていたから、尚の事、この目に焼き付けておきたい。

体育祭の前日の夕刻、鎌倉の自宅に帰りつく。

凜を驚かせたくて、事前の連絡無しの帰宅だったから、俺の姿を目にした凜一はさすがに言葉もないくらいに驚き、黒まなこを何度も瞬かせながら、俺に飛びついてきた。

「俺の体育祭を観る為に？それだけの為に帰ってきたの？」

「そうだよ」

「バカだ…」

呆れながらも身体全身から湧き出る喜びを隠そうともせず、俺の首に両腕を回して頬ずりをする。

凜一の喜びはそのまま俺の喜びになる。

夜になると夕方まで降っていた雨の音が次第に小さくなっていった。ベランダにふたりで出て空を見ると、風に流れていく雲の間から秋の星座が見え隠れしていた。

「明日は大丈夫そうだな」

「せっかく慧がアメリカから来てくれてるのに雨天中止じゃ笑い話にもならないよ。良かった…明日はきっと晴れるね」

「ああ…それより、弁当をこさえる材料があんまりないな。どうする？おにぎりとお焼きたちいならできそうだが」

「それは大丈夫。鳶谷さん達が用意してくれるって」

「鳶谷さん…たち？」

「うん。慧も知ってるだろ？サテュロスの常連さん達だよ。俺を可愛がってくれてるの。ミコシさんと戸田さんと、プロカメラマンの三田川さん。戸田さんは喫茶店のマスターなんだけど、フランス料理のシェフだったんだって。で、鳶谷さんとふたりで作ってくれるって」

「そうか…凜には頼もしい応援団が付いているわけだ」

「うん、何かワクワクするね。最高の体育祭になりそうだよ」

満面の笑みを湛える凜一。この微笑を俺は一生守り通したい。

翌日、準備があると朝早く凜一を送り出す。思ったとおり一点の曇りもない秋晴れ。凜の晴れ舞台には相応しい。

開会式に合わせて高校へ出かけた。歩いて10分程度で運動場へ着く。すでに沢山の生徒の家族で観客席は埋め尽くされていた。

生徒の応援席も本格的に足場を組むし、ベニヤ板に描かれた横断幕もその頭上に掲げられる。勿論俺にも経験はあるが、小、中学校とはまた違った雰囲気だ。

暫く後ろで様子を伺っていると鳶谷さん達の一団を見つけた。

近づいて声を掛けた。鳶谷さんは俺を見て一瞬ポカンと口を開いた。

「…慧一くん、来てたのか？まさか…コレを観る為？」

「その台詞、鳶谷さんにそっくりお返ししますよ。赤の他人の為に朝早くから応援に来てるじゃないですか。大勢引き連れて」

「ああ、こいつらの事？みんな凜一が可愛いんだよ。あんなシロモノは滅多にいない。可愛がってやらなきゃ罪ってもんだろ？」

「…兄としては非常に複雑ですがね」と、見るからにイロモノの皆さんを横目で見つつ、多少引きつった笑いを返した。

「メインは応援合戦だが、それは午後からだろ？それまで俺達も青春時代に帰って学生の気分で楽しもう」

「…一緒にしないで下さい。俺はまだ学生ですよ」

「ああ、そうだったね、ゴメンゴメン」

少しも悪びれていないクセに、全く嫌味がないからなあ、この人は。

昼食時間になり、生徒達が散り散りになる中、凜一と合流し、運動場の隅に先にでかいシートを敷いて手を振っている鳶谷さん達のところへ向かう。ふと凜一の後ろに並んで歩く二人連れに目をやった。

「凜、この方達は？」

「あ、慧は初めてだったよね。ほらお世話になったって前に話したことあったでしょ。美間坂さんと桐生先輩だよ」「なんで俺には先輩付け無しなんだ？」「まあ、いいから。宿禰のお兄さんですね。初めまして、桐生といいます。宿禰くんと同じ部活の「詩人の会」の部長をやっていました」「凜一から伺っていました。日頃離れて暮らしているので、しつけがなくてなく凜一が我儘にしていると思います。色々と迷惑をかけているかもしれませんがよろしくお願いします」「桐生先輩達はサテュロスにもよく行くんだって。だから

鳶谷さん達とも知りあいの。一緒に昼飯しようと思って誘ったわけ」「常連ではないのですが、たまに美間坂を連れ出したりしてな、真広」「俺の反対を押し切って行くっていうから付いて行ってるだけだ。あそこはゲイの溜まり場だから、安心できない」「…心配性の恋人を持つのも気が重い時があります」「千尋!」「さ、行こうよ、鳶谷さん達が先に弁当全部食っちゃうよ」

両脇にふたりの腕を抱えた凜一がふたりを引っ張りながら、手を振る鳶谷さんに向かって早足で歩いていく。

俺はその後姿になんとも言えない安堵感と少しの寂しさを感じてしまうんだ。

シートに座り、ノンアルコールビールをコップに注いでいると、聞きなれた声がする。

「盛り上がるのはいいですが、保護者の皆さん、学校でお酒は駄目です…って、慧一?」

「…」

振り向いたら紫乃だった。そりやここの先生だから会ってもおかしくないけどな。

「おまえ、なんでここに?…え?まさか、体育祭を観る為?」

「…悪いか」

「…マジで絶句…」と、言いつつ伊達眼鏡の奥がせせら笑っているのがわかる。ああ、どうせ俺は凜一バカだよ。

「凜一、こちらは?」と、機嫌のいい鳶谷さん。

「俺の担任の藤宮先生だよ」

「これはこれは先生、いつも凜一がお世話になってます」
立ち上がった鳶谷さんは紫乃の前で丁寧に頭を下げた。

「は?」

「凜一の親代わりの鳶谷誠一郎と言います」と、鳶谷さんは名刺入れから紫乃に名刺を差し出す。

「こちらの胡散臭いやつらは凜一の身内のオジサンみたいなもので

…」

「あら、マスターひどい！私は身体は男だけど心は貴婦人よ」

「はいはい、ミコシさんはステキなレディです」

「ちつとも心が込もってないわよ、マスター！」

「…なんでもいいですが、お酒は困ります」

「紫乃、これはアルコール0パーだから…」

「ご安心ください。それより、先生はまだお昼は？」

「はい、まだですが…」

「丁度良かった。さあさあ、ご一緒にどうぞ」

「「ええ？」」

…いいのか？と言う顔を俺に向ける。やめとけ！と目で合図したが、紫乃はそれを無視してさっさと俺の横に座り、鳶谷さんの継いだ偽ビールを美味そうに飲み始めた。

「なんで担任が生徒と一緒に飯を食うんだ？」

「いいじゃん。凜一の面倒は俺もみている。俺も身内みたいなもんだ。一緒に食う権利はあるぞ。…というか…なんかすごい弁当だな」

紫乃が目の前に並べられた料理を眺めて耳打ちする。

確かに弁当という枠を外れて…色んな意味で外れている集まりではあったからコレはこれでいいのかもしれないが…

さすがに本場で鍛えたという話だけあって戸田さんの弁当の中身はどれもこれも凝ったものだった。

「おにぎりにキャビアのコンソメジュレって…どんなメニューだよ」

「白子のムニエルも美味しいよ」「ローストビーフのサンドイッチは

グレービーソースをかけて召し上がってください」「高級食材てんこ盛りだな、おい」「…今時の運動会の弁当って半端ないんだな…」

「ここだけだと俺は思うが…」

小言を言いつつも食べる方の口も休んでいない紫乃に、先生として真面目にやっているのか多少の不安も隠せないが、とにかく凜一がくったくなく誰に気を使うでもなく幸せな表情で和んでいる姿を

確認できただけでも、俺にとっては今日ここに來た甲斐があると言
うものだった。

午後一番のプログラム、応援合戦が始まった。

凜一の黒組が始まるまで、自分のことのように心臓が高鳴って仕
方がない。

うまくやれるだろうか、失敗しないだろうか…まさにバカ親の極
みだ。

黒組の応援が始まる。

白袴に黒羽織に黒たすきを結んだ凜一たち応援団が和太鼓に合わ
せながら揃い踊る戦舞に観客席からも溜息が漏れる。

黒いたすきと鉢巻が風に靡き、砂が舞う。

音楽が変わり赤い扇を持った凜が中央で舞を始めた。

一つ一つの動きが凄烈であり、また妖艶でもある。

しなやかさと優美さ、そして荘厳な空気が辺り一面を包んだ。

俺は胸の震えを止めることができないでいた。

もし周りに誰もいなかったら感動に泣き叫んでいただろう。

…これが凜一なのか…

俺が育てたあの小さかった凜一なのか…

こんなにも美しく見事な羽を広げて…彼は飛んでいくのだ。

母さん、梓、空から彼の晴れ姿を見てやってください。

あなた達の愛した凜一はまさに選ばれた者だ。

頭上に黄金の冠をいただき、輝くおもては女神の様。

その背には玉虫色の6枚の翼がゆつくりと羽ばたき、今にも飛び
去ってしまうが如く。

俺には決して届かない。

その果てまで飛んでいってしまうのだ…

11（後書き）

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowseternal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

12 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凛一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

12、

体育祭が終わった後、凜一と連れ立って、打ち上げ会をするという鳶谷さんの店へ出向く。

楽しい時間というのは瞬く間に過ぎていくとはよく言うが、今日ほど時間が速いと感じた一日は早々あるもんじゃないな。

たいした気も使わずに心ゆくまでみんなと楽しんだ。

特に凜一の先輩であり、俺の大学の後輩となる桐生くんと凜一に関する話は興味深く、学校での凜一の様子を聞かされるのは楽しかった。T大の医学生であり、生徒会長でもあった美間坂くんも一見ぶっきらぼうではあるが、非常に信頼できる人物に思えた。

「凜は学校のことをあまり話さないからね。本当に真面目にやっているのかどうか…」

「宿禰は真面目ですよ。部活の詩人の会でも彼の詩の朗読の感情の表し方、抑揚は聞く者に感動を与えていましたからね。朗読って一見簡単そうだが、詩の意味するところを汲み取って、尚且つそれを言葉に乗せて発声するもんなんです。聞き手に訴えかけるといっているのは中々難しいんです。宿禰はそれを楽にやってのける。天性というものでしょうねえ」

「あれは目立ちすぎだ。もっと謙虚になった方が目をつけられなくて済むだろう」と、美間坂くんが眼鏡の奥から鋭い目つきで、奥の壁際で歓談している凜一を睨みつけている。

「真広がそれを言うの？…謙虚さなんておまえは持ち合わせていないものかと思っただよ」

慣れた面持ちで軽くあしらう桐生くんは、大人びた美貌の持ち主だ。

「俺は別格。天才だからな。宿禰は違う。あれはどっちかということ

天からの気まぐれな賜物だろうな」

「……」

美間坂くんの鋭い指摘に俺も共感する。確かに凜一は昔から他の者とはオーラが違っていた。

俺の欲目かと思っていたが、そうでもないのか。

美間坂くんが言葉を続けた。

「あれだけの容姿で、性格も貴重。まあ、天才ではないが稀に見る逸材だと思う。ただ……」

「ただ？」

「この先、彼がどう生きていくのかが……俺としては多少気になるところだね。道を間違えないといいんだが。あまり容貌がいいとそちらに気取られてチャンス逃がすこともあるからね」

「真広が他人にこれだけ関心を持つのは珍しいんですよ、慧一さん。それだけ宿禰は愛されてるということですよ。でも、だからこそその悩みも彼にはあるでしょう。僕らも完璧ではないですが、先輩として彼の力になりたいと思っています」

「よろしく頼むよ。あいつは危ういところもあるから、兄としてはひとりにしておくのは心配なんだ」

「宿禰の恋人がいることは？」

「聞いてるよ。水川くんって子でしょ？」

「はい、彼は非常に聡明で真面目な子なんです。堅物と言ってもいい。あまり心を見せない子だったのですが、宿禰と付き合うようになって、彼は変わりました。宿禰の陽性に惹かれたんでしょうか。明るく魅力的な性質が加わった気がします」

「水川は宿禰とは合わないと思ったんだが……俺の勘もたまには外れる。水川はともかく宿禰があいう子に本気になるとはねえ……」眼鏡のブリッジを上げながら美間坂くんはさも意外そうに言う。

「水川は芯の強い子だよ。宿禰は見かけとは違って軟弱なところもあるから、水川みたいな意思のある一本気な奴とは案外うまくいくんだよ」

「ああ、俺とおまえみたいな…って話」

「…違うけどな」桐生くんが少し呆れながら苦笑している。確かに凜一が言うように似合いのカップルには違いない。まあ、少し妬ましい感情もつつかれ気味にはなるけどな。

俺は明朝の飛行機で帰るつもりでいたから、自宅には戻らずにビジネスホテルに一泊しようと思ったが、鳶谷さんの好意に甘えて、凜一と一緒に都内のマンションへお邪魔することになった。

凜一は昼間の疲れからか、風呂に入って先に休むことにしたらしい。目を擦りながら一緒に寝たいと、我儘を言う。

了解して凜一を寝室に送り出した後、鳶谷さんが気の毒そうに笑う。

「凜は相変わらず慧一くんを困らせているんだな。いつまでたってもお兄ちゃんから巣立ちできないでいる」

「普段のあいっは大人顔負けのはったりをきかせたり、とても賢しい子だから、その反発なのかもしれない。逆に言えば、甘えたがりの雛鳥なんですよ。その原因を作ったのは俺だ…母は死に、父親は傍にいない。最愛の姉を亡くしたばかりの中一の子を俺は、捨てたんです。俺のエゴ、あいっへの肉欲が恐ろしくて逃げたんですよ。あの子はその事を恨んでいる」

「そのことについては慧一くんは十分購ったと思うがね」

「ええ、凜も許しています。だけどあの子を独りにしてしまったことで、あの子は孤独がどんなに寂しいものか身体で覚えてしまっている。だから…彼は自分を愛してくれる人を求めてしまう。俺が傍にいてしっかりと彼に家族の愛や信頼をいうものを与えてやらなければならなかったのに…凜には俺しか家族はいなかったのに…俺は気づいてやれなかった…俺は一生あの子の家族でいなくてはならない。恋人としてではなく、凜がどんなに傷ついても帰ってこれる家でなければならぬ」

「そこまで自分を犠牲にしなくてもいいと思うがね」

「凜にも言われましたよ。でも犠牲なんかじゃない。俺の凜に対しての感情や逃げた事、置いてけぼりにしてしまった事、それらすべてが一生の負い目になっているのだとしても、それさえもね…俺にとつては凜一を繋ぎとめている鎖なのかと思うと、繋がれていたいと願わずにはいられなくなる。根本的にマゾなのかも知れないですけどね」

自嘲する俺に鳶谷さんは目の前のワイングラスに二本目の新しいワインを継ぎ足した。

「俺とは違って慧一くんの場合は、決して報われない愛とは思えないんだが。前にも言ったが凜一が本当に求めているのは慧一くんだよ。あの子は本気で君を愛している…恋人がいようと、君に対する恋慕は本物だよ」

「…」

鳶谷さんの凜一に対する想いは俺とは違って穏健でありまた中庸でもある。そこまで行き着いたら俺もこんな俗な欲に溺れなくてもいいと思うが、凜一を観る程、本能が奮えて仕方なくなる。抑えが効かなくなるのは時間の問題だと俺も気づいている。

だから…

「…鳶谷さん、お願いがあります。あの子は…凜一は俺の想いに感謝している。そして凜はそれを知ったら俺を本気で求めてくるでしょう。それは愛じゃなく俺を慰めようとする気持ちからです。だから、もし凜からなにか相談を受けた時は…俺にはそんな気はないとはっきり言って欲しいんです」

「ちよつと待ってくれ！そんな役回りはゴメンだよ、慧一くん」

「あなたにしか頼めないことだから頭を下げて頼んでいる。兄弟同士愛し合う事自体が間違っているんだ。お互いが理解し合えばそれはそれでいい。でも、社会、世間はそんなことを許すほど優しくはないでしょう。俺と愛し合っても凜一に得はない」

「だとしても、それで凜一は納得しないだろう。凜自身が君を求めているのは確かなんだから」

「それでも…仕方がないと…そうしなけりやならないと、説得してください。お願いします。俺たち兄弟がこれから先もずっと家族であり続ける為にはそれしかないんです…俺自身が…耐えられなくなってしまう前に、諦めさせなきゃならない」

俺の凜への想いを断ち切るには、この人の力を借りるしかない…

鳶谷さんは納得のいかぬ表情で黙ったまま、俺を見つめ返している。

12（後書き）

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowsetter.nal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

13 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

13、

「今日一日の凜一を見てはつきりわかったんです。凜一を輝かせるのは俺じゃない。鳶谷さんや学校の仲間や恋人…俺以外の世の中のすべてが凜一を未来に歩ませる力となるんです。俺は後ろから支える兄であるべきなんだ。それ以上のものになる必要はない」

「…」

「俺では駄目なんだ。俺は凜一を束縛してしまう。誰の目にも留まらぬところへ隠して、彼の輝きをもぎ取ってしまう…それでは凜一の幸せは掴めない。彼は俺の手から離れて生きるべきなんです。」

俺の就職先ですが…凜一にはまだ言ってないけど、日本の大手のゼネコンに内定している。でも仕事先は向こうになると思う。たぶん日本には戻れない。だから俺も悩んだんだが…卒院したら一緒に暮らそうと約束していたので…でも、吹っ切れましたよ。凜一は俺を超えていかなきゃならない。その為には…ある程度の距離が必要なんだ。あいつが俺を求めるのは、あと一時だと思っんです。大人になれば凜は俺の手から離れる。だから…その時の、それからの未来の為にも俺たちは兄弟のままでいなければならぬ…」

俺は目の前の鳶谷さんではなく、自分自身に言い聞かせるように、決意をまくし立てた。順繰りに整理して自分を納得させなければ凜への感情を抑えきる自信など湧いてこない。

「…凜一への想いを一生胸に抱えたまま？」

沈黙したまま俺を見つめている鳶谷さんが、やっと口を開いてくれた。

「ええ…時間が解決してくれることを望みたい。鳶谷さんの域にまで到達できればいいんですけどね。ひやかしではなく心からそうなればいいと願っているんですよ」

俺は残ったワインを鳶谷さんのグラスに注ぎだ。鳶谷さんはニコリと笑い口調を変えた。

「いつそ、俺と恋仲にでもなるかい？」

「はは…それは無理ですね。俺は下になるのは真っ平だし、鳶谷さんを抱きたいとも思わないから」

「それじゃあ、あの…ほら、凜一の担任の色男、君の元恋人とヨリを戻したら？」

「冗談言わないでくださいよ。凜一への想いの捌け口が紫乃じゃあ、あんまりでしょう。それじゃなくても彼には随分酷いこともしてきたから…恨まれても仕方ないぐらいなんだ」

「じゃあ、俺がその紫乃くんを頂こうかな。報われぬ宿禰兄弟への悲恋を夜毎語り明かすうちに、いい感じに…ってな具合にさ」

「…俺をひとりにしないで下さいよ。鳶谷さんと紫乃がくっ付いてしまったら俺は誰に愚痴を聞いてもらえばいいんですか？」

紫乃が鳶谷さんとは？…考えられないこともないと思った。目の前でふたりにいちゃつかれたら、俺は相当に落ち込むだろうなあと思像して、また自分に呆れた。俺はエゴが強すぎる。

「…まったく、仕方のない兄弟だなあ。縁もゆかりもないのにここまですぐ関わらせてくれて、ありがとよ。わかったよ。ふたりの行く末は俺が最後まで請け合いますよ」

「鳶谷さん…鳶谷さんの人生に俺たち兄弟のいざこざを巻き込んでしまったことを本当にすまないと思っています。この恩をどうやって返せばいいのか…俺には思い浮かばない」

「恩を売る為におまえらと付き合っているわけじゃないさ。俺もいい歳だし、関わるのは嫌いじゃない。今までは正直生きていくのに独り身が楽だし、抱える荷物は少ない方がいいと信じてきた。でもな、おまえらと関わっていると…つまり家族でもなく友人という関係だけでもない…普遍的な愛情って奴を通わせれる重さを味わっているんだよ。俺はこういう繋がりには何か運命を感じてしまう。俺

にとってそういう人間は君らの他にひとりしかいない…俺の従兄弟だけだね。最も信頼する奴。そのうち紹介するよ」

「ええ、楽しみにしています。それと…凜一の分もお礼を言います。ありがとうございます。いつかきつと…この恩を返せるように、良き未来に繋がるように、生きてみせます」

言いたい事を鳶谷さんに打ち明け、吹っ切れた俺は、その後すぐに休む事にした。

ゲストルームに行き、ベッドに眠り込んでいる凜一の様子を伺った。暗闇に慣れた目が凜の整った横顔を確認できた。

窓からの月明かりが凜の頬を照らし、長い睫の影がくつきりと浮かんだ。

よくもここまで出来た造形に生まれついたものだ…これを産んだ母は凜一のこのような姿を生前に思い浮かべたことがあるのだろうか…

良く似ている兄弟だと言われたものだが、陰と陽の違いが俺たちにはある。それは俺が望んだ事だった。この子の影になりたかった。いつまでも彼と一緒にどこまでも歩みたかった。

「凜…」

傍らにそっと身体を沿わせ、凜一の背中を抱いた。

こうしておまえを抱いて眠ることは、これからはできないかもしれない。

そう考えると、とても…寂しいよ、凜。

頬を撫で前髪を掬って額にキスを落とした。

「愛してる。いつだっておまえの傍にいる。俺のすべてをおまえにやるよ。誰よりも強い愛でおまえを守るから…どうか、輝きを失わないでくれ…」

そのまま一睡も出来ずに凜一の寝顔を見つめたまま朝を向かえた俺は、凜一に気づかれないようにベッドを出ると出発の支度をした。鳶谷さんは先に起きて、俺の為に朝食を用意してくれていた。

どこまでもお世話になってばかりだと感謝する他は無い。

「凜一になにも言わないで行くのかい？眠っている間に慧一くんが行ったと知ったら凜が激昂する事間違いなしだな」

「ついでに宿める役もお願ひしますよ。自信がないんです。凜と別れるのはいつも辛くてね。泣かれるのはもっと辛い…」

いざ帰ろうとする時、寢室のドアが開き凜一が俺に駆け寄ってくる。

「もう、行くの？」

その顔を見ただけでたまらなくなる。

玄関で別れを告げようとすると、凜一は俺の肩に凭れ小さな溜息を付いた。

「慧…来てくれてありがとう…嬉しかった…いつまでも慧に甘えちゃいけないってわかっていているけれど…やっぱり俺には慧が必要だ…」

凜…俺の方こそ、おまえに依存している。おまえ無しでは生きていく意味を見出せないほどに。

キスを強請るその口唇にありつただけの愛を注ぎ込んだ。

愛しているよ、凜一。

俺たちの絆はずっと続いていくもの、そうだろう？

だから…だから俺の腕から飛び去ってもいいんだよ。

愛する

我が弟よ…

13 (後書き)

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowseternal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

14 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

14、

シカゴの空港に降り立ち、アパートに帰り着くとすぐに携帯が鳴った。

鳶谷さんからだった。

俺がマンションを出た後、鳶谷さんは凜一から相談を受けたそう
だ。

それは懸念していた内容だった。

凜一は俺に情欲を持ち、俺と愛し合いたいと願っている。だが、
鳶谷さんは俺が頼んだとおりに、俺には凜一を抱く意思がない事、
これからもずっと兄として見守っていくという事を伝え、凜一もそ
れを受け入れたのだと…

俺は凜一が俺を欲しがっているという、愛しているという事実
に陶酔と罪悪感を一度に覚え、眩暈がした。

ソファにやっと腰掛け、痛む胸を押さえ、大きく息を吐いた。

「…凜一の様子はどうでした？」

それが一番心配だった。自棄になってしまわないか、変なことに
巻き込まれないか…

鳶谷さんがいるとはいえ、いつも目を光らせてはいられないだろ
う。

『どうでしたじゃないよ。凜一のあんな…かわいそうな姿、見捨て
てなんかおけるかよ。俺が抱いてやりたくなるところだぜ…酷過ぎ
るよ。慧一くんだって凜一のあの顔を見たら、固い決意も溶けてしま
うだろうよ』

「…すみませんでした」

『とにかく君に頼まれたことは遂行した。ここからは俺のやりたい
ようにやるよ。俺だって凜一の幸せを望んでいる。それが何かを俺

なりに探してやりたい。異存はないだろ？」

「勿論です。あの子が本当に頼れるのは鳶谷さんでしょうから」

『…本気で言ってるのか？…だとしたら、君は凜一をわかっていないって話だ、慧一くん。俺はこの件に関しては不本意極まりないんだからな』

鳶谷さんの怒りの言葉に返事は出来なかった。

鳶谷さんの言うとおりだと俺もわかっている。

たかがセックスだ。兄弟であっても愛し合っていれば間違いではないことぐらい俺にだってわかってる。

だが…それでも…それがあの子の心のどこかに黒い染みを残すならば、それを落としてはいけない。

携帯を切った後も、胸の痛みは消えなかった。

今となつては、あの子が俺を愛していることより、あの子を泣かせてしまった事が酷く苛まれた。

あの子を悲しませるようなことは二度としないと誓った筈なのに…と、思うと己が悔しくて情けなくて…いつその事、凜一の望どおりに抱いてしまえば良かったのか…

もう、ずっと前から…あの子が色々な奴と経験する以前から、あの子と繋がり、俺だけの恋人として安心を与え、凜一を孤独にしないかったなら、こんな不毛な恋模様に惑わされないで済んだのだろうか…

もとより一番心配なことがあった。

凜一は拒んだ俺を憎んでしまわないだろうか…

4年前の苦い別れを再び繰り返すわけにはいかない。

俺たちが求められないのは肉欲であって、精神的な愛ではないばすだ。

勇気を奮い立たせ、俺は凜一にEメールを送った。

無事アパートに着いたという報告と、体調を案ずるだけのいつものおりの内容だったが、返事が来るまでは気が気ではなかった。

その晩に返信が来た。

彼のメールもまた、普段と変わらぬ変哲もない文章に綴られていた。

ただひとつ今までとは違っていた記述があった。

いつもの「慧」という俺への呼び名が、「兄さん」に変わっていたのだ。

そのたった一文字が、俺には重い十字架の様に見えた。

それは決して尊いものなんかではない。

燃やし尽くして灰にしまいいたい程に……ただひたすらに憎かった。

NK建設に内定が決まった事はまだ家族の誰にも告げておらず、教授と幾人かの友人だけの知るところとなっていた。

ジャンなどは「ケイイチは総合複合体の大企業より、小規模でデザインプランニング重視のオフィス向きだと思う」と、反論する。

「俺もそう思っているよ。まあ、4、5年は研修だと思ってゼネコンの中身を見学してくるよ」

「建築士と建築家の区別もわからない日本では、さぞ窮屈だろうがね」

「そう言ふなよ、ジャン。おまえこそ、親父の後を継ぎたくないと言いつつ、何年院生を続けるつもりだよ」

「そうだなあ、先の事は結婚して子供でも出来てから考えることにするよ」

ジャンには決まった許嫁が居る。ニューヨークで働いている彼女の元へ、毎週末律儀に出かけている。

「結婚はいつ？」

「来年。向こうの親が待ちきれないらしい。シーラはワーキングウーマンだからなあ、俺の方が尻に敷かれそうだ」

「それこそ思惑通りだろ？ ずっと院生でいりゃあいいさ」

「辛辣だねえ、なんか嫌な事でもあったのか？」

「……」

鋭いにも程がある。苦笑すると「ああ、わかった。リンイチが恋人でも作ったか？」と、おどけながら言う。

「……前からいたよ」

「じゃあ、リンイチに冷たくされた？」

「なんで俺の不機嫌が凜に関わるんだよ」

「だって、それ以外でおまえがぶちぎれるところを観た事がない」
「……」

卒院旅行と称して、三週間ほどかけて、独りで西欧の建築を見に行くことにした。

勿論凜一の興味をそそるであろう、教会建築の資料も集めておきたかったからだ。

俺の研究課題の環境デザインのコンセプトのひとつ、ランドスケープ都市を重点的に巡りながら、その土地の古の寺院に礼拝した。

だが、凜一に対する罪深さが少しは減るわけでもなく、神ではなく常に彼への崇拜と肉欲の塊が俺を支配している事実を突きつけられている気がして、頭を垂れる度に苦笑いが浮かんでくる。

天国行きは諦めているが、こう怯えているのではメフィストフェレスさえ伺いには来ないだろう。

せめてもの俺の主への貢物に方々のカテドラルをカメラに収め、メールで送った。

彼は絵文字で怒りながら「ニンジンばっかぶら下げずに、俺も連れて行け！」と、返信してきた。

ああ、連れて行くよ。俺たちがわだかまりのない兄弟になりたい
つか、その時にはきつと…

この古い幾層も重ねられた大天使が見守る寺院から、ふたりで夜
明けを見よう。

14（後書き）

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowsetter.nal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

15 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

15、

クリスマスには帰らなかった。

凜一とふたりだけにいる事に、俺自身がまだ冷静でいられるのか、また凜にいざ詰め寄られたらどうしたらいいのか…見当がつかなかったからだ。

だから親父達が帰国するのを待った。

両親が間にいるだけで空気が変わる、話す内容も変わる。俺たちの関係も変わる。

それくらいの道化役ぐらいは彼らに押し付けてもかまわないだろう。

正月の三日に鎌倉の実家に帰省した。

両親と凜一は温泉旅行からまだ戻っていなかった。

簡単に家事をひととおり終えて、洗濯物を片しに凜一の部屋へ行く。

相変わらず男子高校生としてはポスターひとつもない殺風景な部屋だ。

洗濯物をクローゼットに片付け、本棚の硝子の中にある写真を貼ったフォトスタンドを確かめようと扉を開けた。

大きなコルクマットには俺や梓、昔撮った懐かしい家族写真が何枚も貼ってある。俺はそれを見るたびに心の安らぎを感じる。

その横に新しいフォトスタンドが飾られていた。

手に取って見つめた。

凜一と一緒に写っている男の子は…凜の恋人の水川青弥…だろう。

鮮やかに笑う凜の傍らで、少し照れながら控えめだが嬉しそうに微笑んでいる。

眼鏡をかけた利発そうな割には、内気で温和な面差し。それでいて心の強そうな子に見えた。

凜一の恋人…わかつてはいるが喜ばしく思えるわけもない。

俺は写真から目を外し、元の場所に置いた。

別に今更落ち込んでも仕方がない話だってわかっているが…
本棚を閉め、何気なく本棚の横に立てかけてある額縁が目にとまった。

確かめるとB4サイズの額に入った一枚の絵だった。

凜一の顔を、色鉛筆だろうか…とても上手に描けている。右下に小さく*seiya*と描かれてあった。

そういえば、水川青弥は絵画の才能があると凜一がしきりに言っていた。

そうか…これが彼が描く凜一なのか。

> i 5 5 4 8 — 2 7 3 <

俺はしばらくその絵を見つめていた。

水川青弥への嫉妬心よりも先に、彼の凜一を想う情愛がその絵から満ち溢れていた事に、感動せずにはいらなかった。

彼は…水川青弥は、凜一を本気で愛している…そして、凜も…

それがこの「恋」の本質であるなら…俺が取るべき道は自ずと決まってくる。

俺は俺の役を果たすだけだろう…

三人はやつと夕方近くになって帰り着いた。

体育祭以来に見る凜一だった。

凜一は一言二言挨拶を交わすと、俺をしばらく見つめ、そして口をへの字に結んだまま自室に引き込んだ。

メールのやり取りでは、以前と変わらないと感じていたのだが、

リアルにはそうもいかないらしい…だが、夕食を囲んでの家族団欒…特に和佳子さんの存在は大きかった。おおらかで朗らかな和佳子さんの気質が、沈みがちになるうとした凜一の笑顔を誘っていた。勞せずして俺たちは表面上は仲の良い家族、兄弟の關係を取り戻すことが出来た。

お互いの奥底に潜む感情の扉を閉めたまま、この先どこまでこの兄弟の役を押し通すことが出来るのか…それは俺にもわからなかった…が、凜一もそれを果たそうとする決意だけは言葉を交わさなくとも表情で理解しえた。

翌日に両親は自宅を発つことになる事を知った俺は、当然ながら慌てた。

両親がいなくなれば俺は凜一とふたりきりになる。

お互いが気持ちを悟っている今、もし、気まずい…俺にとっても凜一にとっても不可抗力の事態が起こったら、俺はどうすればいいのだろう。

そればかりが頭の中を支配する。

俺の休暇はまだ十日ばかりある。

両親を見送りつつ、取敢えず様子を伺って、折を見て雲隠れしようと思論んだ矢先、凜一が熱を出し倒れてしまった。

しかし、俺にとっては天の計らいにも思えた。

ベッドに寝込んでしまった凜一と看病人の俺では、甘いムードになることもないだろう。

俺はどこかでこの凶事に安堵していた。とはいえ、高熱で苦しむ凜一を見るのは、たまらなく可哀相で辛い。

ハアハアと身体全体を揺らし、苦しそうな呼吸音に混じって、苦しい、きついと呻く。

病に罹った際の凜一の姿は幼い頃から十分に見慣れているつもりだったが、これほどまでに辛そうな姿を見るのはあまりにも久しぶ

りすぎて、感覚がわからなくなってしまった。

十二月にインフルエンザに罹ったと凜一は言ったが、その時も一人ぼっちでこんな風に苦しんでいたのかと思うと、罪悪感に囚われてしまう。

身体はどこかを触っただけで火傷するほどに熱いのに、「寒い、きつい」と繰り返す。

部屋を暖め、毛布を重ねても身体の震えは止まらない。

「凜…大丈夫か？」

問いかけると、凜一はうなされるように「慧…苦しい、助けて」と言う。

手を取って握り締め励ます。

「凜、俺はここにいるから。ずっと傍にいるから、しっかりしろよ」

ふと、凜一はうわ言を言い始めた。

「梓…行かないで…僕をひとりにしないで…」

高熱の所為で幼い頃の記憶を手繰っているのだろうか…

凜は涙を溢れさせて、言葉を続けた。

「慧…ひとりは嫌だよ。いい子にしているから、どこにも行かないで…」

「…」

「…」

「愛してる、慧…」

「凜…」

どうしようもなく握り締めた手に、一層強く力を込めた。

すると凜一は瞼を上げ、空ろな目を俺の方に向けた。

「慧、愛してるのに…何故、俺では駄目なんだ？」

そう呟き、また目を伏せ、「寒い」と、苦しみだした。

何故？…何故…兄弟だから、俺たちが血の繋がった兄弟だからだ。

だがそれが一体なんの罪になる。

これほどまでにお互いを求め合う者同士、愛し合うのは自然の摂理ではないのか…

今なら俺は凜一を…凜一のすべてを手に入れることが出来る。

俺は凜一の熱い身体を布団の上から抱き締め、その頬に口唇を寄せた。

「凜…俺がおまえのすべてを奪っていいか？恋人のように愛し合う者として、一緒に生きていくと誓ってくれるのか？」

その耳元に囁くが、凜一の返事はなく、ただ「助けて」と。

「ミナ、助けて、くれ…ミナ…」と、繰り返し恋人の名前を呼んだ。

凜一から、ベッドから俺は離れた。

もう、諦めろと囁く声が聞こえた。

それが天使なのか悪魔なのかはわからない。

はたまた混乱の神か。

ならばいつそ俺の頭を狂わせてはくれないか。

この子を汚さないように、愛と嫉妬と憎悪の鎖で俺を縛り付けてくれ。

三日後、凜一はやつと平熱を取り戻しつつあった。

部屋に食事を持っていくと、ベッドで寝ていた凜一が嬉しそうに起き上がった。

病み上がりのやつれ具合がいい按配に作用してか、凜の色気が一層際立ってしまい、俺は目のやり場に困ってしまう。

熱が出てからはまともに食事も取らずじまいでいた。

こいつは拒食症の前例があるからと心配したが、土鍋で炊いたおかゆをよそってレンゲを差し出すと、美味そうに口に運んでくれた

ので一安心した。

「やっぱりおかゆには梅干だよ。うまい」

「この梅干は…市販ものじゃないな」

「うん、9階の中木さん、おじいちゃんとおばあちゃんの二人暮らしなんだ。そのおばあちゃんから頂いたの。毎年沢山作るからって」

「そうか。お返しはしたのか？」

「時々話しに付き合っただよ。喜んでくれるし、こっちは夕食にありつける」

「…抜けぬけと言うなあ」

「いいじゃん。持ちつ持たれつだよ。それより…俺、熱に浮かされて変な事ゆってなかったか？」

「…言ってたよ」

「なんて？」

「梓と俺の名前を呼んでいた。苦しい、助けてって」

「そっか…やっぱりいざとなるとどうしてもふたりに頼ってしまうんだね。こんなじゃ梓も成仏できないよね…」

「別に…いいさ。必要とされるうちが花だと、梓も喜んでるさ」

嫉妬という感情が、凜一が恋人の名前を呼んでいたことを俺に言わせなかった。

罪悪感はまだで沸いてこない。

それよりも奇妙な恍惚感さえ覚える始末だ。

これとよく似た感情を思い出した。

まるで交じり合ったオイルの万華鏡。

僅かな光を得た薄暗い闇の中でゆっくりと蠢き、不可解な形を繰り広げる。

気味が悪いと感じながらも、決して目を離すことが出来ないあの文様に…

15（後書き）

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowsetter.nal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

16 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

16、

その夜は天中に月暈げつうんが美しく広がっていた。

明日は雨にでもなるのかと、ベランダで少し霞む大三角を眺めた後、凜一に呼ばれ部屋に戻った。

「お先に風呂終わったよ、慧、どうぞ」

「ああ…湯冷めしないようにしっかり温まっておけよ」
「うん」

凜一をリビングに置いて、俺は風呂に入った。

こここの所、俺たちの関係は病人と看病人の構図ができあがり、昔の平穏を取り戻したように思えた。普通の兄弟としての距離が取れているというか、ヤバイ雰囲気には全くなっていない。

平穏、普通の兄弟…努力は必要としてもその距離を保つことが大切なかもしれない。

その時まで、俺は余計なことを妄想する感覚さえ、忘れていた。だから…風呂から上がった後、パジャマ姿の凜がうつろくのを見てまた風邪がぶり返さないか…それだけが心配で何の迷いもなく彼の額に口唇を充てた。それは幼い頃から、凜一の体温を測る自然の行為だったのだ。

だが、口唇に触れた瞬間、凜一の身体がビクツと震え、全身が硬直していく様子がはっきり見えた。

俺はしまったと後悔した。何のたくらみもない、予想もしていないふれあいだった。

凜一の欲情する瞬間を俺はあからさまに目の前に差し出されてし

まった。

凜は…その感情を身体中から舞い上がらせ、俺の身体に激流のごとく注ぎ込んでいく。

俺には全く遮る術はなかった。

凜の熱い欲情…と、いうものを俺の身体が認知した時、俺自身さえそれを払いのけることが出来ないほどに…歡喜に奮えていた。

淫らという言い方は相応しくない。得も言われぬ程に官能的に凄艶でありながら、生命力を迸らせた彼の表情はきわめて清冽に輝いていた。

パジャマの上からでも凜一を十分に確認できた。それは俺も同じであり、凜の指がおそろる俺に触れた時、俺は声を上げそうになった。

お互いに向かい合い、立ち竦んでいた。

俺より少し背の低い凜を斜め上から見る。

凜の長い睫が俺の立ち上がったものに触れている己の指を凝視している様があった。

それだけでイキそうに成る程に熱く感じていた。

バカなっ！こいつは血の繋がった弟だ。そう何度も何百回も言い聞かせてきたはずだ。何を今更、これくらいでたじろぐ必要がある。手を払いのけて、冗句のように「お互い発情するのが早いな。凜はともかく俺もまだ若い証拠だな」と、かわせばいいことだろう。

あの子は必ず君を欲しがる日が来るよ。その時君は抗うことができるのか？

いや、君自身でさえ止められないと思うよ

あの子が本気で欲しがったものは確実に掴み取るだろうからね

過去の言葉が俺の頭を駆け巡った。

俺はその言葉が現実に降りかかることを予想していなかったか？
それをかわす術を学んでいなかったのか？

俯いていた凜一がゆっくりと…スローモーションのように俺の顔を見上げた。

さっきよりも艶かしく彩られた表情は欲望に陶醉したまま、緊張に強張っていた。その瞳に写る俺もまた、同じような顔をしている。

「慧…慧、俺…」と、赤い舌をちらつらせながら吐息のように俺を呼ぶ。

凜の手が、一層強く俺のモノを掴んだ瞬間、俺はその手を払いのけ、凜の肩を押しやり、リビングへ向かって廊下を急いで歩いた。

「慧、待ってくれ」

まだ艶を含んでいる声で俺を呼ぶ声は無視した。

リビングのドアを開ける。自室にこもれば、中から鍵をかければいい。

一晩経てば、こんな些細な事なんか綺麗さっぱり忘れて、元の兄弟に戻るんだ。

リビングの端にある自室のドアに急ぎ足で向かい、ドアに手を伸ばした瞬間、先回りした凜一はドアに立ちはだかった。

「凜、どかないかっ！」

「いやだ！なんで逃げるんだよっ！」

「ロクな事しか起こらないだろう」

「慧は…慧は俺に欲情してるじゃないかっ！それがロクな事なのか？」

「ああ、そうだ」

「慧は俺とセックスするのが怖いだけなんだ」

「ああ、怖いね」

「俺が弟だから？俺に恋人がいるから？世間体が怖いから？親に示

しがつかないから？社会人として生きていくにはデメリットが大きすぎるから？」

「そうだよ。今言ったことがすべてだろ。俺たちが愛し合っても何の、なにひとつ希望はない。多くの人を混乱、絶望、悲しませるだけだろう」

「それが俺たちふたりの間において、何の意味がある。俺は慧を愛している。欲しいと思っている。慧だってそうだろう？…今まで自信はなかったよ。俺が本気で慧に求められているのかどうか確信できなかったんだ。だけど…慧はさっき俺に欲情したじゃないか。俺を抱きたいって思ったんだろ？俺とセックスしたいって願ったんだろ？その感情のどこに後ろめたい、やましいものがあるんだ。…どこにもない。俺たちの間にあるのはお互いが欲しいという感情だけだ。違うか？俺はこの世界のどこに立っても宣言してやる。俺は宿禰慧一を愛していると」

言い放った凜の言葉に俺は心酔した。このまま死んでもかまわないと言うほどに感極まり絶句した。

凜一の口唇が俺の口唇に触れ、そのまま深いエクスタシーを味わい続けた。

無限と思う程に、魂は飛翔する。

17 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凛一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

17、

今まで生きてきた俺の人生において、これほどの歓喜を味わったことはなかった。

考えもしなかった。

俺の命を賭してもいいと思える最愛の弟、凜一が俺を「愛している」と、声高らかに叫ぶのだ。

何ひとつ混じりけもない純粹な愛を、彼は俺に誓うのだ。

これ以上の喜びがあるだろうか…

これまでの孤独な欲求、陰鬱としたまま浄化できる事のない独りよがりな慈愛でさえ俺には一欠けらの慰めにもならなかった。ただ、凜一の笑みが輝きが俺の生きる糧となっていた。

今、凜は俺に真の愛をくれた。

これから先、凜が何を選ぼうとも、俺はもう…

凜一の口唇がゆつくりと離れた。

一旦おさまった情欲が再び燃え上がるのはわかっていた。

「慧…俺と寝てくれ。愛してくれるのなら、俺を抱いてくれよ」

瞳を潤ませた凜一が、なにか大事なものを強請るように、すぐるように呟く。

「凜…」

「ずっと愛していた。わからなかったんだ。いくら誘っても慧は俺にそういうそぶりも見せてはくれなかった。慧は昔から俺を欲しがっていたんだよね。だったら…」

俺の背中に回された凜の両手の指が食い込むほどに力を込めているのが、服の上からでもわかった。

「凜」

「頼むから寝てくれ。慧が欲しいんだよ」

凜が本気で俺を求めている…これほどの喜びを感じながら俺にはどうしても、その要求を行使することが出来ない。

「凜、聞いてくれ。俺はおまえを愛しているし、欲しいと思っているよ。でもセックスはしたくないんだ」

「なぜ？」

「…」

何故？…いつもそこだ。なぜ俺は、凜を抱けないんだ。これほどまでに執着し、その肉体を渴望しているはずなのに、何故手が出さない。

それは…それは凜一にとって俺が…

「そう…どうしても慧が俺を抱きたくないって言うのなら…もういいよ」

黙ったままの俺を見て答えを見出せないと思ったのか、凜一は俺の身体を押しやり、離れた。そのまま踵を回してリビングから出ようとする。

俺は凜の腕を掴み、問いたです。

「凜、どこに行く気だ」

「慧が抱いてくれないのなら、他の奴に抱いてもらう」

「バカな…」

くだらん事を言い出し始めた凜を俺は必死で止めにかかる。第一パジャマ姿で外に出る気か？病み上がりなのに。そう案じてもこいつは人の話なんか聞きやしない。

「凜、まだマトモな身体じゃないんだ。外出なんて許さない」

「勝手にするさ。誰でもいい。相手なんか関係ない。街に出て立ってりゃ、俺とセックスしたいっていう奴には事欠かないんだから。そしたら俺は相手を慧だと思って…慧とセックスしてると思ってるだけだ。そうすりゃ、慧も俺を抱かなかったことを後悔するだろう」

「いいかげんにしろ！」

「どっちがだよっ！慧は、俺を愛してるって言ってるクセに…俺になにもくれない。こんなに欲しいって言ってるのに…どうして…」

「凜…」

壁に凭れて嗚咽する凜一を見たとき、どうしようもないほどに俺はこれを俺のものにしたいという独占力、嗜虐的な欲望に溺れた。もとより…こいつが他の誰かに抱かれている様を浮かべた時点で嫉妬と憎悪の感覚に俺自身が支配されつつあった。

今ならこいつを抱くくらい簡単にやってのける。だが、他の奴に抱かれるというこいつを簡単に許す気にはなれなかった。

俺は片腕と身体全体で凜一の両肩を壁に押さえ、両足を動かないように固定させた。

残った右手で凜一の顎を引き、短いキスをする。凜は不可解な顔をして、俺を見上げた。

構わずに、そのまま右手はシルク地のパジャマの上を這わせ、ズボンの中に滑り込ませた。

凜一自身のすでにたかぶっているモノをやや乱暴にまさぐった。

「いやだ、慧…」

見開いた目で俺を責めながら、凜は身体を擦って逃げようとする。無理だ。力も上背も俺のほうが勝っている。

身体の節々を使って凜の肩や足の付け根を押さえ込むと、凜は観念したのか、壁に凭れたまま嗚咽を繰り返す。

しばらくしゃくりあげていた声が呼吸が荒くなると共に次第に喘ぎに変わる。

その凜の逐一様を俺は恍惚として見惚れていた。

凜を文字通り俺の手でイカしてやるという行為が、俺を快楽の境地へいざなった。

動きを緩めず、一層激しく擦りあげると、背中をしならせた凜は俺の名前を小さく呼び、そして身体を震わせ達した。

解放された凜の弛んだ身体が俺に凭れた。俺は凜を抱きかかえるようにしてソファに運び、横に寝かしつけた。テーブルの上からティッシュを取り、凜の放ったものを拭き取った。

凜はそっぽを向いて黙ったまま、されるがままになっている。

「寒くないか？凜」

自分の着ていたパーカーを脱ぎ、凜に着せてやろうと上半身を起す。

俺の首に腕を回し、顔を近づけたと思ったら、額をぶつけていた。

「よくもやってくれたな、慧」

「…」

怒りながら顔をしかめるが、その風情がどこか愛らしく思えて、俺はまじまじとその顔を見つめた。

「こんな風に自尊心を傷つけられたのは初めてだ。ムカついてる」

「腹が立って仕方がないのはこっちの方だ、凜。誰とでもいいから寝るなんて俺の前で二度と言っんじゃない。そんなことをしたら、本当に許さないからな」

「…わからないよ、慧の気持ちだ。それだけ俺に固執するのに、なぜ自分は抱かないんだよ。そんなに俺が他に奴と寝るのが嫌なら、慧が抱けばいいことじゃないか。秘密にしてりゃ、兄弟同士が寝たって誰もわからないし、傷つくこともない。何が慧を縛っているの？」

「…それを簡単に一言で言い表すことはできないよ、凜。でも本当に聞きたいのなら…とても長い話になるよ…それに、凜には聞かせられないような酷い想いも俺の中にはあるんだよ」

「それでも…俺は聞きたい。慧の想いを全部受け止めたい」

凜一の瞳は俺に少しの誤魔化しも許さないと告げていた。

俺は今まで自分の中に溜め込んでいた汚泥のような（勿論美しく

結晶したものもある）自分の欲望、感情を向けられた本人に晒す時が来たと、観念した。

凜一の告白で俺はもう十分に救われていた。ならば、俺も凜一に余す事なく告白するべきだろう。

それを聞いた凜一が俺に対する価値を下げようとも、告白した愛を取り下げようとも、一度与えてもらった言葉は俺の中では消えることはない。

クッションを枕にしてソファに仰向けになった俺は、自分の身体の上に凜の身体をぴったりと沿わせ、その背中をゆっくりさすった。空調も床暖房も寒いとは感じさせないほどの温度ではあったが、凜一の体調だけが心配だった。

ベッドに寝ても良かったのだが、凜一はこのままがいいと言う。

俺の背中に回した腕がきつく絡まり、解かせるもの気が引けた。

「寒くないね」と、確認した。凜は俺の肩に顔を埋め、うんと頷いた。

「凜：俺にとって凜はすべてだよ。光であり、唯一信じる者でもある。だから、俺は凜に告解する。そして凜は俺を裁く権利がある」「裁く？」

「ああ、これまで俺がおまえをどんな風に愛し育て…肉欲を持って求めてきたのかを、おまえに洗い浚い告白するから、それを聞いた後：おまえが俺を裁いてくれ」

「どんな話でも聞くよ。だって今の俺があるのは、慧が俺を育ててくれたからなんだ。それがどんな想いであっても、俺は慧を責めたりしないよ。」

信頼という重い枷は、欲望を抑える辛く苦しいものだと感じてばかりいた。だが、凜はそのすべてをすっぱりと俺に委ね、何をしてもいいと赦している。

その感情も肉体も、この世を生きる俺にとって、唯一絶対の聖域であることも知らずに…

> i 5 6 2 1 — 2 7 3 <

17（後書き）

次は凜一編へ飛びます。

並行して進んでいくので、だるいでしょうが、すいません。

3人三様の視点で書いてみたいのです。

18 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

18、

凜一の身体の重みとぬくもりをすべて受け止めた俺の身体は、俺の意思とは関係なく昂ぶりを感じたままだった。

それは凜一も同じで、こんなに発情しているのに一線を越えることができないという意義など、感情に生きるヒトには有るまじき辛抱強さだと馬鹿げた思いにも晒される。

別に貞節が清いとは一抹も考えていないものを、凜への欲望に対して自分の抑圧というものの定義に縛られている自分が悲しくも愛しく思えたりする。

告白を続ける俺の身体を抱きしめた凜一は黙って顔を埋めたまま、話を聞いていた。

時折顔を上げ無意識に頭を傾げる仕草がなんとも昔の凜の愛らしさを思い出させて愛おしくてたまらない。

生まれてからずっと凜一だけを見つめ、性欲で満たしたいと願っていた事を白状すると、凜は思いもよらなかったと驚きながらも、否定する事も嫌悪感を抱く事もせず、抱いて欲しかったと言う。

それは今の凜の感情であり、もしその時にそうしていたならば、今のふたりの関係は成り立たないと、俺はわかっている。

凜一はまだ17であり、孤独に慣れてはいても信頼される者らが彼を見守らなきゃならない頼りない子供なのだ。俺が鳶谷さんに話したように、凜一を欲しいと思っても俺が今凜を抱いてしまったら、凜の保護者ではなく、凜を束縛する愛人になってしまう。

そうなれば、凜の信頼する肉親はいなくなり、益々凜一は孤独になるのではないだろうか。凜の本当の幸福を守る為には、俺は凜の帰る家であり、守る者に徹していかなければならない気がする。

これだけ無邪気にすべてを欲しがる凜一を、俺は説き聞かせられるだろうか。

これだけ俺を強請る愛し子に…

すべてを捧げても惜しくないと願う弟に…

説得し続け、セックスをしたくない理由を説明しても駄々っ子のように凜一は俺にしがみ付く。

決して意思は変えないと誓っていても、黒まなこが溢れんばかりの涙で濡れていくのを見ると、抑えが効かなくなっていく。

凜一… おまえを抱きたくて入れたくて…

おまえのすべての肌を俺の口唇で封印したくて堪らなくて…

この身体はおまえを欲しがって、こんなにも奮えているんだ…

「…じゃあ、一生俺は慧を得られないのか？」

頬を伝う凜の涙が、決して絶望の涙にならない為に…

俺は誓う。

「もうすでに… 俺のすべては全部凜のものだよ。

おまえが生まれた時から、俺はおまえに取り憑かれるんだから。

おまえが大人になって… 俺の保護を必要としなくなったなら、その時、対等な者同志本当に手を取り合いたいと願うのか… 欲しいと望むべき相手なのか、考えて欲しいんだ。

俺も考えるよ。凜一を幸せにできるように…

光を目指すおまえの道標になりたい…

そっという人間になる為に俺は成長したい」

心からの願いだった。

心底愛するから、命を賭けて凜を守りたいから、俺はこれからも凜のためだけに生き続けるだろう。

「死ぬまで愛してるって誓ってくれるのか？」

「凜、言っただろ？おまえが生まれる前から、俺の愛情は凜にしか流れないように決まってるんだよ。一本の川の流れが海に注ぐようにね」

俺の誓いを聞いた凜はクスンと鼻を噉って、俺の胸に突っ伏した。髪を撫でながら慰めようとすると、凜はついと顔を上げ、俺を凄むように見つめた。

そして、小さく呟いた言葉は俺の宝物になる。

「慧が言つたとおりの慧からの一方的な宿命ならそれでもいいよ。でも俺は目の前に垂れた縄を必ず引き寄せる。手繰り寄せていつか全部俺のものにするから、待っててくれ」

心臓を鷲掴みにされるほどに俺は歓喜した。

「いつまでも待つよ」と、短く応える声が震えていた。

片道だけの愛では無いと知りえた俺には、これ以上の救いの言葉はなかった。

欲しがるものは手に入れるまで決して諦めたりしない、凜一の高慢さも自分への尊厳を持ち続ける資質も、これ以上にならないほどに尊いものを感じている。

凜…おまえが俺に手を差し出すその時、俺はおまえに傳くだろう。聖なる御使いの衣を纏い、貧しき心に零れるほどの愛欲を湛え、すべてを注ぎ込む…

やがて幼子のように寝息を立て、俺の胸で寝てしまった凜一を、自室まで抱えて運びベッドに寝かせた。

あれだけ欲情していた高ぶりなど、まるで無かったような顔をし

て無心に睡眠を貪っている姿を眺めると、なんとも困惑してしまう。
一体あれは夢だったのか、凜一の悪ふざけだったのか…明日になれば先程の誓い等、キレイさっぱり記憶から忘れ去られてしまうのではないか…

もしそうなたとしても…俺は忘れない。

凜の告白、俺を欲しいと心から望んでくれた事、未来への誓い…
そして何より…

俺は光を得た。

虚ろに瞬く幻想ではなく、この手に凜の愛を得たのだから。

18（後書き）

凛一編と行ったり来たりしております。

19 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

19、

翌日、凜一は昼近くになってやっと起きてきた。

ねぼけまなこで「おはよ」と、言う。

「朝飯は食うかい？」と聞くと、うんうんと頷いた。

なんとも愛らしい仕草で応える凜に見惚れた俺は、しばらく掃除機を止めて、寝ぼけた様を目で追った。

凜はソファに腰掛けるとそのまま横に寝転がってネコのように丸くなる。

昨晚ふたりで抱き合ったソファだ。

凜がそれを覚えているのか聞くこともはばかり気がして、俺は切りのいいところで掃除機を片付け、凜の朝食を用意した。

声を掛けるとソファで寝ていた凜は起き上がって頭を掻き食卓へ座る。

「いただきます」と手を合わせ、テーブルに用意した朝食を黙々と食べ始めた。

今日は恋人と初詣に出かける予定だったはずだ。

その事をわかっていないのか、はつきりしないから思わず「今日：初詣に行くんだろ？」と、声に出してしまう。

「…そうだった。昼飯一緒に食べる約束をしていたんだ」
間の抜けた返事にこっちも気抜けした。

この能天気めが。これじゃあ恋人の苦勞が目に見える。

玄関でハグを求めた凜を抱き、なんとなく心持ち悪そうな様子の凜を送り出した俺は、リビングへ戻った。

昨日の今日だから、さすがの凜も少しは後ろめたいのかもしれない。

少々気の毒とも思えるが、より以上にもつと挫^{くじ}ければいい、と薄情になる自分が可笑しかった。

洗濯物も干したし、掃除も完璧。

後は…いつ帰ってくるかわからぬ凜のためにカレーでも作っておくか…

それにしても今日はいい天気だ。

俺はさっきまで凜が寝ていたソファに同じように横になる。

視線の先の硝子窓から澄み切った山が見える。

昨晩はここで凜を抱いた。

入れてはいないが、あれはセックスをしたようなもんだ。

凜が俺に愛を誓ってくれたとしても、今現在つきあっている恋人との関係をチャラにしろと言う権利など俺にはない。当の本人が付き合いをやめるなどとは思っていないのだし、結局は本人達に委ねるしか無さそうだ。

どっちみち、凜が高校を卒業して、日本の大学へ行くとしても、

俺は傍についていることは出来ないのだから、頭ごなしに「別れる

！」とは、到底言えない。

肝心な就職の事もまだ話してはいない。

就職先は向こうでしばらくは帰って来れないと打ち明けたら、凜は怒るだろうなあ。

…今頃…凜はあの水川と言う子と仲良くデートか。

凜のことだ、昨日の腹いせにどっかのホテルで彼と抱き合うのだろう。

あいつはそういう奴だ。

恋人同士なのだから咎めることなどできようか…

想像したら穏やかではられない。

嫉妬心が渦巻いて仕方がない。

「ちつ、かつこつけないで、抱いておきや良かったんだ。あれだけ欲しがっていたのに、抱かなかったのは一生の不覚かなあ」

腕枕で天井を仰ぎ、呟いても返事はない。

「梓」

俺はとうに居ない妹の名を呼ぶ。

「ついに凜の奴に一切合財白状してしまったんだ。おまえへの約束を破ってしまったけれど…告白してすっきりしたよ」

天井のアルデコのシャンデリアは、梓のお気に入り、前の家のやつをこちらに移したんだ。

「なあ、梓。おまえは怒るんだろうなあ。俺を許してはくれないんだろうなあ。だけど凜は…俺を受け入れたんだ。梓、おまえに凜は渡さないよ」

俺の胸の中で俺を愛していると何度も言っただ。抱いてくれと懇願したんだ。

あのしなやかな肢体を俺は受け止めたんだ。

凜の白い肌、上ずった喉元、色を湛えた目、アレの感触が手に脳裏に張り付いて、思い描くだけで欲情する。

「俺は…凜が欲しいんだ。たまらなく抱きたい、入れたい。それが出来たなら、梓、おまえから殺されてもいい。俺は凜を犯したい…」
自分の下腹部に手を伸ばし、凜を思った。

きつと、今頃あの子とまぐわっているのだろう。

快楽を味わっているのだろう。

だけど、凜。俺はおまえに烙印したはずだ。

それを忘れるなよ。

凜、おまえは俺のものだ…

セックスをしなくても、凜一を犯すことはできる。

あれの中に俺を植えつけてやる。

その種が育ってあいつのすべてを俺で満杯にするんだ…

「凜っ……」

誰もいない昼間の部屋に響くのは、俺の喘ぎだけだ。

> i 7 3 4 6 — 2 7 3 <

20（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

20、

夕方、内定した会社から連絡を貰い、クライアントへのプレゼンテーションに参加しろと言う。

二日後に行くからと急遽明日アメリカに帰ることになった。

ひとりで適当に夕食を済ませ、明日からひとりになる凜一の食事を用意する。

困った時の夕食のカレーとは俺たちの間ではよく使う合言葉だが、失敗がない分、重宝している。

鍋一杯に作り置きをするが、ひとりで食べる凜一のことを思うと、胸が痛む。

俺はいつだって凜一をひとりにしてしまう。

置いていかれる辛さはわかってるのに、慰めてやることも出来ない…凜一を愛する資格なんてあるのかと、自分を呪いたくなる。

しかも就職したら、日本で一緒に暮らすと約束しておきながら、それさえ違えてしまう自分が情けない。

遅くなる事もなく帰宅した凜一の顔をバツの悪さにまともに見れず、カレーの鍋に集中しているふりをしていたら、凜一が身体を寄せてきた。

その身体を受け止め、優しく背を撫でた。

「…どうしたんだ？凜」

「あつちに…帰るんだろ？」

「…」

俺の肩に頭を載せたまま、そっぱを向く凜一がいじらしい。

髪に顔を近づけると家とは違うシャンプーの香りがした。

俺をこれだけ縛り付けておいて、自分は好き勝手に遊んでくるの

か…憎らしいにも程がある。だが、これがなによりも愛おしい凜一なのだ。そして俺はこれを置いて行かなきゃならないんだ。

この子に俺以外を求めるなど咎めることが出来るわけもない…

この子は残酷だ。

俺の恋焦がれる想いを知り、それを受け入れながらも俺に罰を与えるかのように、他の男と寝ることが出来る。

しかもそれは遊びではなく本物の恋だと打ち明ける。

俺が抱かない事へのあてつけのつもりもあるのだろう。

自身が情けないな。

一番欲しがっているのは俺なのに、おまえを抱くことが怖いなんて…さ。

しばらく会えないこともわかってるのに、その夜は早々にお互いの部屋へ引きこもった。

愛し合っているにも求め合っているにも、タイミングと言うのはいつでも難しいものだ。

昨日の今日なのに、まるで振り出しに戻ったかのように、背中を向き合っている。

振り向いて抱き合うのは簡単なはずなのに…

翌日、見送りについてきた凜一と出発まで会員限定のラウンジで過ごす。

凜は人目も気にする事無く、俺の肩に凭れ、手を絡ませた。

俺は気になってついいらぬ事を口走ってしまう。

「おまえ、恋人とも人前でこんな風に甘えてるのか？」

「え？ミナと？」

「…ああ」

「しないよ。ミナはシャイだし、人の目を気にするタイプだ。人目があると手を握るのさえ躊躇うからね。だから街中でミナと居る時はできるだけ普通の友人のフリをする。俺はどうでもいいんだが、相手が嫌がることをしないのが恋人としてのモラルだろ？」

モラルって言葉が一番似合わない奴が何を言う、と、俺は可笑しくなった。

「じゃあ…俺にはそのモラルって奴は当てはまらないのか？」と、言う、凜は目をぱちくりと驚かせ、

「慧が人目を気にするタマか？人前でセックスするのも平気な性質たむだろ？」

「おまえにだけは言われたくないよ、凜」

乾いた笑いで応えると、凜は顔を近づけ、

「俺は慧とだったらどこでセックスしても構わないけど。誰が見てようとも平気だよ」と、言う。

呆れて「育て方を間違えた」と、嘆くと、

「勿論慧一限定だ。だって生まれた時から俺はオムツからお世話になったんだからさあ、慧に何されようが俺は信頼を捧げて愛を誓うね」

「…口ばかり達者になりやがって…」

それから凜一は志望大学を決めた事を俺に伝え、大学に入学した後、留学すると言う。

俺は心臓の鼓動が少しずつ奮えを増していくのを止められなかった。

留学するって…その意味とは…凜…

夢から覚めるなと俺は目を閉じる。

夢ではないと耳元で凜一の声が響く。

「慧…今まで慧は俺を追い求めてくれたね。だけど、今度は俺が追いかける番だ。忘れないでくれ…」

凜の顔が近づき、俺の口唇が新たな奮えに歓喜する。

このくちづけの重みと熱さは一体なんなんだ…
積み重なった過去の欲望の重荷なのか、未来への果てのない熱望
なのか…

…慧と共に生きていく…

くちづけの正体など、俺にはわからない。
だが、我が腕かいなに抱くこの愛する者を、俺は離すことなどできはし
ない。

永遠に…

20（後書き）

凜一編、水川編と行ったりきたりしております。

「オレミユス」はこれで終わりです。

次章までお待ち下さい。

「ペンテコステ」 1（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

「ペンテコステ」 1

> i 8 1 4 8 — 2 7 3 <

「ペンテコステ」

1、

天から聖霊が降る日、

約束の聖霊に満たされた我々は、
真の交わりを得る

あなたはいつも私の傍に居た。
ならば命に至る道を示せ

長年の学生身分からやっと卒業。

変則的ながら日本系企業へ就職した俺は、ニューヨーク支部へ配属された。

一月も半ば、日本から帰ると研究室への挨拶もそこに引越し、会社や関連企業への挨拶回り、それが終わるとすぐにプロジェクトへの参加を求められ、休日も返上しなければならぬほどに時間に追われていた。

もとよりこの企業を望んだのは、遠からぬ未来、小さくてもいいから自分の設計事務所を持つその足がかりとして、現場の実態を知るためであって、ここに落ち着こうとは考えていなかった。

が、給料を貰う側としてはそれなりに自分の実績や惜しみない労力は果たすつもりだ。

そんな中、凜一が春休み中に引越したばかりの俺の家へ来たいと言う。

まだ落ち着いてもいないのに凜一が来ても相手はできないと断った。

『どうしても駄目？ 慧に会いたいんだ。… すぐ会いたいんだもん…』

携帯からの涙まじりの声が聞こえた。

ばか、そんな泣き方されたら断れないのはわかってるだろう… あっけなく承諾させられた愚かな兄貴は、その日を待っていそいそと弟の待つ空港へ愛車で迎えにいく羽目になる。

空港で待つ俺に走りこんで駆け寄る凜一が愛おしかった。胸に飛び込む細い身体を抱き締めた。

胸に顔を埋める凜一が今までとどこことなく違ってみえた。甘え方に色気がある。

本気で俺を陥落させる気なのだろうか…

そんなことをしなくても、俺はおまえのものなのに… と、背中を撫でてやった。

ユニオンシティのアパートメントの広さに凜一は驚きの声を上げた。

このテラスハウスはNKCの社宅になっており、家族持ちも多いから住宅としても申し分ない広さなんだが、独り身の俺にはその広さが帰ってうらめしくなったりもする。

だからと言って、凜一以外の誰かを入れる気にもならないのだけれど…

リビングの他に部屋は三つほどあったから、空いていた部屋を凜一に案内すると、「慧と一緒に寝たかったのに…」と、凜は口唇を尖らせた。

こいつは本気で俺を誘惑する為にここまで来たんじゃないだろうか… と疑うが、今はこっちにその余裕はない。

とてもじゃないが、本気で迫ってこられたら、論す気力が持てない。

だから、仕事も極力残業を宛がい、夜遅く仕事から帰ったらできるだけ凜一とは顔を合わせないようにした。

凜の方はさすがに俺のくたびれ加減に同情したのか、家事をキチンとこなし、毎日の食事も俺独りの時よりグンと充実したものになった。

聞けば近所の奥様方と早速仲良くなり、色々のご指導を受けているらしい。

とことん要領のいい奴だ。

「気をつけるよ」

「何に？」

「色んな奴がいるんだから、へらへら愛嬌振りまくんじゃない」

「…相変わらず心配性だね。俺、東京の下町に行っても結構ケンカ強いよ」

「バカっ！一度大怪我して懲りたんじゃないのか？それ以上傷を増やすなよ」

こいつは高校に入学したての頃、中学の時の奴らとケンカして腕を5針ほど縫っている。

その痕はほとんど消えかかって、目を凝らして探さなきゃわからないくらいに薄くなっただけだ、あの時は本当に肝を冷やした。

それじゃなくてもこいつには色々と身が縮む思いはさせられているが…

あの月村の事からもうすぐ三年になるなんて、時の経つのも早い。凜一の中であの事件がどんな形で心に残っているのかは、俺ははっきりした事はわからないが、今の凜一には微塵も昏い影は見えない。

だからと言って心配がないわけではない。

自分では意識をしていないが、誰彼問わず媚を振るクセは抜けていないし、かといって気に入ったものしか認めないプライドの強さ

もある。

巧くいく時はいいが、逆に反感を買う派目にでもなったらと、何をつけても心配は尽きない。

そんな俺の気も知らず、凜一は気ままに俺を翻弄するように、楽しんでる。

休日にはどこかに行こうと約束していたにも拘らず、前日の仕事の疲れの所為か、昼近くまで眠ってしまった。

慌てて起きてリビングへ行っても凜一は居らず、代わりにメモ帳に「フェリーに乗って摩天楼に行ってくる。心配しないで。食事は用意してるから食べてね、じゃあ」と、書いてあった。

いつの間にか俺の好きなキッシュの作り方を覚えた凜一は、朝から焼いていたらしい。まだ温かった。

折角の凜が作ったトマトスープとサラダと一緒に食べながら、凜一へ電話をする。

直ぐに声が聞こえた。

「凜？」

『やつと起きたの？』

「ごめん、今おまえの作った飯を食ってるよ。起こしてくれば良かったのに……」

『いいよ。慧、疲れているみたいだったし……』

「今、どこにいるんだ？」

『セントラルパークだよ。天気がいいから人が沢山だけど、緑が眩しくて気持ちいい』

「昼からそっちへ向かうから待ち合わせしないか？」

『え？でも……いいよ、俺に気を使わなくても。適当に遊んで夕方には帰るからさ。フェリーだと、歩いて帰れるし』

「そっちと一緒に晩飯でも食おう。たまには豪華なホテルで食事でもしようか」

『ホント？楽しみにしてる』

「じゃあ、また連絡するからね」
『うん』

嬉しそうな凜の声に、こちらもしゃぎたくなった。
さて、どこにしようか…エセックスでもチエルシーでもピエールでもいい。こちらではあまり料理をしない魚料理の美味しいレストランでもネットで探すか…

全く、これじゃあ綺麗な子を囲うパトロンじゃないか。凜の思うつぼだ。

し残した仕事を終え、さて出かけようとした矢先にプライベート用の携帯が鳴る。

着信を見ると…珍しい。鳶谷さんからだ。

滅多に電話なんかよこさない人なのに何事かと耳に当てた。

「お久しぶりです。鳶谷さん」

『慧一くん…』

どこか落ち着かない声音だった。

「どうかしたんですか？」

『いや…凜一はそっちに遊びに来ているんだろう。彼、いるかい？』

「…いえ、出かけてますが…」

『連絡は取れる？』

「え？」

『いやね、どうも…俺の従弟と一緒にいたいんだが…』

「どういうことですか？」

『いや、ばったり出くわしたっていうかね…あいつは何考えてるんだか…』

「凜がどうかしたんですか？」

『いや、なんでもない。悪かったね…』

「ちよつと待ってください！鳶谷さん、隠さずに言って下さい。鳶谷さんの従弟と凜が会っているんですね。で、今どこにいるんですか？」

『ホテル名ははっきり言わなかったが、あいつはニューヨークではRカールトンって決めているから…セントラルパークの方…だと思っ』

「わかりました。今から凜一と合流することになっているんです。連絡してみますから」

『うん、頼むよ。あいつは…宗二の奴、凜一の事を話しても気のない素振りをしていたから、俺も気に止めなかったんだが…騙されたのかも知れない。正直、凜が心配だよ。宗二は謀り事が好きなんだ。凜一もああいう男にはムキになるからな…』

「従弟って前に言ってた鳶谷さんの一番信用している人でしょう？ そんなに心配な人なんですか？」

『…まあ、詳しいことは後で話すから。凜と早く連絡を取ってくれ。俺も携帯にかけているんだが…電源を切られている』

「…」

一旦鳶谷さんの通話を切り、直ぐに凜一へ掛けてみたが、はやり鳶谷さんの言うとおり携帯の電源は切られているらしい。

さつきはちゃんと連絡するからと言ってあるのだが、凜一自身が電源を切ることはない。じゃあ、誰が凜一の携帯の電源を切っているんだ。

考えられるのはだたひとりしかない…

鳶谷さんの従弟という男がどんな奴かは知らないけれど、嫌な予感しか頭に浮かんでこない。

俺は繋がらない携帯を手にしたまま、何故凜一をひとりで行かせてしまったのか…そればかりを後悔していた。

2 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

2、

すぐに鳶谷さんの教えてくれたホテルへ車で向かうが、こんな時に限って渋滞で進まない。

苛立つても仕方のないことだが、どうにも嫌な予感ばかりが先行してしまう。と、携帯が鳴り始める。メサイヤだ。俺はすぐさま耳に当てた。

「凜か？」

『慧…ゴメン。連絡できなくて…ちょっと、色々あつてさ』

いつもと変わらぬ声を聞いて心から安堵した。

大丈夫だ。命に別状がないのなら充分だ。

俺はそう自分に言い聞かせつつ、指定のホテルへ急いだ。

ロビーで暫く待ったが、我慢できずにのフロントで尋ねてもアポイントメントがないと相手の部屋も教えられないと言う。

どうしてもと粘っていると「慧っ！」と、背後から凜一の声が聞こえた。

直ぐに駆け寄って凜一に怪我などないか全身を眺める。当たり前だが無事な様子だ。

それよりもこいつが、例の鳶谷さんの従弟って奴なのか…

俺は凜一の傍に立つ男の様子を伺った。

鳶谷さんよりも大分若くみえたが、どうして鳶谷さんよりも数段高い貫禄と隙の無さ、それに有無を言わさぬ威圧感。これがいくつもの会社経営を纏め上げているというトップに立つ者なのか。

物腰は柔らかいが、こちらの隙を見つけたら今にも襲い掛かってこようとする猛禽類の目だ。

こんな油断のならない男と凜一は数時間を過ごしたというのか…

話術に長けた年長者に、土台俺みたいな若造が勝てるはずもない。食ってかかる言葉ひとつもでないどころか、怒りよりも相手への敗北感で一杯だった。

帰り際助手席に乗り込む凜一の向こう側、ホテルのドア越しに、鳶谷宗二郎の姿がちらりを見た。隣で凜一がにこやかに手を振る。思い切りアクセルを踏みこんだ。

凜一は俺の様子を懸念してか助手席でおとなしく黙ったままだった。実はここに来る前から気になっていることがあった。

鳶谷さんの電話だ。

たかが凜一が従弟と出会っただけならあんなに慌てふためく必要はないはずだ。

あの男から何か吹き込まれた、或いは見せられた…だから、鳶谷さんは慌てて俺に電話をくれたんじゃないのか…凜一にそれとなく鎌をかけてみる必要がある。

赤信号で停止したのをきっかけに問いかけた。

「凜、あの人は本当になにもなかったのか？」

「え？…なにもないよ」

「鳶谷さんはそうは言っていなかったぞ」

「そう…なの？」

「慌てふためいて俺に連絡をくれたんだ。凜一が大変な事になってるって」

「大変って…ただ、裸にされただけだよ」

「…」

は？…裸にされただけって…一体どういう状況なんだよ…黙っていると凜一は悪びれずにべらべらと喋りだす。こうなると引っこかりやすいのも心配になってくる。

凜一は出会った時からの状況を事細かく話した。（正直殆ど聞きたくない内容だ。勿論嫉妬からきている）

「…でさ…宗二朗さんは鳶谷さんが俺を可愛がるのが気に入らないから、その腹いせに俺に睡眠薬を飲ませて、それで俺の裸を写メしたのを送りつけたんだよ。かわいいもんだね、宗二朗さんも」

ちょ…す、睡眠薬って…あの男、俺の凜一になんてこと…って、それだけで本当に済んでいるのか？こいつの裸を目の前にして手を出さないって顔かよ、あの男…結婚して子供もいるって鳶谷さんは言ってたけど、バイなんだろ。凜一みたいな奴、いい獲物にしか見えてないんじゃないのか？

「バカっ！可愛いつて言う話かよ。睡眠薬飲まされて…知らない間に裸にされて写真に撮られりや児童ポルノ禁止法での盗撮罪だ。強姦罪でも訴えてもいいんだからなっ！」

「そんなに怒らないでって…何にもされてないんだからさあ」

「おまえが気がついてないだけかも知れないだろう。おまえは一度寝たら何をされても起きないだろうが」

「そんなの…レイプされたかどうかぐらいはわかるよっ！宗二朗さんは初めから俺をダシに使うだけだったんだから。…宗二朗さんのことを悪く言わないでよ。慧だつて、俺がミナと仲良くしてたら妬くだろ？意地悪したいって思うだろ？…俺だつて、慧が他の奴らといちやついてたらそいつを苛めなくなるもん…確かに宗二朗さんはやり過ぎの感があつたけど…許してやってよ、慧、お願いだから…」

許すも何も…初めから俺はあの男に負けているんじゃないのか？こうやって嫉妬とコンプレックスに怒り狂っていることさえ、あの男は計算ずくなんじゃないのか？だとしたら、そんな思惑にさせられている段階で俺の負けだ。

何よりも俺は…凜一にとって絶対の者になりたいと思っているにも関わらず、自分よりも大きい人間を見ると凜一にとって俺よりはそいつらと居た方が凜一にとって幸せじゃないだろうかという疑念が疼いて仕方がない。

それでなくても凜一は父性愛、母性愛を求める資質がある。鳶谷さんといい、あの宗二郎という男といい、確かに凜一の守る人間としては俺よりも相応しいと言えるだろう。

それが齒がゆくて自分の小ささに腹が立つのだ。

凜一を愛している。凜一が俺に愛を誓ってくれた。それでも一生凜一を守り通していけるほどに俺は成長できるのだろうか。

現実、今だって目の前の仕事に追われ、凜一のことなどほったらかしにしていた。そしてこのザマだろう…

くやしきまぎれの齒軋りを抑えて俺は帰宅した。

夕食は外で食べると約束してはいたが、こんな状況じゃとてもそんな気にはなれない。

仕方がないから、パスタと朝食の残り物で済ませた。

テーブルに向かい合わせた俺と凜一は、会話など弾む雰囲気じゃないことはわかっていた。

だが気まずいままに折角の時間を過ごすのも嫌だった俺は、なんとかこの状況を好転しなきゃならないと思った。

たったふたりきりの家族だ。もう二度と仲違いはするまいと誓ったのだから。

「凜…今日のことはおまえをほおっておいた俺にも責任がある。悪かったよ。折角ニューヨークまで来てくれたのに仕事ばかりにかまけて、遊びにも連れてやれなくて…反省しているんだ」

「…いや、いいんだ。たぶん俺が気を弛めすぎてたんだと思うし…慧が忙しいのはわかってるから…」

「俺は…おまえが傍にいと嬉しくて仕方ないのも本当だが、反対

に見えなくてもいいことも見えてしまうからつい口五月蠅くなってしまう。おまえは綺麗で魅力的だから、心配でしかたなくなるんだよ」

「…俺はもう昔みたいな子供じゃないし、ちゃんと自分で選ぶこともできる男だよ。慧にとっちゃんいつまでも9歳離れた子供に見えるんだろっけれど…」

「…」

「俺、できるだけ早く日本に帰るね。ここに居ても慧に心配かけるばかりだし、仕事の邪魔にもなるだろうから…」

「凜…」

「怒ってもいじけてもいないよ。慧に会いたいつていうのも本当だし、慧の為に何でもしてあげたいって思った…愛しているんだから当たり前だよ。けど、まだきつと力が足りないんだよ。慧の重荷にならなくて済むまで、日本で待っているよ」

寂しそうに笑った凜一は皿を片付け、寝室へ籠った。

あんな顔をさせる為にここに呼んだんじゃない…

なんて情けないんだろう。あの子を守るって、導いていくってあれほどに誓ったじゃないか…

愛してる…それだけでは共に生きていくことは出来ないのだろうか…

3 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

3、

明日は朝早くから出張で、エディソン近郊まで行かなければならなかった。

クライアント依頼のコンセプトを申し渡す日に間に合わせる為、半月かけてマスタープランを煮詰めてきた。精魂かけて仕上げたものだから、先方の受け取り方も当然気になるところだ。

だが、今、俺は仕事よりも凜一の方に目を向けなくてはならないんじゃないのか…

建築デザイン設計は一生やり遂げたい仕事だ。俺自身の才能を広げ、どこまで行けるのか見極めたいと思う。

その傍らに凜一が居てくれるのなら、俺は死力を尽くしてそれに投じることができる。

だが、果たして俺の傍に居ることが凜一の幸せなのだろうか…

凜は…俺から離れて自分の道を探した方がより深い充実した人生を送れるのではないだろうか…

凜一の事となると、俺は自分に自信がない。

あれほど凜一を幸せにするという誓いも、今にも崩れてしまいうに脆弱だ。

深夜零時を回っていた。もう凜一は寝てしまったのだろうか…

そつと寢室を覗いてみる。

…真っ暗だ。

窓のカーテンは開け放たれ、外の淡い明かりが部屋に仄かに白く浮き上がっていた。

パジャマ姿の凜一は窓際に凭れ、片膝を抱いたまま、ベッドに座り込んでいた。

闇に消え入りそうな青白い端正な顔立ちが凜一の持つ独特な儚げ

さと尊さを浮き上がらせる。俺はふつと溜息を付いた。こんな稀有な者を俺は疎かにしてしまっているのか…

「慧？」

こつちを振り向いた凜一の顔が微かに笑った気がした。

「…ごめん、寝ているのかと思ってノックもしなかった」

「いいよ…ね、こつちにおいでよ。ここから見る景色は日本じゃどこもお目にかかれなほほどに美しいよ」

俺は凜一に近づいた。

座っていた腰を少し引いた場所へと座り、凜一と共に外へ目を移した。

ハドソン川の向こう、群青色に輝く白い月の光の下、摩天楼の夜景が見える。

「ここ、高台になつてゐるからすごく眺めがいいんだね」

「そうだな。俺の部屋は角度が違っているから見えないし、この空き部屋がこんなに綺麗な夜景を見せてくれるなんて知らなかったよ」

「ね、これからこつちを慧の部屋にするといいね。仕事のストレスも少しは癒してくれそうじゃん」

「凜…」

「あ、さっき携帯で飛行機のチケットを取ろうと思ったんだけど、空気がなくてさ。キャンセル待ちになりそう。明日ケネディ空港に行ってみるよ」

俺の顔も見ずに言う凜一に胸が痛む。頼むからそんな寂しげな顔はしないでくれ。

「凜、帰るのは待ってくれないか？」

「え？」

「傍に居て欲しいんだ」

「…でも、俺がここにいたら慧が…」

「おまえが好きだよ。とても大事だから近くにいると余計な心配もする。離れてりゃ何も知らなくていいことまで見えてしまう。正直日本にいてくれた方が楽だ。でも…それでは向き合ったことにはならないんだろうな」

「うん…わかるよ」

「俺は…凜と生きていきたいって願ってしまっ。だけどそれは本当に正しいことかどうか…自信が持てないんだ…情けないけど…」

少しだけ笑う俺に、凜一は笑い返さず、俺の顔を両手で挟んでキスをする。そのまま俺の胸に頭を擡げた。その背中を緩く抱く俺に、より強く身体を摺り寄せようとする。

「…俺だって自信なんかないよ。慧はいつか俺に呆れ果てて捨ててしまっかもしれないってね…ほら、俺って気に入った奴となら寝ても構わないって思っってしまうからさ。それを罪とは思えない。よく顔がいいって言われるけど、それだっって今だけだろ？歳を取りゃ腹も出るしシワもよる。美貌が特権っていうのなら、若いうち振りかざしておきたいね。後悔しないように…高慢かな？」

俺の背中をしがみ付くように抱きしめる凜一は、低く呟く。

「…でもさ、本当は誰も俺を本気で欲しがったりはしないんだよ。俺をめっちゃくちゃにしてくれる奴なんか誰もいない…別にマゾじゃないよ。そういう意味じゃない…もっとこう観念的なもの…俺はそれが欲しいんだ」

凜は答えの見つかからない自分が齒痒いのか、俺の胸の中で頭を緩く振る。

「なんとなく…わかるよ、凜。おまえの見目だけではなく、その奥の奥を突き破って宿禰凜一と言うひとりの人間を見極めて欲しい。綺麗なところも汚いところもすべて洗いざらし、さらって欲しい…違っかい？」

「…そんな感じなのかな…さすがは慧だ。よく判るね」
顔を上げ、凜はいつもの笑顔を見せる。

「俺も他の人と同じように凜を壊すのが怖い。おまえがこんなに魅

惑的じゃなかったら、美しくなかったら…恐れはしなかったんだろ
うね。近寄りがたい何かがあるからね、おまえには」

「だからみんな俺とセックスしたがないのか…こっちはどうぞつ
て言ってるのに」

「おまえはセックスはしてるだろ？恋人がいるクセに贅沢だな」

「ミナは俺をめちゃくちゃには出来ない。あれは俺に寄り添い俺に
重なりあおうとする。俺は傷つかないようにそつと包み込む存在に
なりたいんだ」

「…」

「妬いてる？」

「まあな」

「慧が話をふったんだよ？…ホント言うとき、俺、慧が欲しくてこ
こに来たんだ。待つって言ったけど、離れていたらはやっぱり不安
になる。言葉は貰っても俺はまだ慧に触れてはいない。想いは本当
の形になんかならない。頭ん中だけで思い描いてもそれは妄想でし
かない。俺は本物の慧一が欲しい」

「…俺に誓いを破らせるつもりなのか？」

「そんなの知らないね。俺は誓ってないもの…慧、怖くても間違っ
ていても一歩踏み出さなきゃならない時ってあるはずだね。俺が
慧を欲しいって思うことは…間違っているの？」

お互いに情欲の兆しは見えていた。こんなに求めている子を…俺
はこれ以上ほおっておくことはできない。すでに…俺の方が先に参
っている。おまえを求め続けてどれだけひとりで慰めてきたかわか
らないもの…

「凜…わかったよ。しよう…どっちみち俺は最後にはおまえには勝
てないように決まってるんだから…」

俺はシャツを脱ぎ、凜の身体を静かにベッドに押し付けた。

「慧…いいの？ホントに？」

凜一は驚きを隠せないままに目をぱちくりと開けたまま俺を見つ

めている。

「ここでおまえを抱かなきゃ、俺がいくら止めても明日帰るって脅迫するつもりなんだろ？」

「…」

凜は見透かされたのを恥じ入るようにそっぽを向いた。

「本当に…育て方を間違ったかも知れないな。死んだ母さんがなんて言うか…」

凜一のパジャマのボタンをひとつひとつ外しながら、オーバーに溜息を吐いた。

されるがままの凜一はゆっくりと俺の方を向く。

「全き正しく生きる者…母さんならそう言うに決っているさ…」

そして俺の目を射落とすまなこで見据えた凜一は、迷うことなくそう言い切るのだ。

「…」

凜の言葉に俺は心臓が鳴った。

それは母親が俺に残してくれた言葉だった。

「全き正しく生きる者。手の中の炎を消さないで」と、彼女は言っただのだ。

母親の言葉など凜一が知るわけがない…

もしかしたら母は、こうなることを望んでいたんじゃないのか…

「この子を導いてね」と、眠る凜一を俺に渡した母の顔は…確かに聖母のように見えたのだ。

4 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

http://ncode.syosetu.com/n2768i

4、

予想はしていたし、予行練習というか…それなりに凜とこうなる場合の仮想は整えてたはずなのに…笑い出すほどぎこちなかった。

それは凜も同じで「こういう事に關しては俺はエキスパートだと思っただけ…」と言いつつ、パンツの片方に足が絡んでいるのを必死に脱がそうと格闘中だ。

その様がおかしくて声に出して笑ったら、「笑うぐらいなら脱がしてよ」と、むくれる。

「今日は昼間から誰かに脱がしてもらったんだろ？二度はないよ。クセになる」

さっきのお返しにと皮肉ってやった。

凜一は裸になった身体をゆっくりとうつ伏せにしながら、

「慧の焼きもちは少し怖いね。何されるかわかったもんじゃない」と、独り言のように呟く。

「酷くして欲しいって意味なのか？」

「…別に。慧の好きにしてい。どちみち俺はこのところは入れる側ばかりで、ネコになるの久しぶりだもん。自信ないや」

そう言いつつも二の腕越しにこちらを見る目つきは妖女のように艶かしい。

「できるだけ…傷つかないようにするよ。俺はおまえをマゾヒストに育てる気はないんでね」

背中 of 羽にキスを落とす、両腕で細い腰を抱いた。
あつという微かな喘ぎ。

片方の腕を伸ばし、その腕に頭を乗せてこちらを見ながら、凜一は俺の愛撫に流されるのを逆らうように口を開く。

「…俺さ、昔ね…男とも女とも関係なく寝てたじゃん…だけど男とするのが一番気持ち良かったの。みんな優しいからね…でもたまに変な奴がいて…そっぴいやサドな奴が居たなあ。俺を鞭なんかで叩こうとするわけ…で、それに腹が立った俺は逆にその鞭を引く手繰って思いつき打ってやった。裸のまんまでさ…そいつびつくりして服も着ずにあわててにホテルの部屋から遁走したんだぜ？笑う話だが、そういうプレイをやりたいなら相手を選べってね…俺を相手にするなんてお門違いだ」

「俺が怒った時は、手首を絞められた痕があったぞ」

思い出したくはなかったがこの際だと思い、聞いてみた。

「ああ、あの時は…ああいうことしそっぴい優しいそうなんだったんだ。ちよつと慧に似てたかな…だから両手を出してって言われて…まあ、俺もガキだったしさ」

すでに遠い過去の話だとわかってるが、こうして本人の口から聞くたびに嫉妬心がむらむらと沸いて仕方がない。俺に似ていようが似てまいがそっぴいは俺ではないんだから、嗜虐心に火がつくのは容易い。だがこれも凜一の無意識な挑発であるなら、俺は常にコントロールしなきゃならない。

だったら、こっちから誘い出す。

「美しい少年にはマゾヒズムとナルシズムが共存する…これが昔からの少年愛の論法だからな」

一切声に感情は出さず、羽から腰の窪みへと口唇を移す。目だけは凜を見つめながら。

「ばかばかしいや…ちよつ…慧…そこ、やだ…」

「どうして？昔からおまえはここを触ると気持ち良さそうだったぜ？」

左のわき腹から中心に撫でる部分が性感帯なのだろう。凜の息が

速くなる。

「…も…むかつく…その余裕…慧は底意地が…わるい」

眉間に皺を寄せて怒る凜もかわいい。そのまま中心を握ると目を硬く瞑り口唇を噛んだ。

「俺が寝てる間に…色んなところ、触っていたんだろ？…慧はそういうあくどいところがあるもんな」

「いつまでへらず口が叩けるか。それこそ望むなら酷くしてあげてもいい」

「…」

僅かな怯えが見えた気がしたが直ぐに消えた。

凜は自ら身体を捻り、仰向けになったと思っただら上半身を起こして俺に口づける。

「愛のあるセックスの場合は、恐れてはいけない。同等のものを与え、同等のものを得る。違った？」

頭を傾げ、愛らしい笑みを見せる凜は昔のままだ。

その顔に見惚れていると、いきなり凜は俺の立ち上がったものを握り、そのまま、まさぐった。

思いがけないことをやるのはこいつのデフォだとわかっているけど、全く…

「凜、やめないかつ！」「やだ」「こらっ、こっいつ時ぐらい兄貴の命令を尊重しろよ」「思い通りにならないペットほど愛着が沸くってね」「おまえはペットじゃない…」「っ！慧っ…卑怯だ。力技で締め上げるなんてさ」「9つ上は伊達じゃないだろ？」「…ひで〜な。その気になりや俺がタチでも良かったのに」「冗談を17のガキの下になるかよ」「もうすぐ18だ」「…そうだな…18になる。俺は18の凜と…」「26の慧と、結ばれるんだ…」

後庭をなぞり具合を探る。凜はいやいやをしながら、背中を撓らせた。

彼が望むような「すべてをさらってしまつ」程の器が俺に備わっているのかは知らないが、今宵の繋がりが凜の中にどんな形であれ、永遠のものとして刻み込まねばならない気がしていた。

俺は彼の両足を抱え、凜一にすべてを注ぎ込む…

凜一の中はまるで処女のようなようだった。だから慎重に傷つかないように進めた。

苦しそうな時は休み、OKの合図はアイコンタクトで…お互いの呼吸を合わせてゆっくりとだ。

あせる必要などなかった。

凜一が生まれ育ち、それを見守り、これ程までにと呆れるほど辛抱したんだ。

そして、ついに、求めて欲しくて堪らなかったイノセントを、俺は今初めて味わうことが出来る。

だから…

おまえの中にできるだけ長く居られるように、

おまえを俺で満たして、

今までの交わった奴らのすべてを浄化するまで、果てはしない。

4 (後書き)

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowsetter.nal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

5 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

5、
陽が昇るまで一睡もせぬまま、夜を明かした。

胸の中にぐつすりとする凛は、俺の腕を離そうとしない。

凛の顔にかかるクセのない髪をそつと掬って、額にキスを落とすた。

ずっと…凛一が赤ん坊の頃から、こうして凛を胸に抱き寄せ、無心に眠るこの子の寝顔を見てきた。

少しも変わりのない形なのに、俺たちの関係は百八十度違ったものになってしまったんだ。

お互いに何も着ていない密接した裸の肌の温もりが、俺にはまだ半分信じられない感覚のまま、何度もその実態を確かめずにはいられなかった。

凛を抱いた。

凛の中に自分を注ぎ込んで、何度も高みへ追いつめ、舞い上がった。

俺の名を呼ぶ凛一の声はこれまで聞いたこともないほどに、必死で、請い、求め、感じるままに震える叫びも愛おしく…エロティックで官能的な肌は吸い込まれるほどにしつとりと滑らかで、密接したまま離れがたくて仕方がなかった。

俺を見る凛の濡れた瞳が狂おしい程に、欲情に駆られているのを感じた。それ以上に俺も求めていた。我を見失う程に凛を食い尽くしたかった。

だが、そこには邪心はないと誓える。

今までの溜め込んだ嫉妬心や独占欲の妄執、汚らしい猥雑なものすべてを取り払った欲望だけで、凛一を求めた。そうでなければ、俺達はすべての倫理から救われないからだ。

…倫理…血の繋がった兄弟同士で愛し合うことは禁忌でしかない。
それを怖れていた。

怖れてはいたが、真実の愛である以上、そんなタブーなど下らないものだ。と自分自身に言い聞かせていた。

だがどこかで畏れていたんだ。まっとうな恋愛ではないと…

しかし、凜を抱いた今得られたものがある…凜とのセックスは決して後ろめたいものではなく、これは正々堂々とした『純愛』である…

血の繋がりがあからこそ、凜一を選び、愛しぬいた。

これから先、俺達兄弟の関係を世間がどう言おうと、微塵たりとも疚しい気持ちになる必要はないんじゃないか。少なくとも凜をくだらない邪推の目からは守らなくちゃならないにしても、この「愛」を否定する気持ちは微塵も沸き起こらない。

…凜は満足してくれただろうか…

どれだけ求めても少しも怯まなかった。

慣れた娼婦のようでもなく、かといって無垢な天使でもなく、凜一は凜一でしかなかった。それが俺には嬉しくて…たまらなかったんだ。

俺の欲望をすべて受け入れ、飲み込まれながらも懸命に俺に与えようとする。

拙いとは言わないまでも、若さだけで味わおうとする身体だ。多少荒削りでもいいさ。こいつが俺を求める限りは、精根尽き果てるまで付き合うだけだ。

俺の贈ったペンダントが朝日を受けて凜一の胸元で輝いている。
俺は自分の首からペンダントを外し、凜のそれと重ね合わせた。
太陽の光に当たったモザイクのペンダントは光を通し、シャツに赤い薔薇を描き出した。

「永遠の愛を誓うよ、凜。どんなことがあるうとも、おまえを幸せにするから……」

俺はまだ眠りから当分覚めそうもない凜の口唇に誓いを立て、ゆっくりと抱きしめるのだ。

眠る凜一をそのままに、俺は早朝仕事へ出かけた。

凜の身体のこと心配だったが、仕事だから仕方がない。

それも相当にきついスケジュールで、先方との打ち合わせから、請負会社の仲介人との連絡、プラン説明など、目が回るようだった。それでも合間合間に昨晚の凜との営みを思い出し、心に灯火が点^{とも}る。

やんわりと優しい気持ちになれる。

…こんな柔らかな時間を今まで感じたことがあるのだろうか…と、不思議になる。

自宅に帰っても凜一は居ないのではないだろうか、忙殺する時間との競争の中、凜一との事だけが夢幻^{ゆめまぼろし}ではないのかと…そんな感覚にさえ陥るのだ。

夕方、猛スピードで自宅へ帰った。

凜一が待っていると思うと、居ても立ってもいられない。

口元が緩んでしまう。きっと新婚の夫はこういう気持ちなんだろうと思う自分が、滑稽で仕方ない。だが、その気持ちに偽りは露ほどもないものだから、それさえ愛おしく思えるのだ。

「どうかしている」と、口に出して笑った。

駐車場に愛車を片付け、小走りに玄関の戸を開けた。

リビングの奥のキッチンから顔をのぞかせた凜一が「おかえり」と、笑った。

目の奥が喜びで痛くなつた。
必死に声が上ずるのを抑え、「ただいま」と、俺は応えた。

6 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

http://ncode.syosetu.com/n2768i

6、

凜一は見事に整った容貌だった。

孤高を彫像にした冷酷とも思える容貌が、口元に笑みを浮かべるだけで、光輝く明るさを纏った。

いつだって俺は凜に酩酊してしまう。

ただ見惚れるだけの愚昧な人間に成り下がる。

俺はこれを胸の中に抱き続けることができるのだろうか……

夜が来ると凜一は俺のベッドへ忍び込む。

たしなめると「だって慧一としたいんだもん」と、あっけらかに欲深さを明かす。たじろがないまでも、少しは恥じらいを見せたらどうだと思ふのだが、色情は俺の方が上だろう。

甘い声でせがむ凜がやがてふらふらになり、降参する。

それを楽しみ、意識を手放すまでいかしてやるのは俺の本性ではない。

最もこれくらいで今まで積み積もった愛欲が簡単に消化されるものではないが。

「凜、おまえが帰る前に3日ほど、車で旅行しないか？休暇も取ってあるんだ」

少し寝ぼけた凜と一緒に朝食を取る。朝日が凜の顔を照らすから、眩し気にまばたきをする。

「ホント？行くよ。こちらに来てても観光はあんまりしてないからね。本音を言つともっと沢山色んなものを見たかったんだ」

「ほったらかしにしてたからな。罪滅ぼしじゃないが、色々回ろう。それに実はボストンに用もあるんだよ。明後日がジャンの結婚式なんだ。招待されていたんだが仕事の都合が合わなかったから、保留

にしていたけど、折角だから一緒に行こうか」

「え？俺も行つていいの？」

「ジャンに連絡したら、是非凜一にも参列して欲しいって」

「ジャンに会うの一年ぶりかな」楽しみだ」

「ブライアン教授も来られるから、凜の志望を伝えておくといいよ。留学の時に伝^{つて}がある」と選びやすいからね」

「ああ、あの紳士だね。俺、去年話したよ。慧の弟だって言ったら可愛がつてくださった」

「…良かったな」

こいつは本当に誰とでもこうだ。この種の心配は一生付きまとうのだろう。

式はボストン郊外の古い教会で執り行われた。

まだ4月初めのボストンは日本とは比較にならないほど寒かったが、薔薇の花びらが舞い散る正午には春を思わせる暖かな日差しに恵まれた。

ジャンも新妻のシーラも幸せそうだった。

以前の俺ならそれを心から祝福する気にはならなかったかもしれない。だが、今は違う。

Congratulations!と、俺の隣で叫んでいる凜一は俺の一生のパートナーだ。

神の祝福は受けられなくても、俺たちは全うな愛を誓い合っている。

人間つてのは利己主義の塊だと言うが、俺もそれには漏れず、自分が幸せに満ちたりているからこそ他人の幸福もやっと思つてやれる。

「おめでとう」と、心からの祝福を明るい友人に捧げた。

ジャンは俺をじつと見つめ、ニヤリと笑った。

「うん、今日のケイイチはこの真っ青な空みたいに澄み切っている

ね。：リンイチがいるからなのかい？」

「なんとでも言えよ。今日は反論はしない。君の幸せを心から祈りたい気分なんだ」

「サンクス。俺もケイイチがいつもハッピーでいられるように神に祈るよ。これからも良き友人として付き合えたら嬉しい」

「勿論さ。仕事の方も色々世話になるよ。郷に入りては郷に従えってね」

「？」

「ジャンを頼りにしているっていう事だよ。ジャン、おめでとーかつこ良かったよ！」

喜び勇んだ凜一がジャンに飛びつく。驚いたジャンは凜一を抱いたまま腰を抜かした。シーラは驚きながら大笑いしている。

幸福のハトが大空に舞い上がった。

手の平で翳した太陽が眩しくて、暖かった。

翌日にはカナダのケベックまで足を運び、途中気に入った景色や建物があれば足を止め、観光した。

どこに行っても凜一は喜び、感動しては感嘆の声をあげた。

暗くなったらモーテルへ泊まり、お互いが求めるままに散々やり、昼近くなるとまた車を走らせた。

「新婚旅行みたいだね」と、凜は屈託なく言う。

幸福と言う言葉の意味はこういうものだろうと感じていた。

だが、これからのことを思うと、喜んでばかりはいられない。

蜜月は長くは続かない。

そして時を告げる月は、待たずして絶えず形を変えるものだ。

凜一が帰国する日がとうとう来てしまった。

帰りの飛行機は鳶谷宗二郎と同乗すると言う。

丁度、彼も日本に帰る日が一緒だったというが、嘘か真か信用ならない。それなのに凜一は浮かれている。

「宗二朗さんが俺の分までファーストを取ってくれてさ。一応反省してるのかな？でもファースト初めてだから超楽しみ」と、ご機嫌だ。

俺との別れの名残は一体どうなっているのだから…と不満もあるが、言って聞かせても早々にこいつの性格が変わるわけではない。

「凜、あんまりあの男を信用し過ぎるなよ。鳶谷さんとは違うんだからな」

「わかってるよ。そうだ、鳶谷さんに俺たちのことを話してもいい？」

「そうだな…鳶谷さんだったら大丈夫だろう」

ひとりぐらい俺たちの味方が居なくては、凜一が可哀相だ。

「これからお世話になるだろうし、俺からも伝えておくけれど…だけど凜、念を押すけれど、あの男には注意しろよ」

「はいはい、わかったよ。慧は相変わらず過保護」

「それから…」

「何？」

もうひとつ気になる事があった。

凜一の付き合っている恋人のことだ。凜はこれからその子との関係はどうするのだろう。

だが、それは俺が詮索することではない。すべて凜が決めることだ。

「いや…勉強しつかりやれよ。あまり帰ってこれそうもないから…傍にいてやれないけれど…」

「心配しないでよ。浮気はしないよ」

「凜のは充てにならないからな」

「そっちこそ、日照りになっても他の奴とやるなよ」

自分は棚にあげてか？と言いたかったが、ここまで悪びれないということは、凜の中では俺と水川と言う恋人は全く別次元なのだろう。

ケネディ空港まで送って、仕事があるからと別れた。
バックミラーに手を振る凜一の姿が映る。
すぐに目を逸らした。

これ以上見ていたら、前が曇って運転など出来そうもなかった。

「元気で。いつでもおまえを想っているよ。愛してる…」
きっと彼には届かない。

何故なら、彼は振り向いて生きる者ではないのだから。

それでも俺は凜一を守る為に生きる。

凜一を愛すること。

それだけが俺の生きる意味を持つからだ。

> i 7 9 2 3 — 2 7 3 <

7 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

http://ncode.syosetu.com/n2768i

7、

凜一が去った後の虚しさは覚悟を決めていたはずだった。

俺はそれを埋めようと仕事に打ち込んでいく。

いくつかの小規模な建築の立案、設計、プレゼン、人の残業を買ってまで自身をもてあます暇など作らぬように仕事に励んだ。

休日も持ち込んだ仕事にかかりつきりになっていた。

夕方近くになり、隣の飯田さんの奥さんが、遠慮がちに尋ねてくる。

何かと伺えば、夕餉を持ってきたという。

「わざわざすみません」

「大したものじゃないけど、おかずの足しになるならと思って」

「いえ、ありがたいです。実は仕事に没頭していて、昼飯も食べていなくて…早速頂きます」

「実はね…凜ちゃんなのよ。『兄貴は仕事人で食事もまともに取らないから、たまにでいいから、残り物があつたら食べさせてやって下さい』ってね…帰り際に頼まれたんですよ。凜ちゃんは本当にお兄さん思いのいい子って家族みんなで感心したのよ」

「そうでしたか…」

飯田さんが帰った後、すぐに凜に連絡を取った。

朝起きたばかりで少し寝ぼけ声ではあったが、嬉しそうな気配にこちらも笑みが零れる。

「色々気を使ってくれたみたいで、驚いた」

『なに？俺が人のメシの心配をしそうにないって話？』

「まあ、そういう話だな…嬉しかったよ」

『だって兄貴に倒れられたら、俺、帰る場所がなくなってしまうからね。元気にしてくれなきゃこっちが困るもの』

「そうだな…」

『あ、そうだ、鳶谷さんにお礼言ってね。帰った後も色々世話になってしまったから』

「わかったよ。じゃあ、元気でな、凜」

『うん、愛してるよ、慧』

携帯を切った後、安息と寂しさの混じった気分になった。

凜の言う「愛している」の言葉を疑ったりはしない。

ただ失うのが怖いだけ。

手に入れた後のこの幸せの頼りなさはいかんともしがたい。

今になって、離れて暮らすことへの不安は募るばかりだ。

あいつをひとりで日本に置いてしまったこと、あいつが付き合っている恋人のこと、鳶谷さんや宗二朗さんのこと、凜の周りのすべてが遠く離れて見えない俺には、変わっていく事さえ知らないままの愚か者でいてしまわないか…

今「愛してる」と、言う凜は明日には別の誰かに同じ言葉を吐くかもしれない…

凜と繋がった今、もどかしさは切りが無い。

消えないジレンマを水底に溜めていくしかないのだ。

多少複雑な気持ちで鳶谷さんへ電話を入れる。

『凜から聞いたよ。おめでとう。慧一くんの想いが叶って良かったじゃないか』

「鳶谷さん…これで良かったのか。どれだけ考えても答えは出ない。俺は待つって誓ったはずなのに…凜にせがませたとは言え、とうとう…」

『後悔しているのかい？』

「いえ、遅かれ早かれ俺たちがこうなるのはお互い覚悟してましたから。ただ闇雲に喜んではばかりはいられない気がしてならない。凜を手に入れたということは…俺は凜を縛り付けてしまうかもしれない。凜はそれを窮屈に感じてしまうかもしれない…」

「慧一くん、それを杞憂っていうんだよ。君がどう縛りつけようと凜一は窮屈に思わないし、君がいくら縛り付けておこうとしても、自由になりたい時は縄を引きちぎって出て行く奴だよ。奴より君の方が心配だなあ。慧一くんはマイナス思考が身についてしまっているからな」

「否定できません…もうこのことに関しては己の業なので、今更すべてが霧が晴れるようにとはいきませんね。たけど今は本当に…幸せすぎて、夢のような気がしてならないんですよ」

「幸せすぎる…なんて言葉を君から聞くななんて思わなかったよ。悩めるファウストもとうとう最後の言葉を吐くのかい？」

「時よ、止まれなんていいませんよ。魂の救済なんて望んでいません。凜がメフィストなら…構いませんが」

「ああ、凜は本気でメフィストになる気でいるよ。あれがメフィストなら俺の魂も差し出すがね。それよりも宗二郎が迷惑をかけて済まなかったね。あいつも君たち兄弟が気に入ったみたいなんだ。悪い奴じゃないから許してやってくれ」

「いいえ、俺もいいかげん凜に関しては大人気ないので、世話になった宗二郎さんにロクなお礼も出来ませんでしたよ。鳶谷さんとい、お世話になりっぱなしで、どうやって返していいのか見当もつきません」

「礼なんていいよ。好きでやってるんだ。いわゆる子育ての疑似体験。罪滅ぼしにしては美味しい目に合っていると思うよ。まあ、凜は…あれで歳相応な悩みも抱えているから、できる範囲で俺も力になるつもりだよ。慧一くんは自分の仕事に打ち込みなさい。凜一の未来の為に社会人としても基盤は大事だからね」

「はい、わかってます。じゃあ、よろしく願います」

「なあ、慧一くん…本当のところ、俺は百パーセントの幸せなんか面白みに欠けると思っているんだよ。凜には真逆のことを言っているけど。俺みたいになてくると少しぐらい自分は不幸だっと思っていたほうが、光の恩恵をちゃんと有り難いって思えていいも

んさ』

「そうかも知れませんか…」

鳶谷さんほどの域に到達していないから、悩みも尽きないが、俺は俺なりに生きるしかないのだろぅと思う。それでも凜を思うだけの苦悶の日々を省みたら、今がどれだけ充足しているのかは計り知れない。

俺は幸せを感じている。

夏の休暇をどうにか貰って、日本に帰国した。

父の故郷である金沢の実家では、お盆も兼ねて母と梓の法要が営まれる。

手筈は凜一が整えたと言う。

いくら忙しくても死んだ女房と娘の法要ぐらい、自分でやれよと、父を恨めしく思うが、あの人はそういう行事に全く興味がないから、周りがどうこう言っても仕方がない。

羽田からの飛行機が遅れて、あやうく読経に間に合わなくなるところだった。

実家の古い屋敷に着き、急ぎ上がる。客間と仏間を繋げた広間に、大勢の参列者が行儀良く低頭していた。

すぐに凜一の頼りなさげな背中を見つけた。

あわてて傍によると、緊張感から解放されたのか、少し潤んだ目をしている。

少し甘えたいような素振りに、抱き締めたくなる欲を精一杯押しとどめた。

仏壇の母と梓の写真が、恨めしそうに俺を見ている気がする。

会食が済んで参列者を見送り、俺たちも予約しておいた旅館へ帰

る。

金沢へは両親も今日の朝、着いたばかり。凜一は3日前からひとりでこちらに来て、慣れない実家の古い屋敷で過ごしたそうだ。

寂しかったと愚痴を聞かされながら、寄り添ってくる身体を抱きしめた。

めちやくちやにしたいのは山々だが…別室とはいえ、隣に父親がいたんじゃ、さすがに兄弟で乳繰り合うわけにはいかない。

すでにその気になっている凜一を宥めて、キスだけを繰り返す。

「キスだけで後はお預けなんて…これってなんかの刑罰にあたらねえ？供養した甲斐がないよね」

苦笑いをする凜の頭を撫で、

「世俗的な真理と言うものは、耐え忍ぶことなんだよ。きっと母さんと梓が俺たちに戒告してるのさ」

「ホント？」

「…嘘さ」

俺の腕の中でポカンと呆れる凜の顔がたまらなく愛おしくて、愛おしくて…

この「幸福」と言う感情を綺麗に切り取って、誰彼とも無く見せ付けたい気持ちになった。

8 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

8、

翌日、和倉まで家族旅行を気取っては見たものの、凧一も俺もふたりきりになりたくて仕方がないものだから、どうやって疑われる事無く両親から逃れられるか、練っていたところ、ちょうど社宅の隣の飯田さんから那須高原のペンションの予約があるが、自分達が行けないからお譲りするという申し出があり、喜んで承諾した。そそくさと親元から一旦離れ、鎌倉のマンションへ一時帰宅した。

「親父達と一緒にじゃなきゃわざわざ那須まで行かなくても、別に鎌倉でも良くないか？」

と、連日の疲れからか凧一の腰は重くなる。

「ここに居たんじゃ気が変わった両親がいつここへ帰ってくるかが気がかりで、セックスに没頭できやしない」

俺は凧の尻を叩いて、一刻も早くマンションから出ようと促す。
「焦ってる慧の姿を拝めるのは滅多にないのに、その理由が俺とのセックスじゃあ、確かに母さんも梓も浮かばれないね」

などと、皮肉を言う凧の腕を掴み、タクシーに飛び乗った。

「恋人のいるおまえと違って俺は綺麗なもんでね。独り者のひもじい思いをしているんだよ。少しぐらい同情されてもいいだろう」

「…なんだか、化けの皮が剥がれた狼って感じ。スリルだね。そういう慧も好みっちゃ好みだけど…こっちの身体が持つか心配になるよ。お手柔らかに…」

運転手に聞こえないように俺の耳元で囁く凧の声は甘い。

上目遣いの媚態も計算してのことなのかは知らないが、こちらが負けるのはわけない。

凜の誘いに乗って新幹線の洗面所で、誰も居ないのを確かめてキスを楽しんだ。

正直スリルが過ぎて俺の性分には合わないと言口するが、凜は構わない。

「何を恐れているの？親戚の連中も友人もないし、誰も俺たちのことなんか知ったことじゃないのに。慧は人目を気にしすぎだ」

罪の炎など畏れる気色は初めから持たない凜一の黒曜石の瞳が強く影を放つ。

紅く濡れる口唇を味わうと、さっき飲んだ甘いソーダの味がした。

那須塩原駅から車を借りて、目的のペンションまでドライブを始める。

すると、凜はさっきまでの欲情の色はさっぱり消えて、目の前の自然のパノラマに感動の声を上げる。

今に始まったことじゃないが、こいつはなんでこうもコロコロと移り気が激しいのだと呆れる。

「さっきまでとエライ違いだな」

「え？何が？」

「新幹線の中では今にもやりたそうに迫っていたクセに、もうすっかり忘却の彼方か？」

「別に忘れてるわけじゃないさ。目の前に立ちはだかる自然の前じゃ、俺の性欲なんざちっぽけなもんで、まさにすっかりエコされた気分」

「おい、エコの使い道が違っただろう。…確かに心洗われる光景だね」

右手に見える那須連山を眺めつつ、車の往来も建物も少ない土地に来るとほっとする自分がいるのは確かだった。

「自然に感動するという意識は住んでいる人にとっては当たり前の

風景だから、おまえみたいに情感は少ないだろう。それこそ常に浄化されているのだろうか。私欲が自然に淘汰されるなら、少しは罪も軽くなるだろうか」

「…なに？ 慧は俺と寝たことを後悔しているのか？」

「そうじゃないよ」

「じゃあ、罪だとかネガティブなことを言うなよ。俺は慧と繋がったことが倫理的に、思想的に禁忌だと言われようと、ちっとも罪だとは思わないね。生物学的に見ても何がファクターかどうかは後付に過ぎないし、そんなもんは個々で違うもんだろ。俺は慧と愛し合うのは生きてきた過程での当然の成り行きだと思っし、幸運だと思っ。罪なんか感じない。もし慧が俺と寝ることで罪の意識を持つというのなら、俺が全部担ってやるよ。俺は重さなんて感じない性質だから、貰った罪は燃やして灰にしてやるから」

「ソロモンの大公爵みたいなことをい言う奴だな。大丈夫だよ。俺ももう乗り越えたよ。随分悩んだのは事実だし、おまえを抱いてしまっことを畏れていたよ。だけど、凜とこっとなったからって俺の中で畏れていた後悔や自責なんてもんは、一度も沸いてこないんだ。あれだけ拘っていたのにと自分でも不思議なんだがね。」

俺が言う罪というのは…凜が俺を、俺が凜を選んだことで、過去や未来の巡り来る回りの色んなものを犠牲にしてしまわないかと…それが心配になんだよ」

「それって…ミナのことも含まれる？」

「…それもある」

「ミナのことは鳶谷さんに相談したよ。鳶谷さんは恋する気持ちに罪はないと言ってくれた。その想いが純粹であれば尚の事、別れても大切な思い出になるだろうとも言っんだ。俺への優しさなんだろっけれど、ミナを傷つけることに変わりはない。」

…ミナを誘ったのは俺だ。その俺から別れを言い渡すんだからね。それこそ、計略を謀って向こうから言わせる手立ても考えないこともない。だけど、ミナの純粹な想いには小賢しい謀り事はやめたよ。

卑怯すぎると物事は歪んでしまう。俺がミナを愛している事実は変えられないんだし。

ミナとの恋愛を綺麗に終わらせる為にはどうしたらいいのか…どう考えても無理なんだ。ミナと別れる場面が俺には思いつかない。この恋は本物なんだ。だから俺とミナの中では、もう綺麗な思い出になるはずもない。

…慧に聞かせる話じゃないけどね…ああ、慧、ここだよ。目的地だ」

複雑な気持ちで駐車場に車を止めた。

本館のフロントでチェックインをしながらも、凜の言葉が頭を支配した。

「この恋は本物なんだ」か…
相変わらず齒に衣着せぬ物言いだ、多分その想いは本音なのだろう…俺だからこそ敢えて言葉にしたのかもしれない。

本館から100メートルほどの上り坂を歩いたところに別館が立ち並んでいた。

南仏風の洋館仕立てのメゾネットは、天井も高く、天窓の明りが部屋に満ち溢れていた。

案内人から簡単な説明を聞き、鍵を受け取り見送って鍵を閉めた。

リビングに戻ってみても、凜の姿が見えない。

「凜！どこにいるんだ？」

「上だよ。ベッドが3つもある。慧、冷蔵庫から水持ってきて。喉が渴いちゃった」

ミネラルウォーターを手に、二階に上がれば、ベッドの毛布に下半身だけ入り込んだ凜が横になっていた。

もうひとつのベッドに脱いだ服が綺麗に重なっている。

「なんだよ、もう裸になりやがって。性欲は自然に淘汰されたんじゃないかったのか？」

呆れながら、ペットボトルを渡す。

「ベッドを見たらここへ来た目的を思い出した。自然はまた欲を満たすものでもある。そこに山があるから人は登るんだろ？早く俺は満たされたいからね。ね、やろうよ、慧」

「夕食の時間まで二時間しかないよ。大丈夫なのか？」

「二時間もありがた充分楽しめるじゃん」

「した後の名残りが凜の顔に映るから、心配だな」

「じゃあ、慧にも付けてやるよ、キスマーク」

言うが早い、凜は俺の首に腕を回し、襟際の最も見える場所に、真つ赤な痕を残した。

その仕返しにとその後、何倍もの烙印を凜の身体に与えてやった。

2時間後の食事予定を大幅に変更せざる負えなくなったのは、俺だけの所為じゃない。

9 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

http://ncode.syosetu.com/n2768i

> i 1 1 0 9 8 — 2 7 3 <

9、

ペンションで過ごすのは三日間の予定だったから、好奇心旺盛の凜一は初めての那須をあちこちと観光したがるかと思ったが、食事以外はコテージを出ようとしなかった。

主な時間を二階のベッドの上で過ごしている。

朝と晩は食事が付くからいいが、「昼飯はどうする？どこか景色のいいところにも行こうか？」と、誘っても、「別に昼抜きでもいい。俺、慧とくつついていたいもん」と、腰を掴んで離さない。仕方がないから、始終ベッドでじゃれあっては相手をその気にさせ、エキスが空っぽになるまで貪り続ける。

全く持つて欲に忠実な獣そのもの。

しかも、飽きるどころではない。

凜の身体と繋がるたびに、自分が求めていた精神と身体の不バランスの域に近づいていくような気がしてならない。

凜は俺を楽園へ誘おうとしているのだろうか。

そうかと思えば、気が付くと、ベッドの中で参考書と鉛筆を手にぶつぶつと唸っている。

受験生なのだし、最もな姿だと褒めたいところだが、恰好は真裸のままだ。

注意しても「またすぐ脱ぐんだからいい」と、バスローブを軽く羽織るだけ。

「まさか、ここにまで参考書を持つてくるとは思わなかったよ。一応受験生だつてことは、裸になろうと理解しているらしいね」

「まあね、丁大を狙っているわけだからな。これでも成績上がったるんだぜ？」

「ああ、紫乃からメールを貰った。今のままなら大合格も充分可能だって言われた。期末の模試はかなり良かったんだろ？」

「うん。学年トップのミナには到底及ばないけれどさ。俺が成績いいとミナが喜ぶんだよね。あいつは本気で俺と一緒に大に行こうと思っているらしくてさ。俺は行かないって決めてるけど」

「……」

「大学が違えば、ミナとは疎遠になる。留学となりやもつとだろ？……少しずつ自然消滅すりゃ、ミナの傷も少なくて済むかも知れないし……」

「凜……行きたい大学を好きに選んでいいんだよ。おまえが水川くんと一緒に大に行きたいのなら、俺は止めたりしない。俺が恐ろしいのはおまえの未来を狭めたり、歪めることなんだ。俺のことは考えずに、自分のやりたい道を進んで欲しい」

「慧を選んだのは俺の意思だよ。慧がミナに対して後ろめたい気持ちを持つのはわかるけど、俺が慧と一緒に生きるって決めたんだ。建築家になって慧と一緒に働いて、暮らしたい。その為の学部も選考したいし、アメリカの大学って言っても、慧の仕事の関係もあるだろうから、離れて過ごさなきゃなくなるかもしれない。すべてが上手くいくかどうかわからない。でも、未来の目標はちゃんと見えてるよ。慧の為だけじゃないよ。俺自身がそう決めたんだからだから慧も自分を責めたりしないでくれ。同情や気遣いは俺に対してもミナにも余計なお世話になる」

「……わかったよ。おまえの良き未来に俺が役に立つのなら、何でも言ってくれ。おまえは俺に最上の幸福をくれたのだから、俺はなんでも与えてあげたい」

「じゃあ、沢山抱いてくれる？明後日には慧はニューヨークに行っちゃうんだから、慧の温もりを少しでも長く感じてたいもん」

「それは与えたことにはならないよ、凜。俺の方がより欲しがっているんだから」

参考書をサイドテーブルに投げ、俺に身を寄せた凜は、俺の胸に

手を置き、祈るポーズを取った。

「…慧が他所の男へ目移りしませんように。俺に呆れ果てて逃げたりしませんように…」

わざと聞こえるように呟く凧一の腰を引き寄せる。

擦れた吐息に欲が狂い始める。

何度だって飽きない。

凧一のセックスに一回だって同じ快感なんてありえない。

誰にもどこへも行かせたくないな。

手足を絡めて一生解けなくしてしまいたい。

結びついたまま枯れ木になって海に流されたら、彼の地に辿り着けるのかな…

いや、彼岸に母と梓がいたら呆れ果てることは必定。

まだ心中はできない。

「なにが可笑しいのさ、慧」

腕を巻きつけたまま、背中を撫でる凧はきつい顔で睨む。

そろそろ限界かもしれないと、腰を深く入れた。

華が散るようにシーツに頂垂れる凧の神々しさ。

与えられた愛に酩酊する喜びの姿がある。

終わった後は、すぐに寝付いてしまう凧一だったが、気が向くと肌をくっつけ合ったまま、喋り続ける。

「言葉は精神であり、セックスは身体の求める泉である」

と、大仰に言う凧は、俺の胸に腕を組んで綺麗な顔を乗せた。

「法要の時、お坊さんが説法をしたじゃん」

「ああ、人が苦と感じるのは、欲がある為である。何かを欲したりすることが自己愛であり、迷いもまた苦の種でもある…」って言うってたな」

「人と比べたり、何かに対して怒ったりする感情を抑えることが悟りの一歩でもあるって言うけどさ、そんな感情を切り捨てて、欲望

や煩惱を感じないで、それが生きていえるだろうか。迷ったり怒ったりするのは愚かなことだろうかねえ…俺、天上の上からわかったふりで下界を見下ろすより、地上に足をつけて、なにか面白いものないかな…って、探しながら生きる方が豊かだと思うけれど…」

「悟りは遠くなるかもな…でも、俺もそちらがいいな。凜の歩く背中を追っている方が苦があるとしても、同じほどの楽もある。何もないより、どれだけマシかわからないさ」

「俺の後を追うの？せめて横並びに歩こうよ」

「そうだな。その方が手を握れるしね」

伸ばした凜の手を取って絡めた指先にキスを落す。それを見つめた凜は

「…もし俺が死んでしまったら、残された慧が可哀相すぎるな」と、呟く。

「…」

「それとも、俺に囚われないで生きられて、楽になるかもしれない」

「凜、やめてくれ。孟蘭盆うらぼんは終わったんだから、母さん達の魂に惹かれないでくれよ」

「わかってるって。俺は母さんや梓の分まで幸せになるって約束したんだから大丈夫だよ」

凜…おまえが死んだら…多分、俺は生きてはいられないだろう…誰がなんと言って俺を慰めようと、それが罪だろうと、おまえの後を追うだろう…

光を失っては影の存在など、ないのだから。

楽園を後にする空しさといったら…言葉にもならない。

空港で凜一と別れた後は、すべての景色がモノクロになった。

だから何度も繰り返し思い出し、俺のすべてを凜一で一杯にした。

見事に美しい天然色のそれは、歩く道を願いの道として輝き、俺を導いて行く。

10 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

10、

企業の中に溶け込む質は少ないとわかっていたから、自分の発案がスムーズに取り上げられるとは思わなかった。

比較的人口が少ない街の商業施設の空間デザインを何人かの建築家で草案し、共同でいい街並みを作り上げることに依存はなかった。

その大部分が俺の発案によるものとしても、俺はまだ若く先頭に立って指揮をするには、プロジェクト自体が大きすぎる。

だが、企画マネージャーは思い通りにやれと尻を叩くから、そのつもりで励んできた。

当然、他とは摩擦が生まれる。

それは瞬く間に膨れ上がり、俺は上と下の間で立ち止まるしかなかった。

しかも長年経営を担当していた部下（20歳以上は上である）が、他企業にリークし、コストの漏洩でプロジェクト自体が白紙に戻ってしまった。

NKコーポレーションの損失は大きかった。

俺の全くあずかり知らぬところで、事態は起きていたが、俺とプロジェクトマネージャーは全責任を負わされることになった。

マネージャーは後片付けにしばらく残るとして、俺は即刻首。

入社一年足らずで、俗にいうリストラを経験することになった。

ある程度の自信があったからこそ、この道を選んできた。

落ちこぼれたことも躓いたことも一度もなかった。

ここまであつさりと切り捨てられると、さすがに自信喪失は否めない。

茫然自失とはこのことなのだと思います。

志や理想があつたから、その空間を現実のものをして創造したかった。

簡単に諦められるほど適当な仕事をしていたわけじゃない。時間が経つに連れて手足をもがれた気になった。

これからどうやってアーキテクトとしての仕事をしていくのかわからなくなってしまった。

明日を歩く道が無い…

凜…おまえを導く手立てが無い。

知らぬうちに街はクリスマス一色に変わっていた。

アパートメントを引き払い、荷物を片付けた。

社宅の奥さん方も手伝ってくれた。

凜一が遊びにきた時の印象が、強く残っているようで、何かと俺にも良くしてくれた方々だった。

「宿禰さんが居なくなると寂しくなるわ。若い男の子はもっと大事にするべきなのに、駄目な会社よね」と、慰めてくれる。

「転居先は決まっているの？」飯田さんが心配そうに聞く。

「いえ…まだ何も。決まるまで荷物は貸し倉庫にでも預かってもらおうと思っています」

「一週間くらいならここに置いといていいわよ。まだ次の方が入る予定もないから」

「ありがとうございます。じゃあ、甘えさせていただきます。できるだけ早く取りにきますから」

同情や憐れみが、優しさとわかっていながらも悲しかった。

マンハッタンの安価なホテルに滞在した。

シカゴ大学のブライアン教授に連絡してみようとも思ったが、クリスマスも近い。家族思いの教授のことだ。きっと一家団欒家族旅行を楽しんでいることだろう。

クリスマスが終わるまで、こちらもすべてを休業して休息しよう。

日頃あまり歩かないニューヨークの街の隅々を歩いてみた。

美術館も博物館も教会も、クリスマスイルミネーションやスノーフレークの飾りで、どこもかしこもきらびやかこの上ない。

そりやそうだろう。一年で一番輝かしい時期だ。

東京のそれも華やかだが、この国はクリスマス信仰がある。

それぞれの教会が独自の色でキリスト降誕を祝っているのも面白い。

面白いが、それを心から楽しむ余裕はこちらもない。

凜一がいてくれたら、と常に願うけれど、会社を辞めたことすら怖気づいて伝えていない。

携帯を見るのも怖くて電源を切ってしまっている始末。

我ながら情けない。

惨めな兄貴の姿を見せたくないなんて、見栄を張るのもいい加減にしろって話だが、凜一を守ると宣言した手前、リストラされたなんて言えやしない。

大学が決まったら留学して一緒に暮らすと楽しみに言ってた凜一。

頼るべき兄が生活する家も金もないなんて…

この歳で親に頼るのも不甲斐なくて示しがつかない。

下らないプライドに固執しても意味はないとわかっているのだが

…

街中の喧騒を避けて、川沿いの遊歩道から夜景を眺めた。

川の向こうに住んでいた街が見えた。

涙が溢れて仕方が無かった。

クリスマスイブの前日だと知ったのは、夕刻カフェでサンドイッチを口にしていた時だった。

そついや、凜へのクリスマスプレゼントを忘れていた。
今からじゃとても間に合わない。

声だけでも送りたい…

聞きたい。

凜…どうしてる？

ただ宛てもなく歩き回った。

夜だといつてもこの街に住む者には暗闇は少ない。

アッパ― イーストサイドの古い落ち着いた教会に辿り着いた。

中に入れば厳かなミサが行われていた。

空いている椅子に座り、両手を組んだ。

パイプオルガンの演奏、ゴスペルの賛美歌、降誕劇にファーザー

の講話…

俺はただ祈る。

凜…おまえを想う。

「愛」を誓う。

おまえの「幸福」を願う。

「慧…」

名を呼ばれ、俺は顔を上げた。

…信じられなかった。

凜一が、目の前に立って俺に笑いかけている。

「ねえ、奇跡を信じる？それとも、一日早い天からのクリスマスプレゼントかな？」

「凜…」

「隣りに座っていい？一緒に祈ろうよ」

「…何を？」

「俺たちが出会えた幸運と、この夜に集うすべての人々の幸福を…」

「
…」

懸命に堪えていた涙が零れるのを、悟られないように俯いた。
俺の肩を抱く凜の身体は暖かい。

いと高き処 神に栄光なれ

G l o r i a , i n e x c e l s i s D i o !

> i 8 1 4 8 — 2 7 3 <

11 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

水川青弥編「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

11、

何故おまえが？どうしてここに？どうやってここを知りえたんだ？俺の隣りで両手を組み、祈りを捧げている凜一の横顔を凝視した。俺は幻影でも見ているんじゃないのか？

あまりに凜一を想いすぎて、俺の頭が狂ってしまったんじゃないのか？

そうじゃなきゃ、これはあまりに都合の良いすぎる奇跡だ。

ミサが終わり、俺たちは教会を後にした。

何も言わない凜一にますますこれは本物の凜一ではないのでは…と、不安になる。

「懐かしかったね」

並んで歩く凜一がやっと口を開いた。

「え？」

「さっきのミサで最後に歌った『Hark! the herald angels sing』さ。あれ、昔、家でクリスマスを祝う時に、よく梓と歌ったじゃないか」

「…ああ、そうだったな」

「意味もわからないのに無理矢理英語で歌わされてさ。まあ、メロディが綺麗だったから気持ちよかったけど…」

「さっきも歌ってたな」

「うん、久しぶりだったけど覚えてたよ。梓と一緒に歌っている気分だった。Hark! the herald angels singing Glory to the new born King」

メロディにのせた綺麗なテノールが、周りに響く。前や横を歩いている人達がこちらを振り返り、Amazing!と叫び拍手が沸

き起こった。

凜一はこうやって誰彼とは構わず幸福を撒き散らすのだ。
昔からそうだった。

俺はそれが怖かった。

俺のものだけに出来ないもどかしさ、妬みと憧れ…無垢な輝きは俺を虜にした。俺は、誰にも見せたくなくて隠し通したかった。

だけど、初めから無理だった。暗闇に隠せば隠すほどに輝く光を、遠く彼方からでも、見出せない者はいない。

「俺と梓にとって…おまえこそが輝ける王だったから、梓はこれを歌いたかったんだよ」

「そうか…じゃあ、俺は梓を救えたのかなあ」

「ああ、きつと…」

スンと鼻をならした凜の目が潤んでいた。

今はもうこの子の輝きを隠したり、嫉妬を覚えたりはしなくなつた。

ただ守りたいと願っていた。その力が俺にあるのか、自信はないけれど…

「あ、雪だ」

「ああ、大分冷えてきたからね」

曇天の夜空を仰ぐ凜一と一緒に、立ち止まって天から降る雪を見つめた。

凜の冷たい手が俺の手を繋いだ。

「…さみしかった？」

上を見上げたままの凜が言う。

「ああ、とても…」

「でも、もうさみしくないよね。慧には俺がいる。俺は輝ける王なんだろ？」

「…」

「今まで慧はずっと俺を守ってくれた。今度は俺が慧を守る番だ。ずっと慧の傍を離れない。いいだろ？」

「…凜…」

「恩を返すわけじゃない。勿論恩を売るわけでもない。慧が俺を必要のように、俺も慧が必要だから傍にいたいだけだ。他に理由があるか？」

「…いや、充分だ…」

それだけ言うのが精一杯だった。流れる涙と落ちてくる雪が混じり、頬を伝った。

ペンテコステ、俺は確かに光を受け取った。

スーパーで簡単に食べられる食料を買ってホテルへ帰った。

凜一は狭いホテルに最初驚いていたが、案外いごちが良くて好きだと笑った。

ジャンや鳶谷さんに心配させた詫びを入れ、傍に凜一がいることを告げた。ふたりとも安心したようだ。

ふたりで小さなテーブルを囲んで、貧しいディナーを取った。

「明日はイヴだしさあ。豪華に高級ホテルで食べようよ」

ベーグルにチーズを挟み、口に入れる凜は食事に不服そうに言う。

「凜…知ってるだろ？俺は無職なんだよ。当分贅沢はできないし、これから凜を養えるかさえわからないんだ」

「うむ、急場の金か…俺はまだ未成年だから親父にたかってもいいんだが…そうだ。鎌倉のマンションを売ろう」

「ええっ？」

「あのマンション、俺と慧の名義じゃん。あれ売れば当分こっちで住むぐらいのお金になるだろ？」

「…無謀すぎるよ、凜」

「別にいいじゃん」

「凜、日本に帰る家がないと困ることがあるよ。おまえだってまだ

大学に行かなきゃならないんだから」

「俺、受験しない」

「え？」

「日本の大学へは行かない。こっちに居る事にする。まあ、卒業式には出なきゃならないだろうし、ビザやら色々手続きに帰らなきゃならないけど、こっちの大学の試験を受ける。英語も大分身についできたし、大丈夫だろう」

「凜……」

「文句は言わせない。どうせこちらに留学するつもりだったんだ。それが少し早まっただけのことじゃないか。紫乃にも相談してみるけどね。だいたいアメリカと日本じゃ遠すぎるよ。俺、ひとりにも飽きた。それにさ……鎌倉の家が無くなっても、俺たちには帰る家はあるじゃん」

「え？」

「俺には慧が、慧には俺が帰る家なんだろう？それで充分だ」

「……」

「それより……慧には謝って欲しいことがある」

「……わかつてる」

「いや、わかつてないね。連絡しようにもできなくてどれだけ心配したと思う。俺だけじゃない。ジャンも鳶谷さんも飯田さんだって本当に慧一を心から心配したんだよ」

「悪かったよ」

「独りだけで生きようとするなよ、慧。独りじゃないって思ってくれ。いつだって慧を思っているんだって、荷物は一緒に持ちたいって思っている俺がいるって、わかつてくれ。まあ、正直言えば、逆の立場だったら、俺も独りでどうにかしようと思う性質だから、今回の慧のことわからなくはないけどね。だけど他の奴らにかっこつけるにしても、俺には弱みを見せてくれよ、慧」

「……」

「……昔、すっげえ小さいガキだった俺が慧に言った言葉がある。不

思議なことに俺はそれを覚えているんだ。…慧は俺の騎士で俺は城になるって言ったんだ。覚えてる？」

「ああ、勿論だとも」

「俺はその意味を知っているよ。城は愛する者を守る為にそこにあるんだ。そして騎士は城を守る為に戦うんだ。違う？」

「…違うない」

「俺たちはお互いがいなきや生きられない不完全な人間かもしれないね。でも…頼るべき者とちゃんと愛し合うことができて幸せじゃん。だろ？」

「ああ、凜の言うとおり…だ」

「じゃあ、取り敢えず今日はここに泊まらせてね。シングルベッドだし、めっちゃ狭いけどさ、壊れないぐらいに愛し合おう。だって俺、慧に慈しんでもらいたくてたまないんだもの。それくらい報われてもいいだろ？」

「凜…ありがとう」

部屋のヒーターはここに来た時から、あまり利かなかった。だから昨日までは独りで震えながらブランケットに縮こまっていたんだ。今は少しも寒くない。

暖かいのは凜一の肌だけじゃなく、凜一がくれる情愛、いたわりや甘え…すべてが光となり降り注ぐからなんだろう。

窓の外の喧騒は深夜まで続いていた。

暗闇の中、絶え間なくふりしきる雪が屋根に積もる様子が見えた。俺達は優しく愛し合った。

終わっても眠らない凜一に休むように促しても、まだ眠くないと俺の胸から離れようとしない。

どちらからとなく話し始め、今までの事やこれからの事を語り続けた。

朝方ビルの谷間から、白々と明るくなり、街が銀世界に変わる様

子にふたり見惚れていた。

「夢見たいに綺麗だ…雲の上にいるみたい」

「雪は汚いものすべてを隠してくれるからね。それが一時だとしても…」

「雪が解けて、醜い現実が見えてもさ。目を逸らすんじゃなく、嘆くばかりじゃなく、人に揉まれて生きる。そこから美しい何かを見出すことも出来ると思うんだ」

「ああ…そうだね、凜」

小さな窓からの景色にときめいてしまふねとはしゃぐ凜を、子供の頃と同じだと揶揄った。

「俺には慧がいた。梓がいた。父さんも母さんも俺を愛してくれた。その愛が俺を育ててくれたんだから、俺は間違いなくAmazing grace（すばらしき恩寵）に違いない」

朝ぼらけに翳るう窓を背にした凜の瞳は一層の輝きを見せる。

俺を見つめる凜の背に翼が見えた。

…光を俺は手にしている。

生きる糧は輝くままに。

充ち足りた思いは明日の支えとなろう。

Amazing grace…

おまえが宿禰凜一として生まれた日、梓は約束の地へ導く者とおまえを呼んだ。

俺はただ…ただ、愛おしかった。

それだけだった。

ペンテコステ 完

> i 8 1 0 3 — 2 7 3 <

一応、慧一編は終わりです。

慧一編のこれからは凜一編で語られると思います。

長い間拙い文章を読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8100h/>

G L O R I A

2010年12月26日21時10分発行